望みの種子は二万年後に！！

1

島さち子

望みの種子は二万年後に　１

装画　島　さち子

望みの種子は二万年後に　1

1　狂雨・立っている水

確かに誰かを見たと思う、よく見れば、自分が映っている窓に向かって目をこらし、またよく見れば誰かがさっと隠れる、そんな交代で一晩は妙な具合に終わる。

薄目をあける、おれはソファーで眠っており日よけが降りていない、外に細かな塵が静かに舞っている。ベージュ色のおがくずのようなものが窓に向かって飛んでくる。夜、誰かを見たと思ったのはこの塊りでも飛んだのか？　車がざりざり踏み潰していく、火山灰？　黄砂？　窓のそばに寄ってみる。屋根の上にも、焦土に競って生えそろった広告の上にも降り積もっていて、道路はまるで地なししたあとのようだ。人はしっかりしない足取りでいく。母がドアを押し開けて転がるように入って

くる。
「これを見ておくれ、髪も服もこの変なものにまぶされて、大変よ。なんか泥臭い臭いだけど、一体なんでしょう？」
母の後ろからサンの顔が覗く。
「おばさま、枯葉だと思います」
母と彼女は同時に腕を拡げ、身をかがめて、おれに払い落としてくれるように要求するが、おれがどっちから先に払うべきか、とまどっているうちに、二人は女同士で互いに叩き落としてしまう。
母の頬にまだ一粒、おがくずのようなものがついている。とろうとすると、おがくずのようでありながら接着剤のような粘り気のある層をみせ、皮膚と一緒でなければ剥がれそうにない。
「そこでサンさんにお逢いしたの、わたしが、この変なものに足を取られて転んでしまったものだから、連れて来て下さったのですよ。それにしても何かしら、早く焼き捨てなければ……。悪質ないたずらか、実験か何かに違いありませんよ」
おがくず、にしては、ところどころ軟骨組織に似たところがあり茶色の細い縞が走っている。しかし細部に固執し観察すればするほど、おれにはその正体がわからなくなる。
「わたしは舟のなかに、こんな枯葉が積もっているのを見たことがあったわ。よく見るとそれは蛾、木くずに偽装した蛾に違いないわ」

外を見る、雲が何枚もの黒いベールを垂らしながら近づいてくる。暗い突風が吹く。母は手を洗って手先を水玉で光らせながら来る。その手で胸から腹のあたりを痙攣的に叩きはじめるが、すぐはしたない狂的な動きをした自分の手を恥じて隠してしまう。

「水かき！」

サンが叫ぶ。

おれは母に掴みかからんばかりにして、両手を前に出させようとするが母は手を堅く握ったまま後ろに隠して、死んでも出さない構えでいるのだ。

瞼を閉じ、唇に当分に散っていた皺を両端に寄せ、白っぽいしみを頬につくる。

「雨ですよ。傘をお貸ししなさい。一本しかないから、お送りして、傘を持って帰っていらっしゃい」

ゆっくりいい、顔を上げ、弱々しく眼を開き微笑しようとするが、口はゆがんだ、しかめっ面になる。

外はがぜん暗闇にかわる。

雨は百もの太い尻尾を振り回し叩きつける動物になってバラックを襲い、ガラスの向こうはしぶき、白装束の巨体が逆さになって深淵に跳びこみ、滝をくぐり、とんぼ返りをし、それを射止める千本のモリ。太いロープほどの雨が走る。

雨は、もはや空間の全部を水に変え、水のかたまりを筋肉の山に変え、爆撃後なんとか建てたバラ

ックを放り上げる。調子の狂ったとどろきは、次第に一定の反復のぎいぎいという音に変わり、大波を越えていく舟のゆれになる。

轟音、家の上下を跳ぶように突進するしぶきの音。しぶきの巨大な尻は、一塊りの混乱になって回転しユーターンし、白く泡立ち雨を噛んでぎらぎらする。

手探りしている触手のように、母とサンの腕は双方からおれに巻きついてくる。おれだってこれほどの大雨にあったことはないし、北極光のような夜空の昼を過ごしたこともない。

おれは内臓の全部を吐き出しそうな深呼吸をし、女達二人は主人の足元に甘える犬のように、おれにすがりついている。外の荒れよりも、そのことが気がかりになる。蝿が弱々しく飛び、おれの鼻先に止まる、かすかな足先が鼻にささって痛い。雨は幕のゆれになる、優しいゆれだ。

母とサンの顔に怖れがくっきり刻まれている。

「何を怖がっているんです。大丈夫ですよ」

おれはなめらかな響きのいい声を出している。

雨があがる。ほっとすると睡魔が襲ってくる、もう我慢できない、三人はお互いの存在を確かめるように、そのままの姿で欲とくもなく眠りにおちる。

気温が下がってくる。

陽が照っている。

外が揺れている。

サンが帰ると言ってドアを開ける。途端、開けた出口がふにゃふにゃに曲がったかと思うほどに、外がぶんぶん揺れる。彼女の膝下ほどの高さの水が、揺れながら家のなかに流れ込みもしないで立っている。

水が塊なのだ、凍ったのではなく、柔らかいのだ、おれは息を殺して見つめる。

「指でつついて見た？」

「ゼリーそっくり、匂いはないわ」

「浸水しないのがおかしいくらいの降り方でしたよ。助かりました。でも、これは呪いですよ！」

地面は今、豊かな滑らかさで光り鎮ずもっているが、まだ残っている嵐のそよぎがきて、ドアの前の水面から光が天井に飛んで漣をたてる。

外に出るのを、ためらってしまう。ゼラチン状のものが薄い皮膜のようにあって、おれが踏んで破れたりしたら、その足跡から水の噴き出す可能性がある。どうせそういうきわどい状態で浸水をまぬがれているのだ、薄氷一重の僥倖にすぎない。

家が浸水することになったとしても……おれはゼリーのなかに一歩二歩三歩、跳ね上げるような弾力を踏みこわす。ゼリー状の水は半透明で押されるところを凸面鏡にし、まわりをつややかな光のド

ウナツにし、輪がずっと盛り上がると、ガラスにひびが入るように裂けていく。
おれが歩く後からサンが靴を持った手を水平に広げて続いて来る。ズボンが足にくっついて重い、パシッ、吸盤に吸い付けられたものを抜き取る感じ、何処までも続くゼリーのぬかるみだ。
前の家にある古びた車にエンジンが入っていて、その震えが、るるるるると小さい波になって、おれのところまで及んできて、割れ目の下のふくれて屈折した足が、細かくぎざぎざに動く。
サンは虚脱状態に陥って、くぼんだ目の汗を手の甲にすり込み、動こうとしない。ゼリーが全部人肉で、おれを支柱にして付着し、おれを乗っ取ろうとしているようだ。
「きみの裸の脛にこの感触はどんなだい。途方も無い性器の深みに足を踏み入れたような……」
ゼリーの地面に煙の幕のような陰りがくる。
痩せた犬があえぎあえぎ、ゼリーの塊を頭や背や尻尾にぶっつけながら来て、奇妙な叫びをあげる。犬が割っていくゼリーは割れ目で食い違いを見せてくっつき、風が吹き渡ると巨人の鼻息のようなあえぎをつくる。ゼリーの底で地を蹴る、きらきらの光がざくざく生まれる。この視点から見ると、地上に落ちたペンキのかけらは、ゼリーの割れた面の万華鏡によって、果てしなく華麗な模様をつくっていく。
「汚れると水はぶよぶよするから、大変な汚れ方をしたせいかと思うのよ、あれが全部溶けてしまったからなのね。こんなことってある？　気味が悪い、足に誰かの生肉が張り付いているようにぶるぶ

るするのよ」
　彼女はまるでテーブル掛けの縁飾りのように、スカートの裾にゼリーの塊をくっつけて竦みあがる。近くにある車の周りで、中年の男がスコップを匙のように動かして、おれのいるのもお構いなしにゼリーを投げてくる。
「太陽が本格的に輝いてゼリーを乾かせば、そのうち縮んでかさかさになるでしょう。そうまですることないじゃありませんか？」
「そうまでだって？　とんでもない甘さだ、この町に昨晩、またも、爆撃があったんじゃないのか？今でも引き続き大変な戦場なんじゃないのかい？」
「あのおがくずがですか？」
「ゼリーが膠のようにかたまったら、車が動かなくなる。木も草も芽を吹かなくなるだろうさ！」
「……地球も水かきを持つことになるんでしょうか？」
　また空が暗くなっている。ふるえるゼリーの割れ目が空を映し、大きく黒い虚空が足元に口を開く。
「おぶって、あげようか？」
　サンはおれの方に首を捻じ曲げ足をゼリーにとられて転ぶ。痛みもかすり傷も心配いらないが、手までゼリーに取られてしまう。
　家のなかで、テレビがみごとなゼリーの大平原を映している。作物はゼリーの中で穂を開き、名も

知れない鳥がゼリーの中の実をついばんでいる。
「……早急にこの物質の分析に着手する予定であります。熱射線、給湯器、ブルドーザー、ショベルカー、散水車、除雪車、消火器、バキュームカー、その他機動力をフルに動員して、主要道路の交通を短時日のうちに正常に戻す予定でありますが、何分にも、粘着力があり、作業はなかなかはかどらない模様であります……」
少しづつ分かってきつつあるが、敵の正体、何処の国の、誰の仕業かの発表がない。この国が、いかに幸福呆けし、無防備だったとはいえ、半年前の突然の爆撃さえ、いまだに、敵の絞り込みも出来ていないのだから……。
「怪しめば、どの国も、どの国も限りなく疑わしい。やられているのは、この国だけなのか？　他の国はどうなっている？　みんな無事なのか？　それもわからないか？……」
「報道管制がしかれているんですよ。ＩＴ国家も電子国家も、笑い話のように一瞬にして消失したじゃない、わたしたちの拠りどころなど、何処にもないのよ。これでは、食糧不足がひどくなりそうだわ」
苦労ばかりで際限も無く落ち窪んでいく母の眼。
「わたしは疲れてなんかいません、眩暈もありませんよ。でも、腹が立って腹が立って、それで熱が出たんでしょう。休ませてもらいますよ。怒ってもしかたがないけど、とにかく、フェアじゃないわ。

こんな、柔らかい戦争だなんて！　怖さは、今まで経験した恐さと違いますもの、どうにもなりません！」
母が両手をあげ、絶望で体を細めて引っ込むと、サンはおれの手の関節がはずれるほど強く握りしめてくる。
「外のゼリーの上を風がどんな風に流れているかなんて、そんなことを考えるのはやめましょう、恐ろしく馬鹿げたことよ。あの爆撃機は無人飛行機で、レーダーにも引っかからなかったんだそうよ。任務が終わると海に消えた、そうとしか考えられないんだって、うわさよ！」
「そう、そんなところかなあ。で、これも一続きの戦争なのか？」
サンはおれに体を摺り寄せ、いきなり、おれの足を踏みつける。
「痛い！」
「こんな日には、生きている証拠を見たいのよ！」
サンは体を傾けておれを見つめる。彼女の髪がよじれ、顔を隠して中央に垂れ下がる。おれは後ろを振り返る。物音がして、思った通り母が影になってためらい部屋に入りかねているから、変なもどかしさがこめかみをかすめ、反動のようにサンの腕を引き寄せてしまう。
静けさが紺色に広がり、サンは薄い燐色のしみを浮かべて甘ったるい息を吐く。
「おお、青い足！　青い足じゃないの？」

母の叫び声。
おれたちはソファーに座り直し、黙って陰気に耳をそばだて、ゆっくり退いて行った母の影のあたりに眼をこらす。それから、ふうっとサンを見て、それから全力で見つめ直す。
部屋のなかは急に暗さを増しており、彼女全体でなく、足だけがいて、燐光を発し、膝に膝を重ねる形で片足を前に出し、出している足を後ろに引っ込め、三十センチほど離して横に並べ両足をすんなりぶらさげ、ふらふらさせ、双方近寄って同時にかかとをおろし、つま先を広げる。
どんなにあり得ないことであっても、眼前で起きている限り、それを信じるしかない。切断された足を運ぶ重みと足の体温を、この部屋の床が感じてただよい、おれの足がばたばたする。青白く光るサンの足が寄って来ると、おれは逃げるから、光る足は二本の曲線を従えてぶつかり合う。
「やあだあ！　どうしたのかしら？　どうしたんでしょう？」
彼女自身も光る足から逃げて慌てふためいている。
「怖いなら、困るなら、足を見ないことだ！　眼を閉じるんだ！」
部屋の照明をつけ、その原因を考え、七八秒目をつぶって襲ってくるサンの足を警戒するが、そこには今、死の階段を駆け抜けてきたという顔付きの彼女がひとり息をはずませており、今、腐肉になりかかっている足を改めでもするように、掴み、つまみ、つねり、分解していく腐臭でも嗅ぐように顔を近づける。サンは前こごみになっている姿勢から立ち上がる、目をやや斜め上に据えて操り人形

に似た足取りで前に進んでいく。
「克！　これがわたしの足かどうか？　足が本当のわたしかどうか、見てくれる！」
サンは声を押さえ、含み笑いになる。サンは外を指差している、部屋が明るすぎて、おれには何も見えない。窓を開け顔を出すと外は緑がかった白い光。ゼリーの層が光を発し、何処かから伝わってくる響きのためだろうか、あるいはその中に動く蛍光バクテリアでもいるのか、顕微鏡の中の、うようよした微生物のようだ。一面、薄緑の光のなか、特に強い光の粒が飛び、痙攣し、抽象的な図形をつくり、煙るようにさまよう波動を見せ、くねくねとした重い動きを見せもする。
限界というもののない広がりに、生命のおよそ最低の形式である生物が、一挙に地球を屈服させる闘いをめざして現れ出た。戦いの痛みの続く町の青白い悲劇に、おれの孤立や絶望は止んでしまう。
「わたしネ、洋服の裾の汚れを拭き取ることに夢中で、足をよく洗わなかったの。あなたはズボンを取り替えたみたいだから、光らないのね」
「一体何がおこったのだろう？　とりあえずどう対処すればいいんだ？　分かったら、教えて欲しい！」

2　幽鬼の子

体を柔らかいぐにゃぐにゃしたものにして、青白い光を付着させながら、夜中を駆け抜ける。子供達は頭まで光にして、全身で幽鬼の子だ。

ゼリーは光るもので中からゆるく分解しはじめ、量が大分減って粘着力がなくなっている。

こんな夜は何時の夜より、のびのびできる。どうせ町じゅういたるところから、足をとられた叫びがあがっているのだ。人通りの多い大通りに近づくにつれ、ゼリーはゆるんでぞろぞろした半流動体がかり歩き易くなっている。サンが先に立っていく軟らかな足音、その足音に続く男達の足音、こんなしっとりとした足音をたてたことがあったか？

おれたちのズボンを捲り上げた膝から下が青白く浮き上がって、幽霊達の置き忘れた足たちが、超現実的映像になってゼリーを除いた坂を駆け上がる、見事な線模様だ。

晶が蛮声をあげてリズムをとり、もう一度下へ逆戻りするいたずらを見せるので、影よりも薄く所在無いおれたちの体が含み笑いをする。

「ボクサーになるトレーニングでも、やってるのかい？」

誰かの二本の足が止まる。白い杭を打ったようだ。
「どうした？　傷跡がうずくのか？」
晶が燐光で立った足と少しはずれた位置の暗闇から声を出し、広は足を青白い線にかえて駆けていく。
おれの後首のあたり、黒い手に掴まれて皮を剥がされていくような妙な感覚がある。その黒い手は、おれの燐光を発している足の持っている手に違いなく、おれはそれから逃れるために足を動かすという惨めな逃亡をしているようだ。光る足があるという意識、一つづきかどうかわからぬそれを結んで体を連動させていく意識、こんな意識はみんな、常ならば病気そのもの、それは逃亡ではなく病気を虚勢にして坂を駆け上るやりかたなのかもしれない。運動の後の熱さと冷えが、二本の触手でなぞるようにさわさわとくる。両目を見開いていると、どこかの爆発が、遠すぎるために音はこないで爆発光だけがきて、目の深いところまで入って拡がる。おれは胸で手を組み、じっと動かずにいる。八本の足の影の薄い存在である四つの体から、なんとも言えない音が生まれている、空腹のために鳴るひもじい音。
ゼリーが砕かれて発光する帯になっている地面を、坂の上から晶は指差すが、指す手だけが所在を明確にして黒く薄色の空間に突き出る。
「昔は何でも口に入れたもんだ。雪が美味しかったように、ゼリーの綺麗なところを選んで食べれば、

食べられると思うけど……。本能的に光を恐れているんだ、あの頃ほど純真ではないからな、たわむれに口に入れるわけにもいかない」
「ヒカリゴケを食べて美味しかったという記憶はないか？」
誰のいたずらか、とがった鉄のてすりの一本一本に丸くかためたゼリーが、妖精的なヒカリをともしている。地上は四方八方に揺れたり、ひび割れたり、燐光は疲れも見せずに成長し、根を張り枝を伸ばしているのだ。ゼリーを除いた幹線道路がわずかに黒い。
「心配しないでくれよ、おれはおれの足を拾おうとしている、傷がうずきそうな気がするんだよ。気がするだけのことだが……」
広はかがみ込んでいるらしい。大腿部に爆弾の破片が残っているのだ。右足が男で、左足である女を一蹴りして見る。おれたちの光る八本の足、どの足とどの足が対であるのか？
「足をこすり合わせてみろ！　光がとれないか？　」
「五六秒もすればお前達の両足の闘いは終わるさ……おれの足、消え失せたいんだよ！　本当なんだぜ！」
「足だけが見えるなんて象徴的でありすぎるんだ。今見えるものだけが、おれたちに残ったものの総て、逃げるにしかずか？　教えてくれよ？　このゼリーを、こんなふざけた食えないゼリーをつくった奴は誰なんだ、その目的は？」

「全貌は何時だって隠されている、敵であることも、味方であることも、やはり、おれたちの意志とは関係ないんだな。いくら、この国の人々がのうのうと幸福呆けしていたにしても、あの破壊からようやく立ち直ったばかりだというのに、またも用意されている悪意！　おまえたち、これを放置できるのか？　おれは我慢ならない！　どんなことがあっても！」

晶に広が低い声で答える。

「いまゼリーをかき集めて捨てにいくトラックが、この次はおれ達をかき集めて捨てにいくだろうよ」

空中で、乾いた音が跳ねる。

「ああ、ネックレスを壊してしまった。でも、わざと壊したのよ。どうぞ、ものによっては食べられる。かち栗をつないで首にかけていたんだから、素敵なアクセサリーでしょう！　あそこでは、春、幾つもの山が、丸ごと、栗の花の黄色で膨れ上がるのよ。あの匂い、もう、思い出すだけで、くらくらしちゃう！」

サンは栗を糸から引き抜いて、放り上げているらしい。

「うまくキャッチして御覧なさい。猫目か鳥目かわかってくるわ」

皮の中で皺に囲まれて縮まっている実に歯をたてると、甘さが滲みでてくる。

栗の実を探って、何本かの足がばらばらになって滑る。

「みんな自分の足さえ、押さえることができないのか？」

おれは彼らの光る足に蹴られはじめ、それを避けて動き、反対側の坂の下へ駆け降りるが、何時のまにか先回りした彼ら三人とそっくりの足が光を発して、坂の下に佇んでいる。そこから十メートル先にも、二十メートル先にも、百メートル先にも、待ち伏せしている。

「おい、何がしたいって言うんだ、何だって、おれの行く方へ、先回りをしている。そんなことをして、一体なにが面白いんだ！　おれにおふくろがいることか？　職探しをしていることか？　そりゃあ、見上げたことじゃないだろうが、だから、どうだっていうんだ。大学なんて何処かに消えてしまった。おれは、ひねこびた高校生みたいに、ふらついてはいられない。こんな世の中なんだ、何時もと違う侮辱の種があるはずじゃないか！」

おれは支離滅裂の叫びをあげ、その光る膝から八十センチ上と思われるあたりを掴むが、それは女の膨らんだ胸部で、サンとはまるっきり違う女の声が、がむしゃらな悲鳴をあげ、おれの目と目の間が砕けて、悲鳴は後頭まで突き出てしまう。悪寒が来て振り向けば彼らの膝下だけの足が、蛍光を発して追いついてくる。

「克、ここはもう、人の住むところじゃないわ。山にいきましょう！」

「行くと安泰なのかい？」

「ここよりは少なくとも、でも……、苦難が好きなんじゃなかったの？」

「気まぐれなのかい？　栗の実のなかには、グロテスクな長虫が体を丸くしてひそみ、皮のなかは虫

の細かい糞と卵で一杯に違いない。みんなで虫の巣になって立ち、海綿状の白骨になるか？」
おれを遮って晶が声を高める。
「ここにいても、おれ達、骨まで自分をしゃぶる同じ運命かもしれないよ。おれの親父はね、三日間シャックリをしつづけて死んだ。平穏な時代でさえ生きているときには考えも及ばない、滑稽な死にざまが用意されていたんだ。まして、こんな世の中、どんなおかしなことになっても、おかし過ぎはしないさ！　おれ達、このまま黙っていていいのか？　何も出来ないとしても、身を護ることくらいはしなければな……。山に行くのに、僕は賛成だ！　この国の政治から、見棄てられた村が生き残っている筈だよ。見棄てられた為に生き残っている老人の国が！　北は官憲に追われて、山に入ったよ、嫌、山に入ると言っていたよ」
「北も行ったか？　なら、おれたちも行こうよ！　なあ、克！」
「さあな……」
「わかった！　克は、おふくろが心配なんだな！」
広がおれを振り返る。
おれは歩みを止め、あたりの闇をゆっくりと見回す。このあたりはまだゼリーの発する光が強く、一人一人の人型が認識できるが、顔はみんな底知れぬ穴に見える。死んでから死に様を見比べ、批評しあっている死者の群れに見えるだろう。お互いが見えながら表情が読み取れないから、話す気を失

ってしまう。
「じゃあ、また、あとでな！　考えておくんだ！」
三人は何か、おれに対して怒っていて、おれを振り捨てるように、短い言葉を残して行ってしまう。
我が家の方に曲がると、路地が特別青白く輝いて拡がり、足の下から続く神経が電気的なしびれをつくって登ってくるから、おれは、むやみに歩数を多くして、ぐちゃぐちゃにゼリーを踏みつける。

3　そろそろ火葬場に向かいます

やはり細菌兵器だった。ゼリーのなかで細菌が大増殖をする。細菌にくらべたら人間の生なんか、あどけない。複雑な動悸がきて、発熱し、髪からは光の糸が噴出し、眼に光暈が生まれ、体から後光に似た光が生まれる。光る病原菌は肉体の実質を濾過しつづけ、生命の実体が病原菌自身であるかのように、きらめき、宗教画めいた半幻覚をつくり出す。
おれの体中から不健康な熱が湧き、火があるようにかげろうが額の上で透明な揺らぎをみせる。

もう、おれの一生は終わりになるらしく、体中穴だらけ、曲がった穴、行き止まりの穴、体の向こう側に突き抜けていく穴、もうでこぼこで、おれの本体は体の穴の窪みに、少し含まれて洩れないでいるという状態なのだ。

「克、おまえが、先に死んでしまったら、わたしは何処に行ったらいいんでしょう。お前に寄生する魂になる他、わたしには、もう行きどころなんてないんですよ」

母は、おれから1メートルほど離れたベッドに、横たわっているが、汗と口臭を共有して、へばりつき合っているように、おれの重さになっている。

「こう思っておくれ、わたしの呼吸が止まるとき、おまえに始めて魂が入ることになるんだと。もともと、わたしがおまえを、はらむとき、魂を入れるのを忘れてしまったのよ。だから、おまえという、からっぽな場所があって、わたしは迷わずに死んでも行き場所がある、そう思っていますよ。わたしが今まで頭を悩まして来た、おまえの魂の問題がこれで解決するのね。そうなったら、あのサンさんは、どんな慌て方で、おまえから逃げて行くかしら？　おまえは二十歳と五十歳の女をくらべていましたけど……」

「母さん！　面白い逃げ場所を確保したもんだと、母さんを、褒めてあげてもいいですけど……。でも、残念ながら、おれが先に死にますよ。おれはトリモチにくっついたセミのように、どこかにじっと潜んでいたいのだから。こんなときは目覚めたり、眠ったり、ピクついたり、動かなくなったりしてい

れば済むはずですから……」
「克、おまえは、おしまいまで、出来るだけ大きな眼を開けて、わたしを見守っていておくれ！　おまえの目から魂が入れるでしょうね……。そんなことになったら、おまえ、疲れるかしら？　まあ、いい、お互いの顔を、好きなだけ見守っていましょうね。でも、こんなとき、誰か来てくれないものかしら、寂しいじゃないの。あのおまえに気のありそうなサンさんでも構わない、誰かもう一人いてくれたら、こころ強いわね。あんな外人みたいなお嬢さんに、ちょっと逢うという恐怖も、寂しさよりは、増しなんですよ……。あら、おまえの幽霊はどうしてふらふら、栄養をとりすぎた、太ったカマキリみたいな格好をして、そこに立っているんです？」
　それは、いま眼がくらんだから、おれの額のあたりで病原菌が花火ほどの爆発をしたせいかも知れない。母はむやみに話し続けるが、その口からも湿っぽい球になって、燐光が洩れ出ている。
　生きたいという思いばかりが来て、おれは体をベッドから引きずり出し、もう十回も１１９番を叩きつづける、単調なツーツーと続く音を蹲って聴き、どんと不吉な思いがきて、受話器から飛び退く。家中の照明という照明をつけてまわり、バウンドし駆け回る燐光の球を消してしまわなければ……。
「ニュースを申し上げます。……死者はすでに六百万人に及び、患者は民間調査機関発表三千万人、警視庁発表百二十万人にのぼり、医療団は救急班を組織して重病者を対象に診療活動を行っております。なお、死体の火葬は毎夕六時より指定の場所にて行いますが、死体搬入は一時間前に締め切りま

す」

「聞きましたか？」

ニュースを聞き、おれは、慌しくまたベッドに倒れ込む。何千万、何百万の人間が同じ日から、同じ病気になり、同じ苦痛を与えられて、一緒に死に、葬られる。何千万人が殆ど一人に等しくなるという事実が立証される。おれや母が、これほど社会の懐深く人々と共存していたことが、かってあっただろうか。空想の偽りでなく、社会の愉悦にみちた構造として……。

おれには命にも自由裁量権のようなものがあると信じていたが、間違っていたのだろうか？　人々のかかわりは、ほんの体の、もろさを偽るためにだけある、薄いコートみたいなものでなくてはいけない。

コートをはおるだけの社会とのつき合い。この病気とのつき合いは、とどめて終わりにしなければいけなかったのだ。海綿ほどの穴から、穴の奥まで共同体のために侵され、共同の運命を避けるためには、もう体の底まで剥落しなければならなくなっている。おれはただ光ったズボンを洗ってアイロンで殺菌して、それでおしまいだと思ったんだが……。こうやっていると、おれ達は死のブランコに乗って、連れて行かれては運び返される動きを続けることになる。

「克、道の向こうに、どっかりと地平線が見えているかしら？　何時かみたいに、るいるいとした死体でつくられた地平線が……」

「さあ？」
「聞きましょうか。こんなに静かでは心細いから、音を最大にしてくれますか！」
おれは立ちくらみして肩でラジオのスイッチを入れている。
「全力をあげて死体埋葬活動を行っておりますが、何分にも人手が足りません。重傷者でもうすぐ駄目だと感じたかたは、出来るだけ死亡予想時刻五分前に火葬場に到着するようにお願い致します。
ただし、あまり早く到着しすぎた場合は、生きているうちに火葬に付される怖れがあります。遅刻も極力避けるようお願いします。なお、火葬場以外のところで死亡されますと。処理に時日を要し、腐敗し、ハエなどの発生の原因となり、国の衛生行政上の危機を招くことになりますから、特にご注意下さい。もうすぐ命の火が消えるということは、動物でも自ら察知する能力があるといいます。人間ならば動物以上の知恵と理性によって予知できるはずであります……」
「おれはもはや火葬場に向かって歩き出さなければならないようです。母さん、母さんの診断ではどうかしら？　自分の命は自分が一番よく分かると母さんも言ったでしょう！」
「火葬場に自分からいく病人など何処にいますか。これ以上この国の衛生状態など悪くなりっこありませんよ。わたしたちの死骸は腐ると白骨になります、白骨はいつだって臭気も汚水も出さないんですよ。皮膚のぼろをぶらさげて、ぞろぞろと放射能の瓦礫を歩いていた、お化けの人間の集団という、大戦争のすごさとも違いますもの、二人で妙な横着さでここに寝ていながら、こんなニュースを聞い

ていることです。ここで寝たまま死んでしまうのです。徴兵礼状をもらって戦場に死ににいくやり方を火葬場まで適用して、生きているうちに、死に向かって行進せよ、などとの命令。わたしは絶対服しません。この期に及んで、何で社会国家に奉仕するものですか、国が何を護ってくれたというんです。もっとも為政者に迷惑のかかる死に方があるまいかと思案する、そんな労力だって惜しいことですよ」

俺はベッドに寝て静かに眼を閉じる。

「克！　あまり縮んで寝ていてはいけませんよ。大きくゆったりと大の字になって、ベッドの上で、せめて、ぬくぬくと安楽に死にましょうね。わたしは克がそばにいてくれるだけで、満足なんですから」

「おれは縮んでいなければつらい、安楽に大の字だなんて、母さんはよくなったのかもしれないな。おれは早くどうにかなりたいから、そろそろ火葬場へ向かいますよ。腐るのなんか嫌だ、母さんを困らすのも嫌だし、自分で自分の始末の出来るうちに始末をしなければ恥ずかしいから……。母さんが全快しても、すぐに、おれを葬ってくれるという気力が出るはずがありませんよ」

「克は見栄っ張りなんですね、わたしに死体の処理をさせたくないだなんて、他人行儀じゃありませんか……」

時は刻々刻んでいる、どんなごまかしも休止もなく、二人の容体は悪化していく。耳障りな音は、

病気が胃を握りつぶし、じゅうじゅうと液を搾り出す音、おれの体のなかで命の引き算が手早くやってのけられている。もと教師の母は、不思議に泣き言を言わない。大きく眼を開いてはいるが、おだやかで、本能的な死へのもがきすらない。

「あの大戦争が終わったとき、お前のお祖父さんやお祖母さんや、叔母さんたちは、これで、もう、戦争は終わった。二度と戦争は起きないと信じたんですよ。でも、人間が理性的に成長するなど、夢にすぎなかったのですね。若い人は経験がないから、こんなことなどあり得るものではないなんて思い、なべて普通にやって人生にどっかと腰を据えていれば、少しは故障があっても、なんとか生きられると思って、たかをくくって来たに違いありません……」

声はささやきになり、次第に唇が震えるようになり、意味が希薄になっていく。もう、この時刻、灰色の顔色に変わる光線の具合もあって、頬骨を皮膚がぴったり包み込み、鼻筋までとげとげしく見せ、母を一段と痩せ細らせる。眼が青すぎる。貧血なんだな、母は大きく開いていた目を閉じる。

「克、母さんを安楽にしてくれようと思って……。お茶のなかに睡眠薬を入れて、飲ませてくれたんですか？」

おれが否定の首を振るのを見る前に、母はそれを見るものかというように、固く目を閉じてしまう。重そうだ、母の寝具をはいでやると、おれの体のなかで百万匹のホタルがいきなり輝き出して目がくらむのだ。

「おれにしたところで、睡眠薬が飲みたいんですよ！　母さん眠れるなら、眠るのです。眠っていて下さい！」

戸棚のガラスに写るバラ色の空から、おれのほの白い影がこの世でない足つきで来る。濡れたタオルを頭において、おれは外に出る。

この町に残された何万軒かのバラックや、古家で、親子、夫婦が、心中のための毒薬を飲み干したあとのように、枕を並べ、病み疲れ痩せ細ると軽々と線香の煙のように立ち上がり、半死者となってふらりふらり合同火葬場に行進していく。

おれはただそれを見に行くだけなんだ。まだまだ死までの時間はある、どの企業も、死者に向かって広告してどうなる？　この、けばけばしい広告の前を、揺れ動いていく頼りない足つき。女たちの膝の関節は、こんなにも妙な位置に大きく突起しているものだったろうか、膝の関節の突起をはさむことによって、木片のような両足の骨が、こんなにも外側に遠ざかって立つものだったろうか、膝と踵と、ももをつけると、綺麗な凸レンズの隙間を三つ残して、曲線が美しかったはずではないか？　肉と脂肪が高熱で燃え切ったのだ。燃えきったあとの体が火葬に出来るのか？　とりあえず参考までに見届けなければならない。

もう乾いたタオルを捨てて、手を開いたままおれは彼らの間を通り抜ける。ただ見に行くだけのこ

とだから、列に入らないように気をつけるが、いつの間にか、おれの歩幅と丁度同じに歩く誰かの背の一点にぼんやりと目をおき、同時におれの背中をぼんやり見つめながらくる誰かのいることに気づいて、そんなぼんやりとした目が背から背へ、チェーンになって続いていることが気がかりになる。

おれの目玉は熱っぽく浮いて、はれあがった奥歯のあたりから細くよじれた血管でつながっていて、歩いて行くうちに細い血管は切れてしまいそうに動き、おれの目玉は、ぽっと吐き出す息の玉のように飛び去っていきそうになる。おれの視野がまるでストローから覗く程度にせばまっており、その穴の先に見えるものに引かれて、ただふらふら進んでいく。

「何処にいくのですか？」と聞いても、周りからは

「火葬場へいくんです」の答えしか来ない。

「あなたはもうすぐ死ぬんですか？」と聞いても、

「ただちょっと、どんなか見に行くんです」という。

「あなたは？」と問いかえされるから、おれも、

「ただちょっと、どんなか見にいくだけです」と言う。

その隣の人間も、その前を行く誰かも、

「みんな、ただちょっと、どんな様子か見にいくだけなんだ」

そうなら安心だ。みんな仲間じゃないか、火葬の手伝いをするほどの体力がないから、ちらっと見

るだけで逃げて来ようと思っていたけど、一休みしながら見物をして来れるというものだ。前に垂れ下がって来る髪をはらい上げると、熱で焦げた涙のフタがとれたように、目が晴れて、薄青い車がぶよぶよ動いて行くのが見える。体を折り曲げながら、それをよけようとする人々が、一本の綱で繋がれていたという形で一度に転倒してしまう。そしてそのまま水から引き上げられたクラゲのように、べったりとして眠ってしまう。おれは転ばずに踏みこたえているが、破れたズボンの裾が長く伸びていて、倒れた人の下に入っており、引っ張ろうとするが、何故かとれない。

「失礼……ちょっとどいて下さい」その人物は俺を見上げるが、白い目に弱い陽を入れて、くしゃみかあくびか口を半分開けて首を傾げる。

おれは体を折ってその人物の下を探るが、その人物の足がもつれて妙な具合に体の下に入り込んでいて、靴の下にはガムや小石やクギがあって、それにおれのズボンの裾が複雑にひっかかっているらしい。念の入ったことにその人物の下のコンクリートがぐんぐんと盛り上がって、その人物を吸いつける。おれをも吸いつける。

よく見れば、その人物はおれの足に重くのしかかる死体なのだ。倒れている者全部が死体に違いない、雲が泳いでいる。ここは死者から成る忘却の地層。おれは死者のかたまりに嘲弄されている。

「おまえは得体の知れない死者の重みのせいで動けないと思っているが、押さえつけている握力はお前自身の握力だ、だからこそお前は絶体絶命なのだ」

こんがらがり一部で引きつって、一部で無力なおれは、死者の層から脱出する、すさまじい痙攣をしている。ここはもう合同火葬場であり、巨大な扇風機にあおられるように髪がなびき、蛍光が体のなかから抜け出ていく炎の上昇、熱に燃える内臓がじたばたし、おれをひょろ長く伸ばしては、きょろきょろ首を回転させる。

「見物しに来ただけだけなんだ！　まだなんだ、まだ死の予感はない！　おれだけでなくみんな死んじゃいない！　おおい、みんな、死の仮面をつけるなんて危険すぎる。冗談だぜ！　見物に来たんじゃないか！　冗談だろう？」

もうこの広場から高く薄紫色の煙が立ち登っていく。眼のさめるほどさわやかな煙の色。これが鼻を刺すしたたかな現実なのだ。

4　密生したクモ糸

突然に大看板が、陰にいる人間の足で歩き出し、車が腹を上にして回転しながら火を吐き、舗石が

微塵になってとび、青空のポスターが赤い筆で地獄絵に塗りかえられ、人は頭を押さえて伏せる用意をしていた。異常気象が続き、北極の氷は溶解し、海面は上昇し陸地はけづられ、島は次々姿を消していたのだ。人間は信念や執念のために人間爆弾になって、大勢の人を巻き込んで死に急いでいた。太陽はくらげのような足をもって、青黒い空を横泳ぎし、空気はすっかり毛深くなっていた。何年も前から見方によっては変なものが際限もなく見えていたのだ。毒ガスに押さえ込まれたり膨れ上がったりする中毒死……。人間は内に篭り、パソコンを叩きつづけ、自然は顧みられず、進歩の名において侵されつづけていたのだ。おれは以前に遡のぼり、こうなってしまった変転の全貌を捕らえようとするが、根幹で気が抜け、細部で誤魔化し、故意か、高熱のためか、震えて何もつかめない。

気づくと、サンが背を丸めて何やら煮込み、しゃもじで掻き回している。

「そんな古風で家庭的な柄では、なかったはずだ。きみはいったい？　何を……」

「これ以上美味しいものはないのよ。煮え立つと、掬い上げるわたしの手は手首から溶けそうになるの。これからが大変、これを人肌にさます間、細かく気をつかわなければならないのよ。今は三個しかないのだけど……」

サンは顎を前に押し出して飽きることなく鍋のなかを覗きこみ、生き生きと歓喜の声をあげる。おれは魔女に自分と母の心臓を煮込まれているような変な感じにとらわれて、空洞の胸に反響する低音で聞く。

「三個だって？　何を煮ているの？」
「一つは克の、一つはあなたのお母様の、一つはわたしの、わたしも一つ欲しくなったのよ。なにしろ美味しいものだから……」
「三人分の心臓が、おそらく薄紅色の液のなかでとろとろ煮込まれているんだろう？　ね、そうなんだろう！」
サンは息をあまりぷうと鍋に吹きかけてはならないと、喉を締め付けて笑うが、決して姿勢をこちら向きに回すことはしない。おれ達が病気のために脱力し、あきらめきった状態にあるのに、彼女の生き生きとした仕草はなんだ？
それでもおれは彼女にしんみりとした感動を覚えて、瞼のあたりを細々とした皺で動かし眼を開けようとしない母と、親子にだけ通じるやりかたで顔を見合わせている。
「あの火葬場はどんな様子になっただろうか？　今日の分は片づいたころだね」
おれは寝ていながら、なおも倒れかかる、やっぱり無残な現実のなかに入り込んでいたのだ。
おれはこの時間から一目散に逃げ、夜のなかに紛れ込んでいる闇。打ち震えながらも死者たちから抜き取った心臓を一つ二つ三つ四つ、涯てしなく飲み込んでいる。冷気。もう少したくさん、百一百二百三……、おれはともすれば脇にのいて、おのれの闇の恐るべき眺めに目を据えているのだ。煮込まれた木の実、おれは眠っているうちに、これを口の中に注ぎ込まれ、呑み込み続けていたに違いなく、

実に不快なかたちで現実との結びつきを取り戻している。
「どうしたの？　さっきまでがつがつしていたのに、……髪も目も白い娘がつむじ風にふわふわしているわ。運命の変わり易さは我慢できない、運命など屠殺場送りにしてしまいたい！」
「運命をなくするだって？　運命をなくするってことは死ぬことだろう、死に運命を固定してしまうなんて、大変な運命の激変じゃないか。この木の実は毒薬なんじゃないだろうね。水が欲しい、水はないか」
　届く限り手を遠くに差し伸べる、胸の前が大きく開いて肌が寒く痛い。これはおれのほころびだ、ほころびた喉が鳴って昏睡状態がもう一度来そうだ。空は青の下に何枚もの白いしっくい塗りを隠していて、空がはがれて墜ちはじめる、おれは高熱のために震え、悪寒がおそって、空を着込んで、寒さに震え熱さに震え、空をはぎ、空を着込んで重くなる。病気が続くのなら、早急に魂だけになって飛翔するため、精神を集中すること。
　今まで口のどこかに潜んでいたのか？　丸いものが舌の上に転がりでて、妙な味を滲み出してくる、つまみだすと、まだ無傷の丸い実で、よく見れば毛細血管のような細かい赤い線の模様がある。立ち上がると壁と床が次々反転して、サンと母と、二十の女と、五十代の女が、交互に立ち上がる。部屋というわくのほかに、もっと別種の正体不明の何ものかのなかに閉じ込められてでもいるように、足許がふらふらするのだ。髪の毛にそって櫛を下ろしているようなおかしな感触が、体ではなく、家の

外の空をくすぐっている。
　サンは小さな吹き出物を顔にとがらし、ボールペンで、五つ六つの円を描き、卵の中で孵化していく小さいものを描き込んでいる。
「近道をして来たの。無人だった裏道りを、女の人が五人も歩いていたけど、見ると、卵を付着したメダカのメスのようにゼラチンの塊を尻尾のように靡かせていたわ。あの人たちそれに気づいていないらしい。わたしは一生懸命にそれを観察したのよ、一つ一つのゼラチンの卵の中で、細胞分裂がはじまっていて、黒いものが育っていたわ、それが人間なのか虫なのか、眼をこらしたのだけど、図で描くとこんなものなの。ここはとても大きな目玉になり、このあたりは体になるのだと思うけど、怖いことね。一体なにが生まれて来ると言うんでしょう？　ずっと、気がかりで仕方がないのよ」
　サンは髪を後ろにかきあげ、肩を揺さぶって、何時までも部屋の中をうろつきまわり、おれの注意を自分に釘付けにしておこうとする。
　壁や家具はこの一日二日で急激に古びて来て、さっきの薬とも違うすえた臭いがし、窓辺に彼女のりんどうの刺繍のショルダーバッグが、だらりと下がっている。それよりも、窓が一体どうなったと言うのだろう。
「これは？　窓に紙を貼ったのは誰！　外側から貼ったの？　何のために？　爆風よけか？」
「何のこと？　前から、曇りガラスじゃなかった？　町中汚れきっているんだから、きっと埃で白く

なってしまったのね！　拭けばすむことだから、わたしが、やる。克は休んでいらっしゃい」
サンは言うが、おれは指先までわなわなしていて、動かずにはいられず、内側からガラスを拭き、手の熱をとるために手のひらをぴったり押し付けてみたりするが、屋外が全く見えない。外が変わったのか？　総てがなくなったのか？　おれはこうなる原因が何であるかを考えあぐねて、外の空虚のなかに、浮上してくる始めてのものを見逃すまいと眼を凝らす。おお、おれの手に細いクモの糸のようなものが、べっとりとついて糸をを引いている。おれの眼の十センチ前から、空間一杯に細く濃いクモの糸に似た白いものがびっしりと立ち込めているのだ。外はある、恐らくもとのまま、あるものはあって、空間だけが細いクモの糸に似たもので閉じられたのに違いない。
おれは分け入っていく。腕を上げて広げ、糸を踏んで分け入って、何処までも分け入って、靄はいよいよ濃く家も広告も町もなく、我が家さえ見えない。ふっと振り払い振り向くと、おれの通ったあとのクモ糸は密閉し、僅かに銀色の揺らぎをつくる。
「克！何処にいるの？」
ほかの音は全くないのに、その音は伝わってくる。発声源であるサンは全く見えない。彼女が孤立によって自失するまで返事をおあずけにして、おれはおれの意思と無関係に、最早機械的に空を手でかき分ける動作が止められなくなっている。止められない動作と一緒に、しきりに首を傾げるが、これが何であるか判断できない。

おれの頭髪はすっかり白髪に変わり、遥かに伸び、その重荷のために、こわばってしまう。次々白魔に襲われ、息を止めて休息する。待っているものが何であるか、おれの周囲1メートル平方を想像し、二メートル平方を想像し、三メートル平方、千メートル平方まで想像する。非常に拡大された膨大な白のなかで、おれは縮小し、退いて遠く飛離れている想像上の距離のサンに、風の気まぐれほどの呼び声を発してみる。

「サン！　サンサンは何処？」

「ハーィ、ここ、ここです！　此処にいるということは、危険を冒していることじゃないかしら？」

「危険だ！　危険だよ！」

おれはいいきる。口にマスクをしているようなその声、耳がべったりクモ糸で覆われているためでもあるか？

「危険だということは、これも細菌活動に違いないということね？　あなたはそのまま話していて！」

サンは空間を微動させ、迷って、迷って、接近する。おれも身を乗り出す、なおも、はかばかしくない接近のすえ、薄い影が見え隠れし、何故かいなくなり、しーんとする。おれは呆然とし、空に向かい、手を槍にして、ずぶりずぶり突っ込んでみる。手はミズカキをたたみ、指なしの手袋のかたちに付着するものに包まれ、目のまえのもやもやするものを払いのける、手段を失う。

サンはいる。おれたちはいきなり抱き合い、気が違ったように付着したものを頬と手と肩と腰でこ

すりあって、互いの白い影から半分ずつ抜け出る。二人の顔と顔の間のほんの狭くぽっかりあいた隙間で、彼女はおれの手を自分の口の前に持っていき顔を覆って笑う。

「こんなところで、あなたはあなた自身の行先が見えなくなってうろたえている。あなたは、わたしから離れては駄目よ。なんなら、わたしが、案内してあげましょうか！　この靄は立ち込めているだけだから、見えなくとも、目的地までは、何とかいける筈よ」

彼女は顔に白い付着物を剥げた皮膚のように散らし、おれの腕のなかに入り込んでしまう。二人は羽根をぴったり重ね、糸がおだやかに煙ぶる眼を見合わせる。サンは俯き、おれの顎の下に熱い半白の頭を突っ込み、おれはサンを抱きながら、静かに歩いていく。靴先で石を鳴らすかどうか？　二人は踊る機械になって自動回転する。クモ糸を巻き、体を柔らかに締め付け。二人はもう服のはっきりした色なしに溶け合い、他から身を隠す術もいらない。

「こんな日もあるのね、これが待っていた日なのね？」

二人は芝居がかった大袈裟なキスをする。クモ糸が髭になって口に吹き込んで脅かすから、一寸休止し、やり直しで直ぐに思いが叶ない、囁きはただの信号として吹流しになる。クモ糸は二人の口を、瞼を、心臓の鼓動までも包んでいるが、それを払いのける空いた手はない。すっかり包み込まれ、巻き込まれていき、おれは背を丸くして彼女を抱え、繭になっていくばかりだ。誰にも、おれたち自身にも見えない世界で、体を滑らしていく。

「地球じゅうの人間は死に絶えて、後に一体何が残るんだ？」
「わたしたち！」
「死んだものが生き返るってことはないのか？」
「あるわ、ある、アンが呼んでいるのよ、わたしのママがパパが呼んでいるのよ。山に行けば生き返るわ！　枯れ木が骸骨になり、骸骨が人体に早代わりする術が、あそこにはあるのよ、ここはもう、人間の住むところではないわ」
「きみは死のうといっているの？　それとも今が死んでいるの？」
実はと……、今までのどの時点で、死んでいたのだと言われても、おれは素直に認めるだろう。
世界中を覆ったクモ糸はすっかり、まわりにまといつき、おれたちは渦状のクモ糸をなびかせた、巨大な繭になってしまう。外から見たい。これが戦争で、これが新兵器だというのだろうか？　僅かにのこっている人間のために、世界中を覆い尽くし、虫一匹逃さない罠を張る大掛かりな浪費。おれたちはくるくるクモ糸を巻きつけて、たぶん一個の包みとなって片付いたのだ。もう抵抗はしない、嫌、はじめから抵抗などしなかった。
「誰かこの戦闘行為の説明をしてもらいたい、何故だ？」
おれのつぶやきは低く太々とした吠え声、何故だろう？　その後のあえぎ。クモ糸が寄り集まって作った白い膜。ノド、ジフテリア、窒息。おれは不吉にも歯軋りをギィギィと鳴らし、おれに抱きこ

まれた形で剥離しようとしないサンから、枯れ木の樹皮のように、平べったく湾曲した形のおれの腕を、がむしゃらに自分に引き寄せる。腕の外側を固く縛りつけるほど糸の層を引き破り、なおも粘着する糸を引いて、彼女の熱く白い頭上に肘を乗せ、立ちながら枕をしているような不可解な形になって、ともかく二本の指をまといつくものから分離し、口から喉へ突っ込み、指は奥へ奥へ、とどいて摘み出す細い糸、引き出しても引き出しても、おれは口を開いたまま、上唇のめくれるほど、こんぐらがって、どうしようもない。この苦痛で抱いていた筈のサンを忘れ果てる。

サンはおれから何時の間に剥離したのか、サンはいない。サンを捜すが、足元がすかすかするのは、下にすっぽり落ちたのかもしれない。立ち込めてきたクモの糸のなかにサンは没して見えない。一つの繭としてかたづいていた筈のサンがいない、聞耳を立てても聞こえてくるのは自分の激して動く咽の扉の音だけだ。十本の指の全部を自分の咽から出る糸の糸巻きにして、この動きを止めることが出来ない。何処にもばんばん爆発しているものなどない、逃走する人もなく、ただ陰気に沈黙しているものとの戦闘だ。戦闘が何時の間にか、おれの内部と手との闘いに摩り替えられしまっている。戦闘とはこんなもので、兵とはこんな闘いを戦うものだったのか。誰もいない、ただ一人、咽から糸を引き出してあえぎ、速力を緩めずに、指と掌で急いで巻き取り、後ろ向きに歩いてかがむ。靴で粘着する糸の厚みを探ってみる。糸の生えている根元は、アスファルトか、コンクリートの筈だから、底を掻き回して、おれの口から出る糸を植え替える作業をする。

誰にも知られずに、おれ自身の内臓みたいに、おれの命を支えるための単純作業を繰り返しているおれという存在、自分の時間を無駄にするおれは、自分の敵に違いない、妙なことだ。

「母さん,母さんはどこです?」

呼応する不思議な吠え声がして、震えあがると、口からうねり出る糸の間を縫う、おれの獣めいたあえぎだ。

5　吠える

母はベッドから起きだしている。

「じっくりと何日も考えれば、必ず思い当たるふしがあるものですのに、今度だけは比較する過去がない気がしますよ。クモの糸ともカイコの糸とも違う変な糸、また、誰かの策略にすっぽりはまり込んだのですね。夢よりも現実が飛躍するのが当たり前という世の中だから、もう、何でもいい。頭を悩ますことはないわ。でもお前の病気は喘息と思えば理解できる、それ以上むつかしく考えずに養生

しましようね。風が吹けば、いつか霧や靄は破れて退散したものです。大気も地球も際限なく汚染され、わたしたちは侵されつづけていたんですもの、今更怖がることはないのよ。こんなこともあろうかと、地下にためて秘密にしておいた食糧もお金もあります。心配はいりませんよ」

母はおれにまといつきバンソウコウみたいに貼り付いている、白くささくれているクモ糸を剥ぎ取る。おれは喉から出てくる糸を両手に巻き取り巻取りして休みがなく、自分が自分の奴隷だ。昔、カイコを食べた犬が鼻から糸をとめどなく吐いて死んだという話は聞いたことがあったが、人間でそうなった話はまだ聞いたことがない。何時まで続く苦行か。おれの首や髪に付着したバンソウコウのようなものはむしりとってもむしりとっても尽きず、玉葱の皮のように、おれがなくなるまでむしり終えそうもない。糸を吐く隙に、おれはへえへえ自嘲の言葉を発し、口を開きっぱなしにして鏡を見、口から向こうへ引く糸を間違えてこちらに引く焦燥のなかで、放火したくなり、糸に点火するが、火は口の中へちろちろ走り込んできそうなものなのに、点火点で千切れてしまう。口の奥に火を入れると、引き出す糸の先を失って、それを引き出すために涙にむせぶ苦闘になる。

寝て安静にしていると、呼吸がゆるくなるため、吐く糸を引き出さずに済んでいる。その真夜中、やや混乱の止んでいる視界を、真っ直ぐに横切ってくる異常波を認める。はじめ認めたものよりも大きな泡立っている波頭が、窓に打ち付け、波頭に沿って、ひゅんひゅんという音をたてて沸騰する波がこぼれる。強風が吹き始めて、隙間なく立ち込めているクモ糸を片っ端から引きちぎりはじめてい

る。千切れた糸の塊が、高く投げ上げられ、この家全体が鳴動する。部屋の中まで吹き、おれが次々吐く糸を、この手から離して飛ばしてしまう。今まで口のなかから引っ張り出さなければならなかった糸が、快く風に乗って吹き出て行き、すでに吐き出したものと集合して、部屋の壁にとまり、尺取虫の動きで隅に寄り集まり、ふわふわ泡立ちつづける。

おれの吠え声はもはや吠え声にならず、喘ぎもなく、当たり前の自分になり果てたようだ。手持ち無沙汰になり、おれはもう、自分の生存の奴隷でさえなく、疲れ果てている体から、もう一度力を空っぽにして、情けなくしぼむ。

外はクモ糸が大波を打ち、銀色の翼を広げた大鳥になって、空高く飛翔していく。窓をこつんこつんと打つ硬いものがある、黒い影は、サンだ。風と一緒に彼女は跳びこんできて、家中の家具は二三センチ浮きあがる。彼女の頭髪は白いベールになって彼女の頭を一巻きして、部屋の隅に寄り集まっているクモ糸に合体するまで靡き、テーブルを蔽い呆然と立っている俺のズボンまで掠めている。

服は後ろから前へ、天女の裳裾のように吹き上げており、彼女の足まで持ち上げているようだ。

「早く窓を閉じて！」

おれは驚き慌てて、そのくせ、ためらいがちに彼女の顔を包むクモ糸のベールを切り開く。彼女はクモ糸のまだ強く付着していない、つややかな紅潮した頬と、倍になったかと思うほど魅惑的に輝く眼を持って現れ、花嫁姿さながらの美しさだ。

彼女は興奮で震えながら、おれを見上げ、水かきのある手で、おれをおどし面白そうに笑い出す。おれは今まで何処にいたのかと問い始め、言葉を呑んで、彼女を捜せなかった事情、即ち、とめどなく糸を口から引き出す作業の苦痛を話し、クモ糸を呪う。サンはおれの話に笑顔を見せていても、頭上のベールさえ引き千切ろうとはしない。そして急に明るく浮き出すその口元から言葉を製造しはじめる。

「わたしは、あなたの繭から抜け落ちてしまい、鼻も口も押さえて地にうつぶして、風の吹き出すのを待っていたのよ。そしたら、眠くなってしまったの、眠れば一番都合のよいやりかたで、時が裁いてくれるというけど、それは本当みたい。でもわたしは夢で苦しんでいたの、誰かがわたしを呼び続けていたわ。あれは一度通ったことのある抜け穴、頭を頭でないくらいに、体を体でないくらいに低くして、わたしの体が二度と元に戻れないほどに傷だらけになって、深くてとめどなかった、あの穴なんです……」

サンは咳をする。咳をしてとめどなくなる。

「雪の降る前、飛行クモの糸が、空から無数に光りながら降ってくるのが、夢のようだと、山の老人たちが話していたけれど、それとも違うのね……おお……」

サンはガム一個、咽に付着して唾も呑み込めない感じだという。おれと同じ症状が現れてきているのだろうか。

「わたしの声はどちら向きに出てる？　方向転換し続けてるんじゃないかしら？　誰かが声を盗んでいくわ……、……」

話し続けながら、彼女は咳をし、とめどなくなり、次第にしゃがれ声になって、嘔吐しそうに咽を鳴らす。

サンは話さなくなり、おれはサンからベールを剥ぎ取る作業をはじめる。ニセのベールをおれが力一杯引っ張ると、彼女の髪まで裏返って、その栗色をクモ糸の白が引き立て、もう一度引っ張ると彼女の頭皮が一緒にむけたように、顔をすっぽり蔽ってノッペラボーだ。

付着の次はものものしい裏返し。ありとあらゆるやりかたで、おれたちを生から隔絶させようと企んでいる怪しげなものは、吹き込む隙間風に乗って、部屋の隅に泡立っているクモ糸に吸引される形で流れるが、それはおれの手からもクモ糸の雲に向かって放射状に拡がるパラシュートのひも。これが蒼い空に引かれていく飛躍であってくれたら楽しいだろうが……。隙間風は部屋の隅に向かって浸透していく。

壁は打ち砕くべきではないのか、おれは行ったり来たり、立ち止まったりする。あらゆることが、おれを驚かすし、ためらはせる。大きなハンマーを持って来て、この灰色の壁の隅、泡立つ靄を追い出すのだ。

その前におれは自分を一叩きし、打ちのめして解き放つ。死活の結び目はどこなのだ？　おれは壁

を打ち砕き、どっちかにかたがつき、おれたちはどっちかに、開放される。
「きみはそのままが一番綺麗だ、美しいよ。そうしているんだ、いいか、動かないで待っていてくれ、その衣装のまま結婚式にすべきだから、おれが相手をしてあげよう。そうだ、生き残ったものとして子孫を残さなければならないだろう！　きみのいた山奥の老人でさえ、子孫を育てていると話してくれたじゃないか」
　サンはドレスをつまんで持ち上げる。裳裾の長さは女王なみだな……。
「ちょっと、調子に乗りすぎていないか？　まあいい、もっと寄り添ってくれ、母さんの前だからって、気兼ねなんかしなくていいんだよ。おれが、キスで声を呼び出してあげよう！」
　おれは余り大声をあげて笑い過ぎはしないか？　声の出ない彼女の前で、ふざけすぎる。母は顔一杯にんまりと笑う。気に入っているのだ。
「おれの結婚式にいて欲しいのは母さんだけだもの。これで、おれの方は、全員そろったことになる。サンの方はどうかしらん？」
　サンは戯れの笑いで、自分の声の死を衆目にさらしている。サンの両親は外国で、五歳のとき、町の伯母さんに預けられたと聞いたことがある。なら、おれの母さんだけでいいんじゃないかな。二人が結婚すれば、母さんはサンのママになるんだよ。
　二人は腕を組み、バージンロードを歩いていく。祭壇の前だ。

虚と実の間を往復している白い糸で、サンはカイコ自身であるかのように、唇で衣装をつむぎながら、夢中になって気体を震わせ、解読不能な歌詞を奇妙なソプラノに導いていく。こんな神秘に、探りを入れる力をおれに与えない催眠の時間が流れる。

サンはむしりとられる、むしりとるのは母だ。

「あなたは向こうに、いっていらっしゃい」

「いいえ、おれにまかしてください」

結局二人でむしりきれず、サンの衣裳の上からホースで水をかける。衣裳は縮んで、濡れたワンピースの上にへばりつく形で流れ、サンは毛を刈り取られた羊そっくりな間抜けた姿だ。おれは突然去勢され、母も骨が抜かれて、三人とも少々気恥ずかしくなったという竦みかたをする。

「どう言ったらいいのか？」

「何も言わなかったら失礼になりはしませんか？」

サンのちらっとおれを伺う眼に瞼が重々しくかぶさる、真っ直ぐに彼女を見つめ、おれに呑み込める言葉が伝達されて来るのを、待ってみる。

6　瞑目のあとで

ほこりで汚れたクモ糸が、爆撃で破壊された灰色の地面に芽生えた、とりどりの毒キノコのような企業広告にまといつき、ペンキの彩りを消した四角い木があちこちに、宇宙の果ての、知らない星の景色をつくっている。そんな木の葉の欠けている頂上に鋭い泣き声が起こり、大きな鳥が倒れた人の腐肉めがけて舞い降りる、破壊されたビルの上にはどっしりとした巣があるようだ。

「ここは、恐らくあの世なんだなあ！」

「此処があの世なら、人で溢れているはずだが……」

「行く手にぼつぼつ人が見えるじゃないか。返り血ひとつ浴びせもせずに、あの世に来てしまった口惜しさをどうしよう！」

おれと広は晶の家のあった町外れまでくる。ここからは偽装の木も家も目に入らない。ただクモ糸と埃がへばりついた地面ばかりが続き、ところどころに地面と同じ色になって、クモ糸に包まれた死体が小高くなったり、めり込んだりしている。人のいなくなった世界でゴミだけが生きもののように吹き寄せられ、その中に家がありドアがある、おれの熱した足がゴミにめり込んで立つ。死臭がドアの隙間からかすかに臭ってくる。足許が急に斜面になり、晶の家のドアと一緒に墓穴に陥ちこんでい

く。予想してここに来ていながら、おれたちは逃げ腰になり、思いとどまるための息切れをする。晶は寝室のドアのそばに倒れて繭に包まれ、腫れ上がっている。

「晶は頑強だったし、百メートル十秒五で走った。なぜ死から逃亡出来なかったんだ？　晶だけは、今度だって、不正や悪に対して敢然と立ち向かおうとしていたのに……」

「おれたちみたいなのが、生き残って、晶がこんなに簡単に死んでしまうだなんて。クモ糸をむしりとったら、生き返るんじゃないか！」

「死体を剥ぎ取ることはないよ、このまま葬ってあげよう。　顔なんか見たら、おれ、どうなるか、自信が持てないもん。生きていた時の顔が、本当の顔なんだから……」

晶が使っていたシーツで包み、晶のボロ車に乗せる。

「せめて、晶の好きな海の見えるところに、葬ってあげよう！」

きらきらしている砂浜に、おれたちは裸になって穴を掘る。彼を葬って、白い砂を撒く。急に潮が満ちてきて、晶を埋めた場所まで波が伸び、やがてここも海と化してしまいそうだ。彼を葬った砂に、いくつもの小さな穴が開き、泡が何時までも何時までも膨れ出て、海水は吸い取られてしまう。

防風林はところどころ、干網かと思うと、それは灰色のクモの糸の織りなした、網。野火かと思うと、その千切れたものの立ちのぼる煙。汚れた渚の曲線は、クモ糸の水でよじれた姿なのだ。

おれたちはガソリンのある限り何処までも車で走る。

丘の上のビルには灰色のススのようなスダレが垂れ下がっている喫茶店が開いていて、暗いなかで、茶碗のなかに映る月みたいな、小さな灯りがついている。

おれと広は向かい合って腰をおろす。初老の男がいて、さかんに一人でマージャンパイをガチャガチャ掻き混ぜ、独りごとを言っている。

「どこかに、頬杖をついてカードをにらみながら、長々と伸ばした尻尾の先で、新型兵器の発射ボタンを叩いている人でなしがいるよ。お前だったら、尻尾に乗っかって見物しているな！」

「お前だったら尻尾を切り落とす。お前だったらカードを取り上げて真面目にやれという。お前だったら頭をぶち割る、さあね、どれに賭けるか？　ほいほいほい、生きているものは生きているんだ。しかもこんな時に、かえって富んで生きている。お前たち、おれを見たかい？　カードが百枚もあるんだよ！」

おれは耳をそばだてる。男はマージャンパイの上でカードを数えはじめる。

「若いのか、あの男？」

「みんな若いために惨めに老いている、お前もおれもだ！」

広が答える。

なるほど、広にしたところで陰にこもったその顔つきは、にぶい鉛色が勝ち誇っている、衰弱。時間をかけずに、こんな風に急激に衰える、生きながらの急死、それがおれでもある。

「ここでは何を食べさせてくれるんだろう？」
誰も何も運んで来はしない。
「食べさせてくれるはずがないじゃないか。何もかも夢だよ。我慢、命からがらかあ！　同期の晶も成も明もなくなってしまったなあ！　あとは、北か？　彼、山に逃れただろうか？」
「おれは、耳を澄まして聞いていたんだ、あの男は泥棒だぜ。おれたちも、それをやってみないか？」
広が大声でいうから泥棒の男に聞かれてしまう。
「そうか……サンは声が出なくなったんだって？　無言の同情結婚てのを考えないのか？」
「考えないね、世界が以前と同じ世界の続きだというように、生活があるのと違うからな……。だから、働くことにしようよ。おれネ、前から一度やってみたかったんだなあ、泥棒って奴！　殺人鬼がこんなに、はびこっているんだ、泥棒くらいちょろいもんさ！　持ち主は死んでいないんだし、警官だってまだ現れないところをみると、死に絶えたんだよ。形見を戴くだけのことだもの、泥棒だともいえないさ」
「そうだな、所有権の基盤が崩れたんだ！　やるか！」
広は街角を曲がるとき習慣のように地名の標識を読もうとするが、標識は一つも見つからない。何番街の何番地だろうと構わないのだが……。
「この表札は、何と読むんだろう？　泥棒といたしましてはドアを開けて、ぱっと明るくても困るし、

真っ暗でも困るよ」
やや、暗い程度、一足二足、抜き足で歩くのに鋭い響きが次々生まれ、こんな転倒した社会のなかで悪事に対するおののきか、鼓膜のなかでおれの背骨がぎいぎい鳴るのだ。
「この臭気は……なんだろう？　これはこれは特別強い死臭だな」
「しかたないよ、恐ろしいなら見るなよ、お前らしくもない……」
おれの胸の中はざわめきで満ちている、目をつぶるが、気づくと開けており、腐敗菌に消化されつつある崩れた死体をまたいでいる。身をすくめ、タンスの扉を開ける、広の突き出る目。
「ははあ！」
広は声をあげる。
「ひゃあ、ついてるぜ！　ここの住人、センスがいいなあ。おれたちにぴったりだよ」
おれの肩にかけられて、脱臼しているようにふらふらしている腕の入っていない濃紺の上着。二人で足をばたばた動かしズボンをはいている。足元にうごめくほどに分解した腐肉の死体が、おれたちの足からの衝撃で、じわじわ腐汁を床ににじませていく。
「出よう！　早く出よう！　ここで着ることもないぜ！」
二人はこの家の曲がりくねっている石垣の陰で、裸になって盗品に着替え、古い服を小さく畳む。
「めかしすぎなんじゃないか？　服が浮いているなあ。ぶっかぶかだ、よくも、痩せ細ったもんさ！

体が服の片隅でとまどっているな、消えてしまいたいよ。ほんとに、これでいいのかい？」
　これでは、サンではなく死神が耳元で囁きそうだ。
「どうせずっと、死神にこずき回されっ放しじゃないか、気にすんなって」
「死神に小突き回されるのになら、慣れているが、囁かれるのは苦手なんだ。こんなものより、これからのためには、食糧が欲しかったな」
　広はのろのろ前屈みになる。致死量の死毒を着込んで、肉体は着たものの虜になって縮んでいく。クラクションが聞こえ、ブレーキの音がする。それっぽっちのことで、おれたちは震え上がる。最も目立つかたちで他人のものを身につけている泥棒、罪の証拠は歴然としていすぎる。しかし車から降りる女もやっぱり生きているから疲労に病んで、髪がほつれており、おれたちに声をかけず黙礼して過ぎるだけだ。広はすばやい観察で、すばやい解答を出す。
「哀しそうだったが、あの女はおれたちの上をいってるよ。ほら、あの家の錠を開けて入っていく。あそこはたしか、全員死に絶えたはずだ。あの女はあちこちの家で、まず鍵を盗んだに違いない。頭がいいじゃないか？　必要に応じて持ち出せばすむことなんだよ」
　広は俺の背を叩く。
「でもなあ、今度は死臭のしない家にしてくれよ！　何故か、着替えたくなったな。お前はなんともないのか？」

おれはギブスみたいな背をもう一つ背負い込み、腕の下、汗がぎざぎざのやすりになっている皮膚の上を流れるから、その痛さに飛び上がる。
「克、俺だって、平気なもんか！　とりあえず、捨ててきたあの俺たちのボロ服を拾ってきて着替えるとするか！」
「空腹だから頭は冴えているが、姦策をめぐらせるのは明日にしようや。な！」
丘の上の公園に水が流れっぱなしになっている水呑み場があって。おれたちは水で飢えをいやす。本当はまだ流動食が適しているのかもしれない。仕事がきつすぎたのだ。おれは濡れた手で熱い頭を掴み、その熱に震え上がる。
丘から見る景色は、暗礁みたいな広告塔と焼けビルの黒い塊がぽつぽつ散らばっているほか、すべてが白く横臥しているばかりだ。

7　声

機械が空気と瓦礫をかじっている。動く骸骨のような人間が、何処からか派遣されてきて、車の広告のある塀からカメラの広告塔までの数十軒をブルドーザーで倒している。突如、世界は音ばかりになって、ありったけの力を振るって、おれたちに挑みかかってくる。報道管制もとけず、何事があったのかわからぬまま、もう、動き出したものがあるのだ。

男はブルドーザーから降りて休憩するが、彼の真新しい作業服のなかで。骨が鳴っている。ボトルの水を命の最期の一滴のように呑み、前屈みになって、砂と汗のついた腕を屈伸する。よほど泣いたのか頬の皮膚がうろこ状になっている。

「おれもそんな仕事が欲しいんですよ。兵になるよりは収入が多いんでしょう？　きみ、独身ですか？　みんな死んだからな？」

おれが次々話し掛けても、彼は頭を縦にふるだけだ。

「おれも、なにか、仕事がしたいんですよ。誰のためでも今死ぬわけにはいかないんです。なにしろ母と妻がいるんですから」

男は疑わしげにおれを見て、静かにタバコを吸い始め、紫の煙を漂わせる。おれはその鼻先で伸びてくる煙をゆっくりと盗んで吸う。どんなにおれが話を向けても、相手は無言だ。

「口止めされているのか？　きみは何に属しているんだ？　ここに、誰が何を建てようとしているんだ？　」

「基地かしらん？　大都市計画というやつかな？　それともただの大清掃か？」
広が首をひねっている。
「この男と、そのうち、打ち解けてくれれば、動き出した者が誰か、何とかわかるだろうさ。こまめに手伝ってみようよ。あれれ、きみ、手拭が泥だらけだ、洗ってきてあげますよ！」
おれは低姿勢で、次の展開をまってみる。どうしたら、この男の信頼を得ることができるのか？　今動き出したものの正体が、何であるのか？　おれは気軽に公園の水飲み場で手拭を洗い、汚染しきっているだろう工事場の砂の中にしゃがみこんで何かを待ってみる。陽に照らされ、内と外から焼かれて剥がれたおれの皮膚は一センチもある厚さを見せて何処までも剥がれていき、おれはぶら下がっている自分の皮膚を見て竦み、それでも元気だぞと、工事場の土を踏みつける。土は熱し機械力は荒れ狂っていて、おれの足跡をただちに地ならししてしまう。
「焼けビルも壊していますよ、人手などいらないのよ、これからは機械だけの時代になるんですよ。打ち捨てられている車は近いうちにレッカー車で運び去られるそうですよ。死体の整理もしないくせに、おかしなことね……。お前が勝手に使っている車も取り上げられてしまいますよ。何がどうなっているのか？　でも、途方にくれてもいられない、わたしはもう、長くはないわ。お金を出してあげますから、工事場をもの欲しそうにぶらつくのは止めて、サンをk市の病院に連れて行き、診察して

いただきなさい。果たしてあそこに病院があるかどうかわからないけど……。わたしにも克の将来や結婚については、夢は沢山ありましたけど、こんな世の中、人がいなくなって、お前の結婚相手をサン以外に捜せそうもありませんもの。あきらめましたよ」

母はげっそりしてしまっている。

「母さんそんなつもりで職探ししているのではありませんよ。見当違いもはなはだしいよ、彼女の声がでないのは、病気とは違うんです。神経性のもので、医師が簡単に治せるというものじゃない。彼女は病院に行く気なんて鼻から、ないんですから！」

「サンの住んでいたという、その山奥に行きたいんですか？　この国では、棄村なんか見向きもしませんでしたからね。老人ごと捨て去られたんですよ。でも、そのお陰で、今、可哀想な老人たちが生き残っているでしょう、多分、きっと！」

「場所が変われば、変化が感覚中枢を新しい興奮に導いて、神経の末端をくすぐり、咽にしてあるニセのフタを揺り動かし、排出させてしまうだろうって、広が言ってはいましたけど……」

「本当は、山がサンを興奮状態に導き、言語中枢を動かすなんてものでもないでしょうが。あの木の実を食べない限り、無言を続けるに違いないと言う気がするんです。それに、この国で安全なのは、もはや、世の中から隔離されていた棄村しかないのかもしれませんよ」

サンは汚れたショルダーバッグから、ノートを取り出してテーブルの上に置き、眼と紙面の距離を

十センチほどにして頑固に口をつぐんで書き始める。
山、薬草、食糧、タクサン！　米、粟、黍、そば、栗、山葡萄、りんご、山芋、ぜんまい、わらび、茸、鮎、やまめ、鱒、うなぎ、牛、豚、鶏、鯉ノートに書く。
「読ミツヅケルコト！
「何だって？　え？」
おれはせせら笑うように眉間を動かすが、彼女はそんな、おれを見ずにノートにうつぶして鉛筆をなめる。
ノートから眼ヲハナサナイデネ。
「そんなことはおれの柄ではないよ。それほど注意深くないし、沈黙が好きなんだ。書かなくても分かる部分が多いものだしねえ。人間というものは不思議な仕掛けなんだよ、ノートより、きみの眼の方がよく語るから……」
彼女は丁度クモ糸のドレスを着たときのように、おれの左側から現れて、鼻が鼻につくほどに、おれの顔を引き寄せ、自分の顔も寄せて、普通の視力ではとても見えないほど間じかで見つめる。彼女は余り近いから、目、眉、頬、全体が透きとおるほどの肌色になって、漂う一塊の温もりになる。声なし、しぐさなしの感情の連鎖とは？　彼女は声を出さずにものを話し出す。歯を食いしばり、それから軽く横に開いている口、おれは口の形だけで推理する煥発さを持っていない。その口につられて、

おれはサンに弄ばれているように、同じ形に自分の口を動かし、いささか滑稽になって横を向いてしまう。

「無理をしないでいい加減にしておこうよ。言葉ですっかり分かり合えるものではないもの。感じられるものは感じている。そういうやり方で、われわれの間のルールが出来ていくに違いないよ」

おれはサンをうながして外に出る。彼女のなかで何処にも出ないで、入って来る一方の音が、寄り集まって胸を痙攣させている。

「自分ひとりで障害に耐えて沈んでいるのはつらいだろうね、苦しさを訴えたいんだろう。俺の方だって、自分だけが話して、返事の聞こえないバツの悪さもあって、つらいんだよ。これからは、言葉を越える話し方で話そう。な、おれも、きみと同じに声を出さずに暮らすことにするよ」

今まで大体において、おれは他人に言い含められて動く、馬鹿げた行動をとってきた。サンの言葉がすっかり無くなって、おれひとりの発する言葉だけになったら、おれは一方的に言い含め、彼女を操ることが可能になる。一体言葉なしで親しむということは、彼女とどうなることだ？

「サンおれたちは言葉なしで、今まで以上に親しくなれるはずだ」

何か嫌らしいことを露骨に言ったのかもしれない。でも、おれは話すんだ、サンの分まで、倍にした言葉で人という人を、おれの思い通りに説得してしまう。それで、もう、みんなはおれのいいなりの運命をたどるより仕方なくなる。

サンはおれたちが騒いでいることより、遠いことを考えていると言うように黙りこくってしまう。こうなっては、女に逃げられた未練に似た思いで、おれも声がでなくなり、話すことが出来ない苦痛を彼女に代わって耐えることになる。おれの方が彼女から忍従を強いられることにもなり、彼女の目の色をちゃんと見届けなければならなくなる。

サンの両目はたそがれの雨粒のような、暗い悲嘆の涙を浮かべており、おれを驚かせる。

広はどこで知り合ったのだろう、賑々しい顔付きのノブという女を連れて来ている。まるでシャボン玉でも吹き出すような話し方で、サンに興味を集中する。

「この方、声が出なくなったんですって？　深山で暮らしたいんですって？」

サンは先を歩いて行き、おれはその後をいくらかの距離を持って追ってしまい、広もノブをたしなめながら、よぎなくおれの後ろから来る。

飛ぶ鳥が今、クモの巣を突き抜けたのか灰色の尾を吹き流していく。鳥は死者をついばむ仕事をしている。おれたちも再び、死者の残した餌をあさる仕事を始めなければならない。

「黙るんだ！」

広が小声で女をたしなめている。

電車の通らない線路は、奇妙な兵器に汚され続けながらも大地に帰って行くのか、線路の継ぎ目継ぎ目に、同じ草が同じ分量ずつ生えて、数キロ向こうまで続いていそうだ。ひょっとしたら、電車が

暴走してきはしないか？　前後を警戒するみんなは自然に急ぎ足になり、サンのすぐ後ろを走ることになる。線路にときに、ぽつりぽつり黒い水滴が落ち、彼女は泣きつづけ、声の出ない体の最も深いところから出るシュウシュウという音をたてる。髪をハンカチで耳の両脇に結んでいるために細い首が余りにも無力に見える。行く手に人影らしいものが現れても、それは途中の光のなかに二つに分かれて薄れてしまう。

「やっぱり車に乗った方が楽だよ。ガソリンならストックがあるんだから……」

話し掛けるおれは、サンの沈黙にあって地鳴りめいたどよめきを吐き出している。おれにしたところでまだ、咽喉の奥に反り返る肥大した異物を感じもするのだ。サンの頭が向きをかえ、ショルダーバッグを跳ね上げ、線路から飛び降りていく。

ここにも死臭がして、全身に吹き出物のようにハエを置いた死体があり、死体から生暖かくふわふわとハエが、おれの顔に向かって飛び移ってくる。彼らも続いて飛び降り、黒く寄せる目の前のハエの群れを手で払うが、腕を振りちぎろうとも離れない粘着のしかただ。

サンは河原を降りていく、芽生えから百日以上も伸び続けて、漸く花が咲こうと言うときに、白い糸に包まれて立ち枯れになってしまった丈高い雑草が、一面に茎や枝で絡み合っている藪のなかを、彼女は何処までも歩いていく。

河面は銀色の光が拡がり、漣が神話めく。まなざしの一つごとに新しい光が生まれているから、何

一つ話などいらない輝かしいおれたち。立ち枯れの草を分けていく道は明るいだけに、現実離れした狂気の地帯に入っていくような不可思議さにたじろぐ。みんな無言でいくらか知的でない者の群れのように、ただ歩行しているから、おれも歩いていく。サンは歩き止まる。

歩き止まったところに、クモ糸の帽子を被ったボートがある。おれたちはそっと謎の種明かしでも見るように彼女の動作を見守る。彼女の目のきらめき、力をふりしぼるために掛け声をだしそうな歯の食いしばり方、おれたちは理解力も力もない痩せ細ったために無知無力で、彼女の動作をデグノボーになって見つめている。ただ、じっと見ていることで、彼女をいたわり、愛し、おれたち自身の弱さを現わにし、そのことにより力づけているつもりなのかもしれない。彼女の不可解な非倫理的な動作の行き着くところに対する興味かもしれない。繰り返し襲われた命からがらの恐怖、それからの部分的覚醒状態に過ぎないのかもしれない。

彼女の深く曲がる腰の薄い横揺れ、肩を絞り上げる力、伸ばしている肘の脆さ、くずれた茸のかおり、おれは彼女に駆け寄る、手は頬の柔毛をかすめている。二人で一呼吸し、弾みをつけてボートをひっくり返す。おれは今までの沈黙を破って叫んでしまう。

「おおーおおーおおー。スゲ―ジャン」

小船のなかから現れたのは、茎を屈曲してはいるが、夏の夕暮れどきのような若い月見草の花だ。目の前で、ぱらり、ぱらり、黄蝶の羽づかいのように、黄色い花びらを上に向け、あっと言うほど、

みずみずしく咲き誇ってしまう。
生きている植物の魔術。広たちもいっせいに歓声をあげ、ハイタッチしている。みんなサンと同じ意思を初めから持っていたかのように、ポキポキ草を折り敷きながら、ボートを川へ運ぶ。干割れたボートに乗れるはずがないと分かりながら。
干割れたボートは水を浸入させながらグイと回転し、川下へゆるやかに動いていく。
サンは舟を追って走る。
「おかしなことね、舟で山に登れるはず、ないじゃないの！　一体その山は何処にあるの？」
ノブが言い、
「気にしなくていいんだよ。どうも、わけがわからないことはたしかだが？」
広が話している。
「克、サンが何を言いたいのか、おまえなら、もう、言葉なしで分かるだろう！」
「そんな、黙れよ！」
おれは吼えてみて、サンにだけ聞こえそうな溜息をつく。彼女は川上の遠い山脈のあたりを見つめている。山脈はまだ、この間の嵐の名残か、何時かサンがまとっていたクモ糸とおなじかたちに雲を靡かせている。
「噴火じゃないの？」

「笠雲だよ」
葉のちぎれている雑草の間を広とノブが土手の方に話しながらいく。おれは内心、サンに対する怒りの虜になる。あのボートできみは山からきたのか？　本当のことを話してくれよ。
「決してきみを憐れんでいるわけじゃないさ、きみに助けを求めているんだ！」
おれは足元が確かでなく目も乱視に似ている。おれはきみに引っ張られて、眼が見えなくなっていくんだ。
聞こえない叫びがあるというように、大気がかすかな皺を寄せる。

8　遠い山脈

何処から現れたのか車が何台か土手の上を続いていく。最後の一台が止まる。何故か空中を運ばれてくる、幽霊語かと思う妙な声も聞こえてきて、おれたちはその方に歩き出す。おれの力一つに寄りかかって、サンは肩を落として歩く。

透明な羽虫が形をそなえない泡立ちで襲ってくるから、追い払いながら足を運ぶ。振り返るとボートは海に向かう流れに乗って早さを増していく。

人間がまだまだ生きているのだ、みんな何かを逃れ、食物を求めて他をめざす。

「棄村が、いくつも、あったはずじゃないか？　なかには独立国になって、富んでいる部落もあると聞いたことがある。僕たち死を見すぎたから、死ぬのが嫌になったんだよ！」

「何とか食糧にありつかなければ、お前たちも、おれたちも死ぬぞ！　お前ら、どうする？」

トラックの荷台に腰を下ろした青年が二人、少女が一人、俺たちは無言で、その後ろに座り込む。運転台には他に男女がいる。

「これでは人間は滅亡するぜ。残ったものは子孫をつくらなくっちゃあ、なあ」

尾翼のあたりをニキビで赤くしている男がやせ衰えながら、ニタニタする。

「このお嬢さん、今、はいと言ったぞ！　涼しい声で、はいと言ったぞ！　みんな聞いてくれたかい？」

広たちは、げらげら笑い出す。その男はサンを指さしているのだ。彼女はじっとしているが、心みちた笑みを続けている。それがそんなに快いのか？　おれはサンに一発くらったように腹の中でわめく。

「死体が地面に捉まって、死体から木が生えてる！　あそこ、あそこだ見たか？」

広が叫ぶ。灰色の森が引きちぎれ、山脈がねじれていく。

「何が待っているんだ、行き先で待っているのが亡霊だなんて、馬鹿なことはあるまいな」
髭の男が広の隣で髪をかきあげる。
「俺たち、関係ないんだ、薬草をとりに行くだけのことだからね」
広がすまなさそうにいう。
ノブが広の影に頭を突っ込んで居眠りをはじめ、かすかな寝息をたてている。髭の男が女性のひとりひとりに指を突き出す。
「一二三四、これで充分、女とつきあえる。不足もないな」
「怖がらなくっていいのよ。この人ただのほらふきなんよ、いいひとなんです！」
少女がくすりと笑う。まだ山脈は遠く、空は広くてむなしい。
「ここが本当にわたしたちの国なんでしょうか？　どう思います？」
「誰の自由になっているのよ？」
眠っていたノブが咳き込んで言い、広にこずかれる。
「この人も声が出ないのかい？」
髭の男がさっきから、おれに粘つく視線をおいて言う。
「おれは医者の卵なんだ、舌のある言語障害か、ない障害か、解剖したくなっているんでね」
ニキビの男が拳をつくる。

「おまえは寛大だよ、おれなら、言わないか！　言わないか！　言わんなら、ぶんなぐっちゃえ！　とくるな！」
「死んだら舌抜き役人になりな！」
広は軽くいなすが、飛び出ている木の枝に、あわや首をかすめ取られそうになる。道が続いているから、車はその方向へすすんでいく。
片側は量感のある赤岩で、空と接するあたりに、太陽が三つ四つの楕円を描き、下の方は苔にぬれてじぐじぐしている。その底に、横穴が幾十も並び、走り抜ける車体の横で、いぶかしげな笛を吹く。反対側は湿地、いきなり車が湿地の上に出て行き。水溜りの丸い反射に大揺れをする。
広が体を傾けて囁く。
「北はこの道をいっただろうか？」
カーブしていく道の岩陰から埃が湧いて、みんな思わず埃を吸い込んでしまう。
サンが手をあいまいに空に浮かし、咳をする。止めどない咳が、甘い声を呼び寄せる。
「声だ！　確かに声だった！　サン、治ったのか？　良くなったのに違いない。何故、返事をしない。本当に障害があるのかと思ってしまうじゃないか！　もう一度咳をしてごらん。きみの咽の白い糸の塊は、枯葉のように軽く置かれていて、吹き飛ばされるのを待っているんだ。自然に咽の力を抜いて、はじめはハミングで歌って見るのもいいね！」

車の揺れでおれたちみんな、がたがたし、荷台の傾斜に乗ってあっちこっちに移動して、ぶつかり合う。ピリピリという電気が鋼板を駆け巡り、肩が感電でもしているように硬直する。

サンにもう一度咳を、と願っても、もう澄みきった空気ばかりがくる。

ゆるやかな緑の草むらが急に立ち上がり、赤岩が傾き、みんな一緒に飛び上がる。

行く手の山脈の上にたなびく雲に向かって、ここがひゅんひゅんと飛んでいくのに、到着すべきその山だけが手のほどこしようもなく、大気の奥へ奥へと後退しつづけている。

9　蒼い朝

山に戻っていくわたしは、怠け者を助け起こすように自分の体に密着して車の上で立ち上がる。風の運ぶ花粉が、秋だというのに、いつかとそっくりに吹きつけるから、咳き込み、口の前に右手を広げる。手は口を蔽い顔を蔽うまでに拡がり、やがて、わたしの頭から首、胸、足と、全身を蔽う状態まで拡がってしまう。

わたしは肘を曲げている小さな右腕についている、大きな手のなかにすっぽり納まり、右手のひらの凹面の中に、わたしを小さく映している。手は自分を中央に置いていながら、どうしても握り潰せない咳でわなわなし、わたしの全身は咳を押さえてくれるその手から出る気は全くない。

「声が出たんじゃないか？　背を叩いてあげよう！」

克が痩せたために黒々としている艶のない手を伸ばすが、わたしの背は、自分をもて余すほどの右手のなかにあるのだ。わたしはそのことを克に話してみるが、手のなかだから、まだ、だんまりを続けることになっていて、耳を澄ますと、わたしのだんまりがみんなの話題のなかでどうどう巡りをしている。

「サンの声、でたの？　みんな、治癒してこうしているんだもの、サンだけが治らないってのも、おかしな話ね」

「声を出すのがこわいんだよ、きっと。でも、意地悪で話さないにしては、続きすぎる？　特効薬を手に入れるまでのことだが……。特効薬のない病気もあることだし……」

克は言葉を濁す。

「美人でもなく、スタイルも良くない場合、好ましい印象というのは、さっぱりしている言葉しかないのだが、残念なことだな」

広がわたしを窺い窺い言うのに、克は車のがたつきと一緒に大きくうなずいている。みんなの口数

が増すにつれて、克の口数も多くなるから、わたしは克の眼の底の底まで見つめてしまう。
もっと、悪いことを言ったら、わたしの体を右手のなかから払い落とし、彼の手をその手でふさぎ体全体を蔽い、みんなも一緒に車ごと、この右手で包みたい。
突然、車のいく道路は、カーブして空に伸び上がり、反り返ったと思うと、行く先がノコギリの刃のような影になって陥没していき、両側が葉裏を返して白くゆっさゆっさとゆする雑木林になる。
今新しく生まれた蒼い朝のような、眼の覚める壮観。悪夢の現実と、現実の夢のなさの間を駆け抜けた後の、レモン色の空気をたぎらせている世界。
「Uターン、Uターン！」
克が怒鳴る。
「おれ、忘れ物をして来た！　大事なものを忘れてきたんだ、おれのおふくろだよ！」
みんなゲラゲラ笑い出す。
「おふくろだなんて、気が遠くなるぜ！」
笑い声も克の声も空中で静止し、ケシ粒ほどになって、もはやずっと後ろに飛んでいってしまう。
もう、あの町の悪夢は千万のケシ粒。わたしは今、繭を出る蝶のように、閉じ込めてある声をゆする。
まだ揺すっているが声はでない。
わたしの無口で腫れ上がっている唇から、一群の昆虫が離れていく。これが、声？　蚊のような虫

がうなっている。今に吐剤でも呑んだみたいに言葉ばかり吐くことになる、きっと。
あまりに明るい新しい目覚めだから、みんな光で眼を緑色の鬼火のように光らせ、羽をむしられながらも、生をとりとめた鳥の姿で、荷物のカップ麺の箱に寄りかかって、揺られながらいく。
近づいてくる山は力強く新しい粧いをこらし、わたしが記憶している、しるし一つ残していない。地形や地物への注意をはらい、あのルートを思い出さなければ……。トキ色の岩山が静かに横向きになり、黙々と山襞に自然の時間を刻みはじめる。
あの水系から離れきってしまうことなど出来ない山峡に入っているから、間違いなくあの山に近い地点まで行くのだとわかる。しかし、その地点まで行って、この車の彼らと別れて、その先となると……。
向いている方向とは逆ねじの姿勢で、ノブが明るい髪をはねあげて腕を延べ、わたしで体を立て直そうとするが、そばの少女の痩せているのに、意外に豊かな胸のふくらみを指先でかすめてしまい、とっさに引っ込める指を自分の口に入れて噛んでいる。
少女はちょっと口を開き、きらきらする白い歯並をみせ、胸を押さえた手をそのまま上にあげ、山を指す。山肌を撫でていくガスが見える。
「あの一番高い岳に登って見たいというのか？　稲妻のように山が北面に雪崩落ちているんだぜ！」
ヒゲだ。

「あのときはハーケンがガタガタ動いてネ、足がしびれたなあ。左手の岩峰を幾つも乗り越えたときのことだが、奴は前後不覚にねむりこんだからな。今は、一声かければ救助隊が駆けつけるのと違う時代だからね。登るなら、今度こそ勝負さ！」

ニキビがヒゲを振り返る。

「俺たちはお伽話みたいな生活をしようと思って、山に入るんじゃないよ。きみたちも、何者にも味方されず破壊されない、素手の力で生きていく、すがすがしさを取り戻すんだ！　頭のなかだって、多少の中身を持つことになるだろうさ。分かるかい？」

「その素手でか？」

続く克たちの沈黙は冷淡というものではない。彼らの顔色も、克たちの顔色も青くなり、黒くなり頬の膨らみもない。服と、ヒゲとニキビのふくらみを差し引いたら、ひゅーひゅーと唸る鞭に冒されて、いじけた枝のカカシになる。それに目標さえ、あいまいさを持っているのだ。

視界から消えたトキ色の岩山が、もう一度視界にゆっくりと戻ってくる。

廃屋が見え、草の中に溺れている屋根の瓦に、苔がこんもりと丸い突起になって、ばらまかれているから、家というよりは、築山に見える。

「ここまで、ここまで。今日はこの山小屋に一泊しよう！」ヒゲがいった。

わたしたちは車を降りて歩き出し、草の分け目を横切っていく、太り返った鼠の一群をみる。押し

分けていく草の茎が頭上で音をたてて合わさる。草がぐんぐん大きくなっていき、黄色っぽい巻雲のなかから、清澄な昼の白い月が現れる。この月の大きさと欠け方、今日は何日、理屈のあう形かどうか、位置かどうか、計算のきく安全な世界なのかどうか。

このあたり迄くれば、大きさと重量のある家や木が決してあっさりと消えないはずだ。月も人も草も時間まで、幽霊のような静けさで、わたしの叫び出すのを待っている。

昆虫さえ空色の点々のある薄羽をボソボソと胴体からはみ出したまま、死んだ真似をしている。言葉にまとまる習性を失った、わたしの思いだけが勝手にぶんぶん動きつづける。話したい欲求と、言葉の構成と、声の出口の開閉と一緒に組み合わせて声をだす。出ただろうか？　一体わたしは何を言ったの？

わたしの声など誰も聞いてはいない。瞬間みんなが聴く気を失ってしまったように、草を動かし、がむしゃらに進み、わたしの頭越しに克が彼らと話している。わたしの顔の表面で、広の跳ね除けた草が楽器の弦のような低音のうなりをあげる。彼らはこんな草や木を、すぐに台風のあとのように、すっかり踏み倒してしまうに違いない。

わたしは彼らの後から行く理由はないのだ。立ち止まる、そこには、しみじみとした父なる山がある。山と語るには言葉はいらないけれど……わたしは胸のなかに、物言わぬ敵意に化した記憶を持ち、その陰気で執拗な無口に耐えがたくなっている。わたしの出せない声のふくらみが、記憶のいる胸か

ら逃げ、血を百倍にも早く循環させる熱い情熱になりかわる。
わたしは後ろに克ひとり従え、より熱い無口になって急ぎ、わたしの知っている確実な目印をみつけ出そうとするが、前に見たものとほぼ同じと認められるのは、空に均等にばらまかれている巻層雲だけ。百舌が獲物を隠すに似たあどけない目印だ。草根を分けるとざらざらした軽石のかけらのようなものがある。川のある方向は？　わたしが水だとする。せせらぎになって落ちていきたい方向は？草がわたしを追い立てる。
わたしは顔を手で隠して草に逆らおうと振り向くが、その姿勢のまま自然に風に追われる方向に突き進んで、眼の前の高さがパシッと鞭で叩くような音を発し、同時に足がエレベーターで下降していく感じで、すうっと力が抜けてしまう。
右手を下にして、斜面に横になる姿勢のまま、ざあざあという音を聞きながら落ち、黒ずんだセピア色が眼のなかにくる。
こんなところで人も山も決してあっさり消えはしない、記憶が蘇ってくる。生死がこのあたりで交替するに違いない。その構造をわたしは知っているはずなのだ、
……あの部落と、あの町の空間の継ぎ目がくるわ、きっと……わたしの声の塊が、弾みを失って行方不明になる。
セピア色からベージュ色に変わる不安な日没を全身で見る。克の声が大きなスピーカーから、直接

わたしに耳打ちし、わたしは慌てて両耳を両手でおさえる。手のひらは、また、耳から頭、全身をはさむかたちに大きく広がり、小さな手首で曲がって、丁度貝が自分の体を包むかたちに、手以外の全身を蔽って合わさってしまう。

曲がって折れている手首が痛い。

――あの時のことです。電話に飛びついたけど、咽がつまって声が出なかったの。それで手首で口をこすったのよ、手首に血がべっとりついて、慌てて口をごしごし拭ったわ。手首に溶けた赤いサンゴの玉ほどの血が盛り上がるから、動脈を切ったのかと疑い、耐えられなくて、早く早く、あたりの山に木霊するわたしの声に恐怖して、何キロか知らない向こうに泣きついていたの。火事があって山から逃げた時のことです――

あのときのわたしの声が果てしない木霊になっている。今のうちに手の覆いをとって口を拭わなければ、こんな記憶の全部は認めがたい幻想になってしまう。

わたしは注ぎかけてくる克の視線が怖いから、血の流れる手首で口を拭う。吸血鬼みたいに見えるらしい。克の顔がわたしに迫って覗き込んでいる。

……わたしの口から血が流れているのではなくて手首から移ったのよ。血を吸ったのではなく拭ったのよ。いくらお腹が空いたからって、自分の血を舐めるなんてしない……。

わたしの無言の吸血鬼が克に移り、克の吸血鬼がわたしに移り、しばらくたってから、わたしは手首で口を拭うのだ、克も恐らく相似形に口を開いて同じように手首を曲げて風変わりな声を響かせる。いまに、びしっと、わたしを叩く声が克の口から出る。もう直ぐ……。

手首が折れている？　穴に陥ち込んだの、これから腕をへし折られ、首の骨をへし折られ、棺おけの寸法に合わせて畳まれて葬られる？　いま、手首から血が出ているのはわたしで、小さく蹲っているのもわたしだ。克がわたしの手首の血を拭ってくれるのだが、わたしの腕をもうひとところへし折る目的で掴み、一回でポキンと上手に折るための力の入れ方で、狙いをつけているようにも見える。

彼の口の端に子供じみた嬉しさが、そろりと滲み出ているけれど、わたしの眼のなかで、それが不思議なほどの凶暴さにじわじわ変化する。

10　火おどり

「ピッケルで穴を開けて盗んだに違いないと思うほど、人工的に見える穴の開け方だったから、き

み達を問い詰めたりして悪かったな。鼠だったんだなあ、お前達よりは一枚うえだな……」
赤皮のジャケットの、運転してきた男がダンボール箱を裂きながら言っている。
「お前達二人、カップラーメンの箱を、車にいる間、見つめすぎていたもの、疑われてもしかたないさ。おれ達の観察は鋭いんだよ。それにしても想像がつくじゃないか、ここにいる限り、駆け回る鼠で目が回り、鼠を追いかけて、この家は鼠の回す糸車みたいに回転し続けるに違いない」
ニキビは缶のなかに、登山食を突っ込み、珍しく弱音を吐くが、ズボンを何時の間にか紫色に穿き替えている。
「お前ら、これほど大量の人間が死んだあとでも、ひとを殺したくなるのか？　これから、おれたちを殺したくなることがあると思うか？」
克が男の背に向かって声をかけている。
「あるさ、ある。あるんじゃないかあ？　生きるか死ぬかのときなんだぜ！　お前は否定して欲しくて言ってるんだろうが……。あまいなあ！　殺人しても、刑にもならない結構な社会だ、おれたちだって何をやるかわからないさ！　首でも洗って待っているんだな！」
ヒゲが克の背後から声をあげる。
「そうか！　やっぱりな、そう出ると思ったさ。それなら、何故おれたちを車に乗せたんだ、矛盾してるじゃないか？　悪ぶるのは、よせよ！」

「ひとを殺すより先に、鼠を追いかけることになるんじゃないの？」
少女は目のなかにもう一つの目をおいたような、小さな光を映して、ダンボールの切れ端を囲炉裏に重ねて火をつける。
「誰か知っていて？　鼠の味は？　調理方法は？」
「つまり、このひとたち、食糧を分けてほしいのよ。きっと！」
わたしと並んで食事をしていた赤皮の女がいう。
「木の実はあっても、山なんだから、自然も動物も人間に友好的じゃないから、何日か生き延びるために、少し欲しいのさ」
広は足のマッサージを続けながらいう。
「いいよ、いらない、サンの山に行くまでのことだから……」
克はかたくなになっていう。わたしは広に目配せをしてから、そっと克の手をとる。
「サンは、二人の男性を従えていて、いいわね！　わたしは、その周りをおろおろ駆け回るだけ、あなたの物語に無抵抗に巻き込まれてしまうのは、嫌なのよ」
ノブは草のなかで赤っぽい雲みたいな髪を靡かせていたが、ここでは逆三角に目鼻口の黒い五個の切り口のあいた、蒼白なマスクだ。
克はもうすぐ靴裏が二枚舌になりそうな靴を手に持っている、

「接着剤がほしいんだよ。ないか？　この家にある小さな釘を探して打ちつける手もある。あとで柱や戸や、はりを、手探りしてみようかな」
「履物は手で作るもんだ、藁や木で、手作りにするのは、神経系統を丈夫にするぞ！」
ヒゲが言う。克は二十畳もある部屋の隅にいるわたしの方まで壁や柱や、はりの釘を手探りしながら来る。
「彼らから地図を借りてサンに、しるしをつけさせ、おれが先に立ってくればよかったのだろうが、諦めようよ。あの町だって、そろそろ町らしく住み始める者だっているさ。それに、さっき、確かにサンの声を聞いたんだ、ほんとだよ。だから、今更山奥に行くこともないさ。急に話し出すのは間の悪い思いもあるし、疲労するから、黙っていて構わないけれども……。サンが否定するのなら、おれを追い詰めている哀しい願いだから、聞いたような気がしたということかもしれない。……自分の声がないということは、素晴らしい開放だろうが、その分、おれたちの観察眼？　観察耳に付け狙われているんだぜ！」
「そうだよ、おれたちみたいな、好奇心に満ちている見物人がいると思ってもいい。サンの無言には、それを発射している強い源みたいなものがあって、見物人の方が、受動的に動かされてしまうんだ。ほら、またその視線で、おれたちの言うことなど簡単に押し返してしまう」
広が何時になく真面目にわたしに対しているのだ。それは、わたしにと言うより、克に対する愛情

みたいな気がする。親友なのかもしれない。
「そうなんだよ。見物人の方が見られて、声が出ないという、それだけのことなのに、それが明らかにサンの全機能に変質をきたしているのか、きみに新しい性格が生まれ、謎が深まっていくみたいな、そんな気がしているんだよ！」
わたしは手を振って蚊みたいなものを追い払う。蚊？　蚊ではない。蛾が飛んでくる、夏でもないのに……。一匹、二匹、三匹、もう一匹、囲炉裏のダンボールは燃え終わったが、木の枝に燃え移って、炎が赤々と大きいから、次々蛾が飛んでくる。
もう誰もどんよりとした目つきで口数少なくなっていて、鼻先で羽ばたく蛾をそのままにしている。
「山小屋なんだから、ほっておくさ、怠け者に寄生する蛾があるんだろう？　目に止まったら止まったままにしておいてみろよ」
克が細目で蛾をにらみ上げていうが、みんな年寄った山家の老人たちのように、何ならこのまま死んでも構わないという様子だ。
随分大きな蛾で、胴の真中にヒゲダルマの顔が描かれていて、そこから大きな四枚の薄桃色の羽が広がり、つんつんと突き出ている四隅には、フォーク型をしている真紅の模様がある。
「図鑑があったらなあ、なんか珍しい種か、新種に違いないのに……」
ごろごろしている男たちは、翼型に額に突き出る眉の突起と、眼窩の大穴と、頬骨と、骸骨そのも

のの凹凸になって、痩せ細っている。広の眼窩に蓋をする形で一匹がとまる。
「広！　ひっぺがしてあげましょうか？」
ノブが顔を左右に振る。
「いずれ火に入って、死んでしまうさ」
広はついぞなく居心地よさそうで、千匹の蛾に噛み砕かれでもしなければ、この前衛的な化粧をとる気は全くなさそうだ。
蛾は宙返りをし、羽でばたばた空気を打ち、廃屋のかびのような甘い匂いと同種の匂いを持っていて、濃厚に振り撒く。
少女は両足を揃えたまま小刻みに壁側に引き下がっていく、ノブがカエルのような声をあげて、蛾に押しつぶされている広の顔を力一杯叩きつける。
蛾は柔らかい音を立てて、眩しいピンクを散らし、炉の上でひるがえる。広は顔を打たれて目の下に赤い眼状斑を浮かび上がらせて、ごそごそ起き上がる。
「なんだよ？　ああ、蛾のことかあ、女たちはやつれ果てて、精子というやつが何より怖いのさ！」
広はそのまま泥酔でもしているように倒れこむ。
わたしとノブと、二人の女性が一列に暗い壁を信じて寄りかかって並び、秋の夜気に互いに体をこすりあっている。

克は懐中電灯をこちらに向けて見ている。
「克は何故、そうやって見ているの？」
わたしは壁を見上げてしまう。わたしたちの背の壁は極彩色の模様の壁紙。もう一度しっかり観察してみる。いささか趣味が悪いとはいっても、克はなにを……。
それは模様ではなく、壁全体に本物の同種の蛾が、へばりついているのだ。ノブは壁の下の暗みに沈み、甘えた声で克にいう。
「こっちに跳んで来ないように、見張っててよ」
克は眠るのに仰向けに寝ようか、うつ伏せに寝ようか思案してみせる。
「見張ったところで、おれには何もできないよ。ただ、言えることは、きみたちは絶対にそこから、動かないことだ！　何かの拍子で、この蛾がいっせいに舞い出しでもしたら、すごいことになるんじゃないか？　いいか、動くな！　後ろを見るんじゃない！」
感動的な夜がきているのだ。今朝脱け出してきた悪夢の世界と、一続きの流れで続いている夜、夢魔の花が一斉に開いて乱舞するだろう。
克は蛾の真似をしてうつぶして、この埃と湿気で分解しつつある床と一体化している。
わたしも眠る。何時も眠るのは穏やかな日常に戻ることだが、眠りのなかに拡がっている現実は、恐ろしさも苦しさもなく、覚めてから気になることなど一つも残らない。

すうっと目覚める。山家の冷える秋の夜中に、まるで羽毛に包まれてでもいるように、わたしは汗ばんでいる。

囲炉裏の火は消えて真っ暗、彼女たちが毛布でもかけてくれたのかもしれない。でも、そんな重みはない。ただこの家に入ってきたときから、濃厚にあった耐えがたい匂いが何倍かになっており、耳のあたりを手で払うと蛾だ。髪にも。

闇のなかで、ひたひた飛び始めるもの。

克がうつ伏しており、誰かにさっと懐中電灯で照らされる、光源の向こう側から叫びがあがる。克はおびただしい蛾の群れに覆われて眠っているのだ。

克だけでなく、わたしもみんなも、床も壁も、懐中電灯を持っている誰か自身もそうだから、電灯を手放して転がしてしまう。

蛾はばたばた舞い上がる。みんなは体中を覆っている蛾を振り落とすために暴れ始める。蛾は光の拡がる空間全部を埋めて飛び交い、粉をばらまく。

「眼を閉じなさい！　鼻をつまむのよ！」

うまい具合に、わたしたちの顔はまだ半分眠りにつぶれている。みんな、まだムムムム……鼻音だけで喉の奥で唄を歌っている。

「駄目！　電灯を外に投げ出すのよ、誰か飛んでいる蛾の羽に火をつけて！　蛾が炎になって飛べば

蛾は蛾の炎に集まって、蛾の巨大な玉になるでしょう！　暗闇に浮く蛾の火踊りが見たいのよ！」
少女がいう。わたしたちは目を上げずに鼻をつまむほかなく、そんなショウを見物することは出来ない。
いらだたしい朝の光が、死骸になっても、なお、生々しく太った腹に黒くぼってりとした重みをみせ、乱れたりそそげ立ったりしていないピンクの羽を広げきっている、おびただしい数の蛾を照らしている。
誰かが咳き込みながら枯れた声をだす。
「おれたちの目指したのは、こんなところではないよ！　ここは、あくまでも、中間点だ」
「そうだ、目指したのは住人がいるところだよ。少なくとも食料がなければな」
「平家や、源氏の落人が、いるんじゃなかったのか？　しかも富んで？」
背に棘をさされ続けている。顎にも、胃袋にも、肺にも、燐粉を顕微鏡でみたら毒のトゲをもっているのがわかるに違いない。わたしは窪んだ目をし、瞼に針金の輪をはめこんだような突っ張った窪みを感じているが、わたしだけでなく、女全部が口を結んで前よりも考え深そうな表情になって、ともすると、浅い眠りのなかで、男の一人でも近寄ったら殺しかねない構えでいるようだ。
男たちは千匹もいるかと思われる蛾を集めてうず高くする。
「よく見てごらん、おれたちが死体だと思って集めている蛾は生きているものが多いようだよ。足や

触覚がじわじわ動いている、いずれ死ぬだろうが……」
　リンゴの木の下に打ち棄てられていた草ぼうきで、男たちは蛾をはき寄せていく。わたしたちの立ちすくんでいるところにもリンゴの木があって、いびつな実がついている。わたしは一個もぎとって食べる。リンゴをかじる音があたりを支配する静寂感になる。光が降り注ぎ、林のなかの暗い青を、明るい暖い色に変えていく。
「山は油断できない、しょっちゅう変わっているんだ、女のご機嫌のようにな。夜の蝶に抱かれて寝てしまったのは不覚だったが、繊細で官能的で暖かかったなあ」
　彼らは蛾から恵みを受けたような皮肉な幸福づら。濃霧でも流れてきたら、その幸福づらをふんわり包んで天につるせ！
「一軒家ではなく、棄村があって部落をつくっていたはずじゃないか？　高いところから見て見るとするか……」
　彼らの姿が、靄のなかに沈んでいき、次には軽快な姿で林の向こうを一気に飛躍し、上を行く影をみせる。
　わたしたちの入ってきた山あいにだけ、低い空があって、エンジいろからトキ色に立ち上っている。それが何であるか判断するために、わたしは繁みに入るが、昨日通ったあとなのか、小枝は折れ目から少しずつ、しみでる樹液をにじませ、葉っぱの重みで枝は垂直に垂れている。緑色のマリモのよう

な苔を一面にばら撒いた廃屋の屋根は意外に遠ざかって、幹と幹の重なりの間から見えている。このあたり車の通ったあとがある。ガソリンの臭いのする草が踏み敷かれて続き、草の起き上がるうつろな音がしている。

克が落ちている紙袋を膨らませてパーンと叩いて投げ捨てるが、わたしには灰色の土の上のゴミが妙に気がかりになる。

「あんな車、近いうちにパンクして、放りだされるわ」

るわ、るわ、る、る、る、車のエンジンの音だ、音が崩れ、高まり、わたしの脳はよく流れる液体になって、音のする方へ流れ出していく。克の声がする。

「やっぱりだ、畜生！　見てご覧！」

「かつがれたんだよ、あっさり山に見切りをつけたのさ！　A市かB市に行く気なんだろう。今までの並みの思考では、間違っても山なんかに避難することなど考えなかった。この国の都会が駄目なら、外国の都会へ、みんなそうだった。山に住む気なんて、口先だけだったのさ」

広が言葉を吐き出している。

「一晩であきたのね、朝の少女の顔色と言ったらなかったわ。我慢できなかったのね」

ノブは腕を下げて肩を落とし、口惜しそうに片方の靴を飛ばす。

「山に住むより死を好む奴らだ、おれならここにすんで見せるぜ、克、各自勝手だよ」

町に帰って何があるか？　彼らがいなくなって、かえってその残り香、排気ガスや体臭が多くなって、寂しさが来る。
「どうしようもないな」
「追って走ろうか！」
ノブが駆け出し、素足で踏んだ草の痛さに飛びあがり、わたしたち三人はその狭い地点に集まったまま、動かない。

11　泣いている蓑虫

岩さえ風下に流されはじめ、段々沈んでいくみたい。わたしたちは岸壁に囲われた地点に入りこんでいく、全身それになりきっている、わたしの目のなかに、砂も岩も影を溶け込ませて、まばたき一つで一緒の死を死ぬように消え失せる。消えた目のわたしがもう一度覚めた目で現れると、眺めているのはわたしの腕の傷口、触っても血の滲まない真新しく、さっくりきられた肉の切れ目に、みんな

は言葉を失っていて、わたしがそばに寄っても、顔をそむける。
小さな傷ではないが、一瞬、傷口を閉じて痛みはなくなる。こんなきり方をするもの……、姿のない動物、姿のない刃、付近にあって振り回されているもの？　カマイタチ？
眼をそらせば、そこにも昼の光が切られて、たゆたっている。虚空は何千もの切り傷を持って、その暴れた後を残している。わたしは背中を曲げて岩にへばりつく、岩を着よう、まな板の上の魚のように切られるままに、息を喘がせて。岩が閉じますように、わたしの厚みだけそっくりそのまま保って岩を着たい。
狭まっていく岩は穴になり、下が沈んでいき、斜めの穴だと思ったものが、何時の間にか横穴に変形していく。そこにいるのは克か広だ。暗くて見えないのに、はっきりとその顔付きの異常がわかる。木の葉や枝や砂、小さな岩の欠片まで穴の入り口を塞いでくる。ノブは考える余裕を失っていて、
「暗いのは怖いのよ！」
克からライターを受け取ると、いきなり、そばにある小枝に放火してしまう。もう穴のなかは煙で一杯だ。
「大きな声は立てるな、煙にやられる！」
わたしは口を聞けず喘ぐ、辛すぎて咽から搾り出す咳。
「ネズミのステーキを食べるどころか、おれたちはこうやってクン製にされるんだな」

飢えた虎は穴の奥で舌なめずりをしている。骨のクン製？

入り口は猛烈な炎と煙になる、みんなは風に吹きまくられるように、身を寄せ合って抱き合うが、痩せて皮膚はざらざら、眉骨は飛び出して、顎はしゃくれ、歯も飛び出し、耳たぶまで小さくなる。わたしだって同じだけど、昨日よりも今日のみんなは、また痩せて、骨がぶつかるのだ。

煙に巻かれて中へ中へ……。入り口の炎はもう見えなくなって、ただ煙だけが、今までの十倍も濃く入り込んでくる。身体を低くし、かすかに押さえ込んだ冷たい空気を呼吸する。よく耳をすませ、この地上からの響きを聞け、上が燃えているのだ。山がともすると、丸焼けになって、焼山にわたしたちだけが生き残る。克がわたしにささやく。

「これくらいの煙を眺めながらおれは大勢の死体に抱かれ、大勢の死体を抱いていたんだ。煙に巻かれるのは、弔いの行事で、愛の行事でもある！」

骨がへし折られるのは嫌だ、煙いキスは嫌。わたしは見えない岩の上を漂って、横滑りし、閉ざされている窪みに沈み、斜めに滑りこんでいく、岩間に鼻を押し付けて小さい呼吸が可能だ。辛くない呼吸が……。岩の割れ目がある、外を見ると真上も真下も空がぎらぎらし、意外にも中空に山々が堆たかく重なって見える。くらくらする。

「わたしは方向音痴なのよ、回転したら方向がわからなくなってしまう！」

「此処じゃないのか、きみが山からくぐった穴は？」

岩間の埃を掴むと栗のイガだ、一つの栗のイガが落ちていって、何処かにぶつかった音もしない。底なし、しーんと重い岩と岩の間、ひとり抜け出せるほどの穴のなかに、冷えたドリンク剤みたいな新しい空気の流れがある。わたしでさえ音の生まれそうな固さを失い、岩を掴む片手をはずし拳骨で岩を叩いてみる。音は重く沈んでいく。

何処からか光が入って、どの岩もみんな何かをにらみつけているような人間の顔、見苦しい立方体や三角錐。

岩と岩の隙間にこまかい埃とも砂ともつかないものが立ち込め、わたしは目を凝らし、時間の経過を見ようとする。岩の下は、まだ割れ目が深い。下って来ていながら、高いところにいる衰弱。穴を脱け出ると、切り取った岩に金属のロープがぶら下がっている。

ああ、ここ！　この近くに違いない、わたしは腰にロープを巻いて下に降り、下半身に川水が飛び上がってきたのを覚えている。ロープはねじれたり反対の方向に揺れて持ち上がったりしていた、近頃ではこんな怖い思いは何度もしているけれど、ほんものはここでだった。あのとき絶望のなかで見つけたもの、わたしの生き延びた魔術、下にボートがあったのだ。でも少し違う、どこか違い、わたしは混沌によって心身が分解している。

見上げると、両岸の絶壁が二重の扉になって、わたしたちにせまり、下は全く見通せない。内臓は大腿に集まり、おろす両足は登りながら、一歩一歩、岩を突き抜けて足がかりがない。踏む場所さえ

見えない、ぎざぎざになった頂が固く、頭上は逆立ちした地獄の扉じみ、地上からも地下からも受け入れるのを阻まれて、わたしには、もう、自分を制御するどんな力も湧かず、ただ不思議な静止感に捉えられる。

「動いたら駄目ですぞ！　上も下も見ちゃいかん！」

落石が響きと共にすっ飛ぶ。誰かの声がする、危うく、ぐらり重心を失う。あとは追い込まれた獣のように、ギーギギーという逃れられそうもない捕獲機械の音。わたしは意志を持たぬまま、運命に対する本能的な対処の仕方で、支えてくれるもの、手がかりになるものの渦に身を沈めて、ぼやけてしまう。

高所恐怖症だと言い張るノブとわたしは泣いているミノ虫。克と広に、上から落とされた帆布のような布に包装されている。まるで全身打撲の重傷を負った人間みたいだ。

「まさか、コールガールとして売られてしまうのではないでしょうね？」

ノブがいう。上でロープをあやつって、わたしを荷物のように掴みとろうとするのは誰？

わたしがかろうじて外を覗ける陰気な包みのなかで思い切り泣いてみても、か細く屈辱的な痩せた声が、耳のなかに入り込んで来るだけだ。

泣き声にさえ欺かれて、声の詐欺は、わたしを幾回りもし、焦慮の思いを熱くさせ、空はロープの巻かれるキーキーキューンと言う音にあわせて、静かに幾つもの円を描いて回りつづけ、わたしは同

時に襲ってくる、さまざまな衝撃を扱いかね、白色になって開く怪奇な木の葉をちらちらみて、振動に身を任せている。

まかせながら、大ネズミの尻尾に一巻きされて引かれていくような、人間の世界から遠い何かの企てじみて、ただなりゆきまかせに……。顔がぼうっと柔らかくふくらむ、のどかな気持ちも交じり合う警戒心でいるのだ。

背後に流れていく山地は岩のように固いのに、何故か砂のような音をたてている。

滑車の音が絶えてぱっと傾くと、呼吸用のわずかな隙間から、空を斜めに切ってそそり立つ薄茶色の山が見え、もう一方に傾くと、クリーム色の坂が見え、次に見たものをつなぎ合わせると、空に聳え、湯気を上げる藁屋根だ。ふくらんだり、へこんだり、高く低く藁屋根のピラミッドが、いま、呼吸している。恐らくそれと一緒にわたしの包みも呼吸して膨らんだり凹んだりしている。

12　柔かいピラミッド

脱皮するセミが、畳んだ羽根を伸ばすように、ガバガバする包装のなかから、わたしは苦労して這い出し、着衣を直すと見せて目を伏せたまま、寄ってくる老人たちをやり過ごしてしまう。わたしの背中のファスナーがきしみ、体中が痛い、両腕をあげようとしても、服がバリバリしてよくあがらない。あたりを見回すと、一人で歩くのも窮屈なくらいの細い道がある。斜面は木の根にささえられた階段状の粘土質の凸凹で、歩きやすくなっている。

低いところに部落があり、部落の家々の見事な藁屋根から、もうもうと湯気が上がっている。ちょうど巨大な大昔の動物が息を吹き上げているような大藁屋根の群れ。突然、歓喜がくる、周囲を見回す、何度も何度も。ここは、わたしの故郷、それは今も変わることはない、でも……。

わたしの頭が、がたがた揺らぎ、わたしの力では動かせないほどになって、全身をそのなかに収め、わたしの身体をわたしの足が登ってきて、膝で内側から額を打ち、記憶の想起を催促する。裏返しされた頭蓋骨のなかで、わたしの足は駆け、すっかり変わった声で、克を呼んでいる。押さえつけても暴れる記憶が外に飛び出しそう、わたしは首をぐらぐらふり、首は一本の太い幹になり、わたしの身体はその枝を登って懸命にそれを揺さぶっている。一人相撲の震動で、頭骨は形があるのか、ないのか頼りなく薄い、なかは首のない体。森の繁みの暗さが、わたしの歩みを遅らせる。右手には深く見事な杉林が広がり、百年林と太々書かれた杭が立っている。勾配の急な大藁屋根はどれもやわらかい有機質のピラミッドで、森の空間に浮いているのだ。

先回りした克がいる、広にノブがいる、老人がいる、みんな、おかしな方向に首をまげ、風に耐え、よろめいて首を逆の方向に折り直す。

弾んだ若い声。はしゃぎながら、老婆から老婆に手渡されているものは赤ん坊だ。唇をまげて腕から脱け出しきゃっきゃっと歓声をあげるが、すぐ危険を予知した動物のように桃色の薄皮のおでこを紫色に変え、泣き出してべしょべしょ、双方の目の半分を水色にして開いてはすぐに8の字に絞りあげる。帽子からのぞく髪は白い。

「……これはアンの赤ちゃん？」

わたしの喉にいくつもの言葉の波が来て、おかしなことに大波を乗り切れない……SOSのような声が出ている。自然色の、ふんわりとした手編みの服をつけている赤ん坊は、変に押さえた哀しい声になって、わたしに向かって泣きつづける。

目はよく見ると涙のなかに底知れぬ目があって、じっと凝視している。赤ん坊を抱いている老婆は、わたしの方へ、わたしの方へと近づき、抱いていない老婆は鼻を上に持ち上げ、鼻に向かって不平を言いながら歩いてくる。

あれから、一年は過ぎている、老婆たちにわたしが分かるのだろうか？　まさか？　ワイヤーで引き上げられたばかりだというのに……。わたしは災禍を何度も潜り抜け、痩せ細って変貌しているのだ。若い女の子が珍しいだけにきまっているわ。

目をそらすと、巨大な風車のプロペラがゆっくりと回転し、風車の完成したときの部落の歓喜が耳元を弾丸みたいにかすめて過ぎる。四本の風車を軸に、お伽の国の風景が回転する。
克と広が老人に案内された家の中を歩き回り、感嘆の声をあげる。
「ホッ、ホウ、ホッ、みろ、この柱、まるで、お寺みたいじゃないか。さすが、木の国の建物は違うなあ。良質な木がふんだんに使ってある！」
「それにしても、天井が高い！　三階建てかな、四階建てか？　あのはり、カーブのある、あれは、一枚板だよ。見事だなあ、括ってある縄の幾何学模様、燻されて、てかてか光ってるぜ！　ほう、すげえー、囲炉裏の上を見ろよ。何本も何本も、吊るされてるのは鮭だよ、鮭の燻製だぜ！」
「ヒャ、ヒャ、ヒャヒャ、すげーな、こりゃまた。わかったぞ、この家は宮大工がつくったみたいに、金属の釘一本使わずに造ってあるんだよ。参ったなあ、雪を屋根に溜めないために、急勾配の巨大な大屋根を支えるこの通し柱！　贅沢にできてるなあ！」
広が際限もなく昂揚していく。
「見て！　見て！　この自在鍵、鯨と花の飾りがついてる。ウワァ、感激だなあ。花はチューリップ、ちょっと、意外だけど？」
ノブがわたしを振り返える。
山が崩れて、孤立するまでは、車も結構入ってきていたのだ。物々交換みたいに貴重品がこの山国

を潤していた。
「そうなんだ、それで、若い人が出て行ってしまったのね。そして二度と帰らなくなった……」
ノブがこの部落の歴史を察して、痛ましそうに、老人たちに目を走らせる。
老人たちは頭をつき合わせ、なにか相談している。こんなに多くの来客に戸惑っているのでは？わたしは身内のように心配になる。
大きな囲炉裏は自然石で、とろとろに磨きこまれた表面に、不思議な角度から老人たちを映し出し、見る間に赤々と炎が燃え上がり、何時の間に用意されたのか岩魚の串刺しが炎を囲んで、懐かしい匂いを漂わせはじめる。
外は雨になる。天から部落にぶちまけられ、谷から天にぶちまける滝の回転。この部落が谷の水を寄せ集めて暗い円環運動をはじめ、嵐のなかで静寂が思い切り膨張し、わたしを聴覚障害にして押さえ込もうとする。
「嵐が終わったら、藁屋根が蒸気機関車のような湯気を上げて走り出すんじゃないかな！」
克がいう。
「サンは藁屋根に落ちる滝のような雨を見たことがあったのか？」
ない、ないわ！
もう記憶は、頭のなかにあるのではなく、この村の全部を占めている雨粒そのもののような大量の

粒になって、わたしを溺れさせそうになる。
「あのとき、町で、アンの声を、確かに、聞いたの。アンがわたしたちを呼んでいたのよ」
話が通じるのは厳しいことで、失敗し易いことなのに、わたしが簡単に話出している。少しずつ変化して、徐々にはっきり話すことが出来ている。
「嵐の音など聞いているときではないのよ。わたしが話してるのに、それを聞くためにだけ集中してほしい」
「話せたのね！　始めて聞くあなたの声」
ノブが長い手でわたしの背をたたき、わたしと一緒に呼吸をし、すばやい瞬きをして、わたしの言葉を引き出そうとする。かすかな不安と一緒にかみしめる愛の言葉。
「克、わたしはあなたが好き！　それが言いたくて、それだけが言いたくて、耐えてきたのよ。あなたが好き！」
克とわたしは向かい合って座り、重い息をする。
「一体、この家に誰が住んでいたのかしら？」
ノブは脳天から声を出して注意を喚起し、老人達の動きを監視しているつもりでいる。
「ここは死後の世界なのか、それとも蘇生の世界なのか、その正体が知りたいね？」
「あなたとクモ糸のなかで話し合った言葉が思い出せない？　あのときからこの迷路に迷い込んだの

よ、多分、きっと」

わたしたちの言葉はかみあわない。それは、わたしの声が克には聞こえていない証拠。

「おれたちは透明な罠に、自分の方からかかったって言う気がするんだ……」

背後にも前面にも老人たちの眼があるようだ。

「見覚えがある、何年まえになるかのう、何ヵ月前になるかのう、地獄の罰に痛めつけられ過ぎたか、相当変わって生まれ替わってきておるの。人を愛しているという顔付きはしておるが、その優しさは、町で死人を見つめすぎたからじゃろうて！」

小さくても鼻が高くて気品のある老婆と、渋色の皮膚が艶よく光っている老婆は、アンの世話係りだった。わたしの頭のなかで、老婆一人一人について、引きつっている思い出が一瞬一瞬切って落ちる。

痩せてトカゲに似ている老人は？　わたしがちょっと判断に迷う顔つきを見せると、はじめて頬を動かしたように、むけて乾ききった老人の皮膚の一部が、ひらめいて、わたしの飲み物のなかに落ちる。

わたしは、ここの老人の一人一人と血が繋がっているのだ。孤立した部落のこと、殆どが血縁と考えるのが妥当だろう。そう思うことで、わたしは身動きができなくなる。眉間を刺して哀しみが収縮し、瞼が重くなる。

部屋から浴室へ行く渡り廊下は、堅く踏み固められた粘土質の土間で、磨かれて影を映す敷石が並んでいる。洗面所の水をすくうと水面が歪んで映す鏡になって、顔の一部分がくるくる回り、きらっと流れ、流れてくる水が地に埋め込まれた桶に溜まり、その底からも清水が湧き、水苔が盛り上がってくる。

檜の香りが湯気のなかにもやっている。ノブとわたしの痩せ細った体が、枯葉のようにたゆたい、全身の毛穴が気孔のようにぱっくり口をあけて、黒々とした死相を吐き出し始める……。

顔に山の外気がくる。

「虹よ！」

ノブが叫ぶ。

虹……わたしが瞬きをすると、もう鮮明な色がひと褪めし、もう一つの瞬きで虹は消えてない。肩を沈め、顔を上向きにして外を見ると、途端に虹は鮮明に浮き上がってくる。雨があがっているが、この窪みの部落に、今も風がどうどうめぐりをして、谷底から水を吹き上げては雨をふらせているのだ。虹は弧の一部を消したり、千切ったり、薄く、濃く、変幻自在だ。

風呂から上がると、三部屋の間のふすまを取り払って、三十六畳はある広間で、老婆たちが、黒塗りの脚の高いお膳を並べている。飢えている、わたしたちは料理に息を呑む。

「あるところには、あるんだなあ。まるで、昔の旅館じゃないかあ！」

広が克の耳に口を寄せてから、ゆっくりと唾を呑み込んでいる。その音。
克は老人に近づく積極姿勢を見せるが、何処か通じない食い違いがあるのか、異人種の神のように広間の竜のうねりをみせる床柱を前にして座り、おぼつかなく心もとなげになる。
「あんたを見ておると、何枚にも別れている舌が見えるようじゃ、一度に何人前も話しているように見えるの。もっと時間を使って、一人づつさばくつもりで話したら如何かな？」
「おれたちに他意はありませんよ、ただ、その、休憩のつもりだったんで……」
そんな克の言い訳など抹殺してしまう沈黙で、老人達がわたしを見ている。
「見覚えがあるんですか？　これほど痩せ細っても……？」
床の間の前、中央の位置に厚々とした座布団が置かれる。左右に長老の考え深げな老人が座る。それに向き合う形に四人の席がつくられる。
食欲に押されて、わたしたちは座につく。その回りを老人や老婆が取り囲む。四、五十人が数えられる。これがこの部落の住人の総てか？　年は取っていても栄養が行き届いているためか、わたしたちよりは何倍も生き生きとしている。山国の地形によって鍛えられた、強靭でしなやかな筋力を持ち、生涯現役である彼らは、客人を迎えいれて興奮を押さえきれないでいる。
顔の彫も深く、考え深げで、美しくさえ見える老人も、抜けるように色白の老婆も何人かいる。
「あなたは、お元気そうですね、何歳にな、なられましたか？」

克がどもりながら、老婆に問い掛ける。
「十二歳ですけんど……」
老婆が得意げにわたしたちの顔を窺う。そんなこと、わたしは知らない。
「ははは、は、いやあ、それは……。気持ちではなく、その、本当のところは、どうなんですか？　ああ、レディに歳を聞くのは、やっぱり、ここでも、やばいのかなあ？」
克のあとを引き取った広が、切り込み損ねて眉を、頭を掻く。
「だからあ、わたしは十二歳、この人は三歳、この人は二十八歳の働き盛りで、あの婆さんは四十三歳で、一番の年嵩なんじゃ」
「はあ、ということは……」
克と広の声が重なる。
「そうだよ。百歳を越えるとのう、この国では、新しい人生を歩き始めるんじゃ。どうかの、うらやましくはないかい？　そうなると、本当に若返るんだからの、不思議なもんじゃよ」
「はあ、それは、それは、いい話だなあ！」
克が紅潮した顔で、しきりに頷いている。
「僕も、こうなる前、僕たちの国でも、マイナス二十歳運動を始めるべきだと提案していました。十歳説もありましたが、十歳くらいでは、驚きも、得もない、手始めにみんなが、抵抗なく、受け入れ

られるようにと。大学で、サークル活動でしたけど。負けたなあ、マイナス百歳とは凄いですね！」
「ある日をきめて、六十歳以上の人は二十歳若くなる。後の人は六十歳の誕生日ごとに二十歳若くなっていく、そういうのが、ぼくらの提案でした。ぼくらのサークルは、四人きりでしたけど……。一人は今度の細菌戦争で死に、一人は行方不明なんです、みんな、優れた奴らでした。それにしても、先を越されていたとは、すげえなあ。この部落は、本当に、独立国なんですか？」
広が昔のインタビューの要領を思い出したように、再度切り込んでいく。
「憲法できめたんじゃ。ここは、酒呑地、のんべえの国！」
老人たちが手を叩き、声をあげて叫ぶ。
「酒呑地万歳！　万歳！　万歳！」
顔が隠れるほどの、大きな朱塗りの盃が運ばれてくる。みんなの膳にも朱の中盃が配られる。その時老人達の拍手に乗って、背の高い男が、二人の老人に左右を護られて入ってくる。驚いたことに顔には、何の趣向か、赤い鬼の面をつけている。かなりな年期ものだ。
「見てみろ、若者じゃないか！　あれがこの国の王か？　王子か？」
「なんか、歓迎のセレモニーかな？」
「それにしてもオーバーな？」
克と広が囁いている。

「それでは、これから、われらの童子さまを囲んで、四人の客人の歓迎会を開くことにする。まずは、童子さまに、乾杯の音頭を！」長老のカントさんが立ちあがった。
「友人の健康を願い、国民の健康とこの国の未来を祝って、乾杯！」
鬼面の男も立ち上がり、高々と盃をあげる。甲高い若々しい声が喜びに慄え、戦慄が走る。興奮しているのかもしれない。鬼面の下の眼が動く。克、広、わたし、ノブ、と動いてから、克の上に戻った。
「これで、童子様のお相手も見つかったのう。まずは、乾杯！」
わたしの隣にいた老人がわたしの盃を満たした。酒は、葡萄酒。野葡萄でつくるのは知っている。膳には燻製の鮭や、ぜんまいや、わらびや、豆腐、ハムなどが並べられている。どれも燻製の保存食。あとは簡単に手を加えただけだ。
老人達の意味ありげな視線、この視線はアンの焼死した後でも……。
みんな酒が強いらしい、朱の大盃が次々に飲み干される。
「酒、呑み放題、食べ放題、シュッシュ、シュッテン。働き放題、寝放題、ティン、テン。嘘つき放題、生き放題、シュッ、シュッ。遊び放題、読み放題。考え放題、死に放題、ティン、テン。ここは天国、酒呑国！」
盃が楽器のように鳴らされ、缶がらのなかで石ころが回転する、どこからかフルートの音。リズム

に狂いはない。そのとき、わたしの焦点が狂った、瞬きする間、大盃で酒を煽っていた老人たちが、一斉に青鬼に変貌したのだ。

「なんだ、なんだ、何の真似だ！」

克と広が叫んでいる。楽器が掻き鳴らされ、青鬼が舞いはじめる、何人かが赤鬼を担ぎ上げる。わたしの原始の血がさわぐ。

坂を上下する日常で鍛えた筋力で舞う青鬼たちは、老人だとは信じられない熱気で舞いつづける。老婆たちもいて、踊りの輪はわたしたち四人を取り巻いて頂点に達する。克と広も、輪に加わるが、酔いが回って足許から崩れ、立ち上がることも出来ない。

ノブは、酔いがさめたように、わたしの手をとる。健康な人間の本能でノブは危険をかぎとっているのかもしれない。

「赤鬼がいない、いなくなったわ！　さっき、赤鬼が、カツ！　カツ！　と、手をあげて、確かに、雄叫びをあげたのよ。勝利を誇示したのかしら、こっちは、戦ってもいないのに……。おかしなことね、どうする？　逃げようか？」

ノブがわたしに耳打ちする。魔法の足をもつ老人たちは踊りつづけている。

「とにかく、わたしの知る限り、あんな若い男がここにいる筈がないのよ……。酔って眠ったことにしょう、なにげなく……」

わたしは、ノブの背に被さり、眠った振りをする。
何時までも何時までも老人たちの踊りは続いていた。山家全体が共鳴し、住み着いた亡霊たちまで舞い降りてくる。本当に酔いが回って来たのか、頭のなかを幸せの黄色い靄が昇っていく。懐かしい幸せな気分にふんわりと包みこまれる。
「まだ、サンがいる、希望は残っているぞ！」
老人たちが囁く、囁きが囁きをよんで飛び跳ねる。わたしは靄を剥ぎ取られて、すくみあがる。わたしの上に夢を描くのはやめて下さい。
「サンどうしたんだ、どうしてそんなに小さくなってる？」
克が酔眼でわたしを見つめている。わたしは老人の方を窺ってから、目配せする。
「ノンベイの国だ、大目に見てやれ！」
それだけいうと義務でも果たしたみたいに、克は本当に眠りこける。広も大の字でいびきを響かせる。
わたしも、夢をみている。ノブもわたしの下で、うとうとしている、いい気分だ。
眠ることと死ぬことはどう違うのでしょう？　酔いが回って、周囲がくるくる回っている。視界がぼける、ピントは合わないほうがいい、想像力が刺激されるもの。現実の醜さにピントを合わせる気はない。揺れる感覚、酔いの持続、幸せの予感。わたしが浮き上がる、ふーわ、ふわ、わたしが動い

ている。寝たままで、揺れている、ゆら、ゆら、わたしが浮遊している。揺れるのはハンモック、パパとママが覗き込む、子供のわたしが笑っている。アンも揺れる、ママもパパも揺れている。わたしは春の靄がすき！

菜の花畑がつづいている、かげろうが、ふらふら。動いていく、何処へ？　誰かがわたしを運んで行く。何故？

「とまれ！」

わたしは叫ぶ。回りから何本もの手が伸びて、わたしを押さえ込む。背中が固い、戸板みたいなものに乗せられて、六人の老人にかつがれているのだとわかってくる。

老人たちの踏む玉砂利の音、わたしの底がきしんでいる。キュキー、キュキュ。アンが戸板を引っかく。

多分、あの家だ、わたしの家、アンの家の前。

「とまって！」

わたしは叫ぶ、喉がはりさけようとも……。必死に上体を起こそうとする。

「アンは誰を愛していたの？　アンは誰に愛されていたのよ？　アンは老人に手篭めにされ、老人の子供をうんだの？　その証拠にアンの子供は白髪じゃないの？　アンは老人を生んだの？

アンは恥じていたのよ、血縁の老人を愛したことを！　老人たちに愛されたことを！　でなくて、何

故、アンは死んだの？　何故、誰もアンを助けなかった？　誰があの家に火をつけた？　人殺し！　わたしもまた、こうして運ばれていくのね。アンと同じ運命が用意されたの？　人殺し！　わたしの、ママも、パパも、あなたたちに殺されたのね。子供を連れてここから出て行こうとしたから！　そうなんでしょう。わたしは、この時を待っていたのよ。その為に帰って来たの。殺される前に、真実を知る義務があるわ！」

アンが手に力をこめて、頷く。その調子！　わたしの影が黒い腕を広げて宙に飛び立つ。

「アンの、ママの、パパの、恨みを込めて！　あなたたちは一体何をしたの？　血縁の子供として、わたしは、それが知りたい！！」

わたしは叫んでいる。わたしはわたしを制止できない。何人かの手が、わたしの口を押さえ込もうとして、誰かの手で払い除けられている。老人たちは息をつめ、悲鳴を押さえ込みガタンと揺れて、静止する。

「何処へ行くの？　焼けてわたしの家など、あるはずもないのに！」

わたしはまたも、動き出している。今度は何の配慮もはらわれていないから、口と上体を押さえ込まれ、毛布で覆われて視界が見えない。

乱暴に投げ出される。

無口に老人たちが引き上げていく。

わたしは、柔らかなベッドの上だ、ということは……。ぎょっとする、誰かが隣にいる、誰かがわたしの上に覆い被さる。わたしは、窒息しそう、必死で跳ね除けようとあがく。動けない、押さえているのは若い男だ。

「何をするの！　よして、よして下さい！　わたしはアンではないのよ。あの可哀そうなアンではないのよ！」

熱い鼻息がわたしの顔にかかり、火ぶくれをつくる。複雑に手足がからみあう。

「何もしないよ、勘違いするな！　パニックを起こすな！　冷静にやり過ごすんだ！　誰も呼ぶんじゃない！」

凶暴なわたしの手足が男の頭を蹴り上げる。

「油断させようって、常套手段ね、そんなことくらい分かっているわ！」

わたしは狂いまくる男の腕に噛み付く、悲鳴があがる。ひかえていたらしい老人たちが入り乱れる。

「サン、サンは此処よ！」

わたしの耳は本来の仕事を忘れて、何時から拡声器みたいに大声で怒鳴るようになったのだろう……。援軍でも来るみたいに。

「さわらないで！」

何本もの老人の手がわたしの口をふさぐ。
「殺人鬼だなんてわかってるわ！　人殺し！」
もうすぐプツンと切れてしまう。
「サン、サンに手をだすな！　おれのサンを返せ！　返すんだ！」
克だ！　克が若い男にとびかかる、もみ合っている。克はさっきまで酔いつぶれていたのに？後ろから広が何かを打ち下ろした。彼らに踏み潰されないために、わたしはベッドから転げ落ちる。
「サン、もう心配するな、おれたちが来たからには……」
広が叫んでいる。
「おれたちは結婚したんだ、おふくろも立ち会った。サンに指一本触れさせないぞ！　おれの生きている限り、どんなことがあっても！　いい若いもんが、誘拐してものにしようだなんて！　汚たねえなあ！　おれは、決して許さんぞ！　恥をしれ！　おれがこんなにサンを愛しているというのに……」
やっぱり、克だ！　若い男が突き飛ばされる。襖が倒れ、何人かの老人が下敷きになって悲鳴をあげる。克が泣き出している。泣きじゃくっている、酔いが残っているのだ……。
「違うんだよ！」
二つの眼が鼻柱でぶつかっている、若い男は立ち上がろうとして、今度は広に押さえ込まれる。
「広、わからないのか？　僕がわからんのか？　全く単細胞が揃いも揃って……」

広が反動をつけて、飛び起きると、若い男を指さして後退する。
「克！　北、北だよ！」
「北だと？　この男が？　北が何故、サンに手をだすんだ！」
克が雷をくらったように棒立ちになっている。
「どうして、北がこんな、ひどいことをするんだよ。何でよりにもよって、サンを手篭めにするんだ。おれは、北だって許さない！」
北が開き直る。現状を不利とみた老人たちが引き上げていく。
「僕は、ここの老人達に監禁されているんだ。子孫を残す種馬として飼育されているってえわけだよ。お前たちを見つけた時は嬉しかったな。何とか連絡をとりたいと思ってさ、乾杯のとき、第一声で、「友人に乾杯！」と言っただろうが。……また広間で、「克！　克！」って何度も手を上げて呼んだが、わかってくれない。しかたないから、このきわどい時まで待つことにしたんだ。でも誤算だったな、サンをこんなに怖がらせて……、ごめんな！　老人が覗いてるから、やってるように見せて奴らを安心させ、サンに連絡を頼むつもりだった……。僕はサンを覚えていたけど、サンはおれなど眼中になかったってわけだよ……」
北がふてくされている。
「この話、老人が聞いていたぞ、まずったかな、どうする？　正々堂々非を正してここで、おれたち

と一緒に暮らしてみないか？　おれにも分かってきたぞ、放題憲法もマイナス百歳も震源は、おまえだったんだな。こんな山国で、出来過ぎだとは思ったさ！」

克が老人達を警戒して小声になる。

「退屈していたからな、ちょっかいを出してみただけだよ。だけど、ここでは、すでに実行されていたんだ。凄いぞ、ここは……。童子さまとかにさえ、ならなければ……。それより、僕を助け出してくれよ、というか、叩きだしてくれ。　種馬の役目はもう御免だ、僕は、ここから逃げる。おまえたち、時間稼ぎをしてくれよ、頼む！」

「逃げ方はわかってるのか？　ワイヤーで降りろ。それから岩をくぐれ！　ワイヤーが切断されないうちがいいぞ！」

克は男と、もみ合っていると見せて作戦をささやく。

「晶は死んだ、広と二人で、海辺に葬ってやったよ。おまえ、食べるものはあるのか？　昨日の燻製、ポケットにストックしておいた、これをもって走れ！　おれ達が反対方向に追い駆けるから……。そうだ、おれのおふくろにあったら、元気だと伝えてくれ！」

広が泣き出している。

「また、会えるさ、生きていれば……」

ノブが微笑んでいる。ノブがわたしを救ってくれたなんて、わかっている。

安堵と放心、わたしはノブに抱きすくめられる。克たちを叩き起こすのに、どんな手をつかったのだろう。
「あのとき、北さんは克の名を呼んだの？　そうなんだ、わたしは面識もないし勝利の勝つかと思って、宣戦布告かと思っちゃって……。でも、よかったわ、みんな無事で！」
「ノブは、お調子ものかと思ってたけど、なかなか、考え深いんだね。見直したよ」
克がいい、広が何度も頷いている。

北はさっと手を上げると、振り切るように白みかけた外に向かって駆け出していく。克が追い駆けていくと見せて、腕を回転させると、今度は広のあとを追い駆ける。態勢をたてなおした老人達が克の後ろを走っていく。わたしは口を開けてそれをみている。
びっくりしたのか、季節はずれの鬼ヤンマが、わたしの顔に衝突してUターンした。

13　幻日のなかから

見えない手にあやつられて、ワイヤーが崖を侵食して食い込んでいる、キューキュー、ギーギーと、太さと張り具合に従って調子をもつ。突然若い声が樹々の間を抜けてきて、耳のあたりで炸裂する。

雨が降ったからだけでなく、下流に何かあったからか、水位が想像も出来ないほどの高さに登って、まるでこのルートが地図に記載されていて、すいすい簡単に来れるというように、人が入ってくる。空気はひんやりしているが、湿気は屋根から一掴みずつ吹き出るような立ち上り方をしている。

ほっそりした女が赤い濁った目をじっとわたし達に注ぐ。男五人女六人の遠慮のない高笑い。破れた紙が彼らからこぼれ、ぶざまに破れた包みが三つ投げ出され、頼のまれもしないのに老人たちが走る。

「A市からきたのさ、三日間も岩場で立ち往生していたところを、助けられた」

こんな命がけで来るところに、縁もゆかりもない若者がぞろぞろくるとは、もっと大変ななにか、命がけの事件が起きているらしい。

「何が起きてるのかって聞くんですか？　海面が上昇して、陸地は殆ど水没してしまいましたよ」

「異常気象か何かですか、それともまた、戦争ですか？」

「そんなこと聞いてどうなるんですか？　どうかなることじゃないんだから……」

着ているものや、声や動作で誤魔化されてはいるが、彼らはよく見ると老人たちよりもミイラに似

ている。それでもミイラとしての生活に慣れたとでもいうように、皮膚と骨の間にからからに乾いている腱をはったクルブシを見せ、機械的にぴちぴち動く。
「命がけで来たにしては先住民が多すぎるな……」
「しかし、原始生活なら略奪がつき物の筈だしね。先住民がいるということは、ここが豊かだと言うことでしょう！」
彼らに比べたら、わたしたちなど、もう少しくすんだ生活の襞をもっている感じがする。彼らは老人など見向きもせずに、ほらを吹いたり、おじけづいたりしている。
「思いもよらない大きな屋根じゃないか、どうなるか考えてみろよ。大家族制度といくか！」
音をぴしゃっとたて、玄関をあけては閉じ　彼らは人の住んでいる気配のない家を発見しようと活気づく。
広と克は、面倒くさそうにそれを見ている。北が去って、二人に考え深げな陰影がついて回る。
「ここがこんなに来易いところで、通りがかりの連中が標的を狙うように、あのワイヤーロープから攻めてくることになるとは……。切り落としてしまえ！」
「亡くなった者や、この部落から出て行ったきりの者だけで、誰もここに用がなかったから、この部落に誰も出入りはしなかったし、国も山の崩れを放置し、捨て去られていた、それだけのことなのに……」

そんな馬鹿な！　ここは秘境。山が崩れて入り口が閉ざされ、容易に入り込めなかったのだ。それなのに、もう、こんな紙切れが進入して来て、ゴミ屑と一緒に投げられている。
――生き残る道を教えます。ためらわずに命の貯蔵庫たる、軍に来たれ！　要塞は青年のために門を開き――
ビラには遠い伝説を読むような不思議さがある。軍とは、何処の国の？　要塞がノアの箱舟になるか、ノアの箱舟は山にあるのよ！
どこかで金属性の音、打ち当たっても全部の衝撃が音になりきらない森の深みでは、きらきらする、こんな金属音に飢えていたのだ。この音を聞かずには生きていられないものだった、眼のまわりを派手にくまどった少女たちが、ステップを踏んで、甲高い音楽が天井をゆるがす。低いよろよろの騒音と人込み、ひん曲がっている路地、あんな地平が現れてくる。テレビの音が波うって、音楽の次は早口で何語ともわからない男女のおしゃべりが続き、直ぐに黙り込み、もう、聞こえて来ない。
克が身をかわして、わたしから消えようとする。急に自分だけの興味に心を奪われてしまい誰にも好奇心はなく、背中に尻尾をぴんと張っている狐のように不審な後姿をみせ、妙にひたむきに歩く。野葡萄が真っ黒に揺れ、頬に爽やかなその味が冷たく意識の底に沈む。
神経質に　唇を湿してみる。そんな奥まで入ったら山が暗くなって迷子になってしまう。
「おふくろ、なんてものは、運のない女たちさ、救おうと思っても始まらないな。きみのおふくろだ

って、そうだったんじゃないの？　今ごろ、おれのおふくろ、こぼしているだろうな、でも、こぼしてもきりがないんだから……」

「あなたはどうして、何時も逃げようとしているの？　こうなっては、あなたの起点はあくまで、あなただと思うことよ！　あなたはわたしに、そう教えてくれたじゃない」

わたしは長い間伯母に、わたしの父母はオランダにいると教えられてきた。それなのに、父母はここで殺されたのだ、そう、信じるしか無い不幸。

「それで……到達点は？　それが知りたいよ！」

霧がきて太陽のまわりをぐるぐるまわり、太陽がふらふらと引っ込む。

このあたりは草がびっしりと生えているから、草深に足をとられて転んでしまい、眼だけで彼の行方を追っている。

草の葉一本挿んで右目と左目の彼に対する角度の違いで、克を別々の位置と形で見るから、もう立ち上がっても眼筋がおかしくなって、幻日が幾つも生まれ出る。

わたしは生まれて初めてこんなに多くの幻日を見、ついでに灰色のユニホームの隊列、人、車、広告、耳をがんがんさせる混乱を、以前本当にあったことが、ここにもあるように見る。

この木の根の奥から、木の枝の上から、この木だけでなく、木という木の全部に、この部落で生きたものの、死んだもののざわめきが聞こえる。

命綱で降りていく老人に救い上げられているのは、わたしたちを置き去りにした彼らだ。顔は傷だらけ、あの時荷台にいた三人だけで、運転台の二人はいない。ヒゲとニキビの二人は手で状況説明をしようとして、対岸の岩山を指すが、中途半端で止め、足元の土を踏みつけ、部落のなかを値踏みするように窺い、眺め回す。男二人とも額の血管が電線ほどに膨らんでいる。

「どんな格闘があったの？」

「ただの二三日で何があって、どうして簡単にここに来ることが出来たの？」

わたしとノブの質問ばかりが活気づく。

彼らは少女をはさんで、ひそひそ話を長引かせている。今までの彼ららしくもなく、改まった態度で老人に対している。

「実は町に引き返す途中、少女が腹痛を起こし、山中を迷ったすえ、洞窟に入り込み、とうとうここにきてしまった。是非、土地の方に助けていただきたい！」

少女の胸のあたりのおびただしいシワは、背負われてきた長い距離を意味している。少女は鼻孔の下で輪を描くかたちに小指を動かし、なにか熱っぽく唸りそうになる。

「のっけから、わしらの好意を分かってくれたのう。用があったら何でも言うんじゃ」

長老のカントさんは、外人のような風貌で、大きな身体で少女を背負い、広場の前の家に導いていく。

「ここは酒呑地と言うてのう、いわば、ノンベーの国じゃ。いい酒もある。果物も、木の実も、薬草もある、心配はない！」

老人は何時にもなく饒舌になる。彼らは重々しい声で感動しながらいく。

わたしの言葉が再生していることなど、全く関心を示さずに行ってしまう。優しい言葉をかけたり、病状を尋ねたり、看病したり、純粋な友情を示すつもりでいると言うのに……。

「わたしたちなど無力でとるに足りないと思っているのね、向こうがその気なら、誇り高く手助けなどしないでいましょうよ」

ノブは言う。

わたしは布団の中央に自分をおき、記憶の真中に固定しようとする。いびきに似た音をたてながら、喉をかきむしる。わたしはまだ同じところに淡い炎症を持っているらしく、寝苦しさで夢をみている、ぬらぬらするゼリーの波、手を振るとまた揺れ返して、ゼリーがクラゲのように背中に流れ込み、口からも飲み込んでしまい、わたしはゼリーのなかに閉じ込められる。気づくと小さな四十三歳だという老婆が背を曲げて見守っている。わたしの叫び声は、真空にシャブリ取られる。

よろよろと横波が漂うように老婆の肩が広がり首がなくなり、小さな動物の触覚のようなものが、わたしの口の中に入り込む。

「ここの谷川はどんな弱い風も集めて、大きくする風の袋じゃ。もうこれで大丈夫。よく帰ってきた

の、早く、死相を払いのけるんじゃ！」
　わたしはそんな暖かい言葉に震え上がる。
「気ずいているわ、ほら、もう、口の中に入っています、ウサギの目のような木の実でしょう」
　わたしは指を口に持っていき、あくびだけを掴み取る。
　玄関に錠をかけておかなかったから。すでに口の中にある木の実を噛み、頬骨に何カ国人かの血が混じる思いが来る。知らないうちに棺に入れられたりするんじゃないでしょうね？　わたしは朝まで絶対に一睡もしない。
　その間に、この世界が熱で燃え出すか、冷えて縮むのか耳を澄まそう。老婆はまるで根のような耳から首の筋を急に現わにして、横に倒し、ゆっくり振る。
「耳を澄まして見ても、なにも聞こえはしまい。今夜は静かじゃ、この酒呑地以外の人の世界は無くなってしもうて、ゼリーの塊と、糸を引く雲と、風の包丁が、地上を占領してしもうた。いずれ、三つのうちの一つが勝つじゃろうが、わたしらが争いに巻き込まれることもない。どの木も、大昔の爬虫類の爪よりも、強く、深い根を地中の岩盤に食い込ませている。わしらの目のなかに若いもんが見え、本当にここに、こんなに現れた。このうち何人かはこの国のために、赤ん坊を生むことじゃろう！サン、あんたが生みそうじゃの！」
　不思議な力がわたしに入ってきて、ところどころにコブをつくって膨れ上がる。わたしは憤然とし

て掛け布団にもぐり込む。他人の寝室に真夜中忍び込んで、まるで、丸裸を見たみたいな、いかがわしい話をするとは……。老婆だからって、許されるのか？　アンはこんな風に自由を奪われていたのね。

「若い人は死に易いんじゃ、子供を残さずに死ぬことが多い。ここにはそれだけが信仰のようにある。あっちに、妊婦がいてのう、町に帰ると言っておるわ。お産を病院でするときめての。風の刃で帝王切開され、熱病の熱で産湯を使わせ、クモの糸の産着を着せることになってしまうだろうさ。そう言うて納得させるのに徹夜で話した。それに、ここにくる道はすっかり閉ざされて、もう、決してここから出られんのじゃ！」

「来た道があるでしょう！」

「ほぼなくなった、人知の及ばぬこと。あんたが自分の身体から道を引っ張り出して進むという野蛮な軽業ができるものなら別だが……」

わたしは寝床のなかで足踏みし、それから歩く、何キロも。歩いても歩いても寝床の中からも、自分の足跡からも出られない運動。老婆は小さな立方体と言う形に、肩の骨を四角にせり上げて、頭を背の中にしまいこむ。

「本人である、あんたに聞いてみないことには、わからんことじゃが、おなかに子供のできたという心当たりはないかいの？　自分の体内に新しい鼓動があるような……。わたしらは、待っておるから、

どうも想像が先走りすぎ、自信を持って言えんのじゃて……」
「心あたり？」
わたしの頬が火照る。
「わたしはこんなに、あなたみたいに小枝ほどに痩せ細っているのに？　ミイラに生理があるなら、ピラミッドの下はもう幾億人かに繁殖して、ピラミッドなど、もうふっとんでいる頃でしょう！　ミイラは孤独で胸苦しいものに違いないわ。雄しべが、風に漂って、小枝に実るとでもいうんですか？何時か霜の花でも咲いたら、せいぜい花粉を吸い込んでおきますから……」
いま。わたしは生きながら墓のなかで目覚めるような目覚め方をし、墓の底にもう一人いる百年前の死体に話し掛けられ、墓を覆す相談をしている最中と言う気もする。どこからも音一つ聞こえず、老婆の手の小さな灯以外は真っ暗闇だ。克はどこにいったの？
「あなたは、長い間生きているのだから、わたしのパパやママのことを知っているのね。教えて下さい、パパやママがどうして死んだのか、みんなに殺されたというのは、真実なのか、どうか、教えて下さい」
わたしは、父母の不在と言う、昔の鎖が音を立てて断ち切られるのを待ち望んでいる。
暗闇の中、　灯は消えている。
わたしは枕に憎悪を乗せ、寝床を敵意の爪で引っかく。アン！　パパ！　ママ！

14　屠場

太陽が沈み、とっぷり暗くなると、鍵をかけ、夜の何も見ず即時に眠りこけて、うわごとで口論をし、膨れても、なお凶暴な睡眠に捕まえられ、陽が昇ると、強制もされないのに急に眠気がきらっとした切断面を見せて消え果る。

早朝は寒いので縁先に炭火を置いて、ノブは鏡を見ている。鏡は柱にかけられていたもので、ガラスの中の箔が虫の這った跡のようなしみを持っていて、それにごまかされて映る姿が美しいと感じる。

「こんなところで強烈な化粧などしたら、山だしのピエロになってしまう。パフで叩いて直してあげましょうか」

わたしはノブに思わず口出しをする。

「いいえ、ピエロで結構！」

ノブは優雅に足を組む。手首を動かし、指を動かし、一年前のような髪型にするのだと言うノブの

手助けを、一年前の彼女などまるで知らないわたしがして、はねる油っけのない藁のような髪をやっとまとめて、ドアの取っ手型の髪を一つ結い上げて頭上に置く。抜け毛がばらばらこぼれ落ちる。
「熱病だったし、まだ、栄養がゆきとどかないのね」
頭をちょっと動かして、かすれた線でできるほつれ毛を巻き上げる。
「少しカールでも残っていてくれれば何とかなるんだけど、サンはいいわね、天然パーマですもん。外人の血でも混じっているんじゃないの？　サンは、なんだか骨格から、わたしたちとは、違っているような気がする？　サンもだけど、この部落の老人たちには、外人くさい人が多いわ。そう思わない？　平家の落人とか？　源氏の末裔とかいうのとも、違うんじゃないのかなあ？　抜けるような色白な老女がいて、びっくりするもの！」
「気がついたか？　おれもすぐに気づいたよ。この土地を酒呑地と、老人たちは言ってるけど、それが臭いな？」
「そうだよ、おれたちに遠慮して酒呑地と呼んでるけど、実質は酒呑国だよ。立派な独立国なんだ！あの長老だと言った老人、カントさんが本当は、国王かな？　なあ、サンなら、知ってるんだろう？」
好奇心を露わにした、ノブと克と広がわたしを取り巻いてしまう。
「さあ、違うわ。老人じゃないのよ。ここの主は童子さまと呼ばれていたもの」
「へえ、それってさ、お遊びかな？　何か、宗教かな？　主って？　キリストのことなんじゃないか？

酒を当て字にして世をあざむいて来たのかもしれないな」
克が蘊蓄を傾ける。
「いい線だな、主天地、つまり、キリスト教信者の地、と近隣の人たちから呼ばれてきたんじゃないかな？　差別されて来た？　または慕われてきたとも？　隠れキリシタンの末裔かもしれないな。礼拝はしないの？」
「教会はない。信者もいないんじゃないかなあ、違うわ、違うと思う。しゅは、酒なのよ、てんは、呑むが正しいんだって聞いたわ。酒呑童子の末裔だと聞かされて来たの。絵草紙の大江山の酒呑童子伝説は有名でしょう、類似の話がここにもあって、昔、オランダ船が転覆して若い船員が、海岸に打ち上げられ、お寺の住職に引き取られて育ったの。美しくて、利発だったらしくて、修行中、仲間の修行僧に妬まれ、あらゆる迫害をうけたのね、ある日起きたら赤鬼になっていたの。いたずらで塗った赤い色がとれなくなったのね。それが酒呑童子の、わたしの先祖の出自よ。魅力もあったらしくて、仲間を引き連れて盗賊になり、追い込まれて転々とし、遂にこの山に篭ったと聞いているわ。酒豪で、楽しい人だったと伝えられてきた、義賊だったとも。だから、周辺の人たちが呼んだ愛称で、酒呑みの地だと、思うわ」
「そうか、大江山の話だって、昔々の絵草紙の話だが、外人だったんじゃあないかって、昔の日本人から見て、彫の深い外人の赤い顔は、鬼そのものに見えたに違いない。そう考える方が、リアリティ

があると、うちのおふくろなんか言っていたもんね。おふくろ、歴史を教えていたんだよ」
「それにしても、ドラマチックな話だなあ、そう思って眺めなおしたら、此処も、色んな発見があるのかもしれない」
「ところで、サンはここで不幸だったのか？　それなら、何故戻ってきたんだ？　それが不思議？」
「あの、白髪の赤ん坊と、サンはどういう関係なんだよ？　まさか、サンの子供じゃないんだろ。そこのところが分からなくては。おれたちだって如何、対したらいいのか、皆目わからないよ！」
「そうよ！　サンはわたし達にもっと、心を開くべきよ！」
ノブまで、わたしを追い詰めにかかる。
「あれは、アンの子供だとおもうの？　わたしの姉です」
「そうかあ、で、アンはどうしたの？」
三人は同時にいう。
「ごめん、わたしのなかで、アンが泣きつづけるから、それを確かめに戻ってきたのよ！　あなたたちを誘っておいて悪いけど、ここは、食糧には困らない、だから、生き延びられる。この間みたいに、何かあったら、わたしの力になって欲しいの！」
わたしは今のわたしにできる、最大限の露出をする。
わたしの言葉が風に乗って漂流していき、その続きに表現できる言葉などないから、もう、いい、

わたしはノブの耳元で終わったという身振りをし、鋏をぱちんと閉じるように想い出を切り落として、体中をきつい寒さに走り抜けられる。

向こうに見える屋根の頂上が、急激な紅葉に朱色をぼかして浮き立ち、対称的に下の方は真っ暗になり、非常に大きい昼の景色が来る。突然の真昼に驚いたか蒼い幽霊になって滑走していくのは、部落に入ってきた者たちが散らして行った紙くず、要塞へ！　のビラだ。

ノブは逆毛を立てたために重そうな頭を堂々とすえ、怖れも心配もなさそうに微笑し、抜け毛を掴んで、風に飛ばしている。

「父を共同火葬場に運んでいくとき、つまずいたら、父に群がっていた気まぐれな魂が逃げて行くみたいに、頭からグレイの髪の毛がこんな具合に飛んでいったわ。わたしも熱病だったから、ぬけるのね。それでも久しぶりに日常の細かな当たり前のことが、もどってきている。しみじみ分かったのよ、生きるために山に来て助かったんだと、あの町だったら、父母が虫のように，虫よりも先に死んでいったじゃない。ここではその人間が動物を殺して食べている。恨みが方向違いみたいでフェアでなくて、何か不吉な予感もするけど、予感があるというだけで、すごく安心感がある。あそこでは予感なしで、ことが起こることになっていたんだから……」

何処かで姿を隠している誰かたちのおしゃべりが始まり、それが絶え間ない地下のコーラスに聞こえ、柔らかい藁屋根まで共鳴する。

「何一つ考えない方がうまくいくものなんだ。気にすんなって！　後で働いて返そう。ここをわれらの縄張りに！　土地を柵で囲め！」
　A市から来た者たちが与えられた食糧を、まるで戦利品を納めるようにバタバタと彼らの本拠地の家のなかに投げ込んでいる。老婆たち四五人がそれをじっと見ている。ここの老人達にとって、それは、過酷な労働のたまものなのだ、無念な思いで呆然としているのに違いない。
「現代人は隣近所で何をしているかなんて、気にしちゃいけないなあ。お年寄りだからって、覗き見なんぞしないで下さいよ。おれたちなど、いないと同然と思って下さい。ここはコロンブスの発見した大陸、住んでいた者なんぞ、開拓者に支配される運命なんだ。錠が必要だなあ、錠がいりますよ。何とかしてください、ないなんて困りますよ！」
「錠は内から掛けるもんじゃない、わしらが外からかける。あんたらに錠を掛ける苦労はさせたくないんじゃよ」
　老人がキットなって言う。
「泥棒がいないんなら、それもそうだろうが……。そうか？　こっちが、泥棒なんだよ！」
　老人達の希望はこのなかの、何人がこの国に残ってくれるか？　何人が子供を産むか？　その何人をこの国に確保出来るか？　それが切ない希望なのだと分かってくる。彼らは必死だ。彼らとて寿命はあるのだから……。全員が明日、その日かもしれないあせり……。

この日、わたしのなかでアンが泣き止まなかった。

克と広はなにやら耳打ちしていたと思うと、あわただしく家から出て行き、猟銃を持つ数人を従える。

山野は忽ち、百年近くも生活して来た老人達の十倍もの足跡で踏みにじられる。

「動物性蛋白の確保のためですって？」

彼らの後を追ってわたしは走る。昼の光のほかに発光して浮遊するルビーの粉のような、一面に赤い光が加わってくる。

急に紅葉した大樹が葉を笠にして広げ、目も頬も燃え立ち、狂いそうなけばけばしさ、次に常緑樹の森を抜けると、そこも同じ色の炎になる。焔の土、焔の空、焔の木の葉の雨。スペクトルに分解しても七色に分かれっこない赤一色、とても耐えられない、山の晩秋の寒気が厳しく手首と足首を捉えて、もうすでに切断されてしまったような感覚がきているのに、焚き火にあたり、ウィスキーをあおっているような火照りに包まれてもいる。人間など冴えない鈍色だから、追い立てられ、保護色の安心感へ吹き寄せられる。

葉を枯らした黄色の雑木地帯へ。それでも黙って先頭に立っていく克の行動は神聖に見える。声を飲み込んでしまう森、わたしは走りつづけているのに、彼らに追いつけなくなる。汗で火のよう

な目、しなびた黒い花穂のように垂れて濡れる髪、足を伸ばすと、もうここは山のテラスだ。横腹のあたりにブーンという音がして、頭を押さえると、風が電気を帯びているのがわかる。
銃声があたりをふるわせる。わたしの後ろから追いついて来たノブが髪の毛を逆立て、逆光だから歯をむく黒豹。一撃があって、頭を下にし頭上で翼を合わせて墜ちる鳥、撃たれたのではなく、鳥の群れのリーダーが、むくれて唸り、降りると見せて通り過ぎるところだ。
「若い人はすぐ興奮するから目標が定まらぬのう」
笑っているのは、大木、その陰に柵のクイを打つ槌の音がする。
「老木はもう伸びないと思うだろうが、伸びておる、この枝におれの手が届かなくなった日が何時のことだったか？　自然の尺度で測ってみないことには、自分の歳月など測りきれるもんじゃない！」
「肥料をあげているんですか？」
「肥料だと？　そのうち、木が動物も、人間も全部肥料にしてしまうだろうさ」
「森が屠殺場になるんですか？」
「とんでもない、保育のための施設を作ることになった、生まれてくる者たちが死なぬようにの。この国にも、未来が、希望が芽生えたんだよ」
「生まれてくるですって？」
どこかに屈折させる鏡があるのか、地形のいたずらか、足元よりも遥か低いところで陽が生まれて

いる。
あの日、町は人殺しの屠殺場だった。空も屠殺場だった、太陽まで撃ち落とされて、隕石みたいに、何時かは地中にもぐってしまうだろう。
安全な施設をつくるなら地中に建てなければならなくなる。霧の奥にもう一つの銃声があがり、わたしは追い立てられる鳥になって、力を振り絞って一段下に飛び降り、崖の淵にたつ。
この先には大きな危険がある。谷の向こうは石灰岩の突起だ。
「こうしているのは、命がけじゃ。突風が吹きつけてのう、その向こうは地雷で吹っ飛んだ山があり、急速に風化してしもうておる。山というもんは深淵を包蔵しているものなんじゃ。見えないが、あの後ろの山は平地へ崩れていく過程、といっても、何時、何が噴出するか、わかったもんじゃない、今に地獄谷から地煙がくる」
老人の穏やかな頑固さを見せる強靭な体。わたしとノブが、ためらいながら歩き出すと、克たちが駆けてくる。
「一発で撃ち殺せないときは、二発目を撃ってはいけないよ、弾がなくなってしまうからな。その時は、腕力で勝負だ！」
首を打つ音。やっぱり人間たちが殺されたあとだから、何かを相手に殺して仕返しがしたくなっているのだ。何もしないのでは彼ら自身が弱いものとして自分を放り出すみたいで、嫌なのかもしれな

い。丸い茶目を開けっ放しの一匹、瞑目している二匹、いやに長々と伸びきっていて、克と広がナイフを持ち、寄り集まって、毛皮から肉片、内臓まで散乱する屠場になる。アケビが紫の汁をこぼすのが獲物の血の流れに混じりあい、彼等の足元に血塊をつくる。次にはもう、焚き火を大きくして、口の中までねばねばさせる。克は一部分毛のついた肉を焚き火であぶりはじめる。

「うまいだろうか？　こいつ何歳くらいだろう？」

「てんで、赤ん坊だよ、泣いていたもの。野ウサギって、断末魔、人間の赤ちゃんみたいな鳴き声をだすんだね、こいつ、人間なのかな？」

「おいおい、変なことをいってくれるな。でなくても、胸の中で血をながしてんだからさあ。今度は、もっと大きなのを捕るとするか！」

「引き裂くか？　心構えができてるのか？」

「おれは、こいつの喪に服すかな。おれたち、人が死んでも喪に服さなかったなあ」

「ぼんやりするな！」

「山ほど考えているんだよ」

「感傷的になるなよ」

「大物は？　時々耳にする、あの獣の声は、そうだろう！」

「深夜から明け方にかけて、仕掛けがいるよ」

「裂くんだ！　手でやれ！　狂人でもなし、平和なんだな。殺さない奴ほど殺される。歴史はそう、教えている。喪に服す？　生贄を捧げ続けるかたち、そんなかたちか？」
「赤い目だ、飼育するか？　ところで、ここの老人のなかに青い眼の人がいるな。気づかなかったか？　やっぱりな、サンの言ったことを実証してるんだよ！」
「さあな、緑内障とか、白内障とかいうんじゃないのか？　栄養が行き届いているせいか、目が澄んでいることだけは、たしかだが」
「それにしても、おれたち、大学で結構面白いこと考えていたんだなあ。つまらんことに時を浪費していたと思ってきたけど、北のこともあって、つくづく思うよ。北も、晶も、克も、おれも、結構、素質があるのかもって。それにしても、どれも、震源はおまえの、おふくろさんだったよなあ。今にして思えば、みんな貴重な論文だったな！」
広が遠くをみている。
「頼むから、おれを巻き込まないでくれよ、何時もおふくろが引っかかっているんだからさ……」
「うまいなあ、血なまぐさいところが好きだなんて、むごたらしいよなあ！」
誰かが言っている。
「獣は冬眠するんだろう？」
「大物を狙おうじゃないか、でも、肉の中から、誰かの遺品が出てきたりしないか？」

「こんがらがるなよ！」
「また、出頭を求められるだろう！」
「誰が？　おれたち？　それはないさ！　割り込んで食えよ。牛の大物をやるときは、ギロチンでやるんだろうな？　おれ、一度、ギロチンでやってみたいと思ってたんだ」
「それじゃ、処刑場がいるんじゃないか？」
「屠殺場がいるんだよ！」
「飼育するのか？　何百頭いる？　すげえなあ、狩猟の面白さを満喫したくなったぜ！」
「自分が、殺傷するのがこんなに好きだなんて、考えてもみなかったなあ」
「遊びじゃ嫌か？」
「この肉くねくねして枝にささらない。固く縛りつけろ。その大枝に、そうだ、それでいい、燻すんだよ」
　みんな、顔一杯にんまりし、少々水っぽい肉に旺盛な食欲、栄養をつけた思いで、臭いが鼻につきもしない。
「めしの種を稼ぐべきだという、大人らしい義務感をこれでも持っているのね、楽しんで眺めていられるわ」
　ノブは言いながらビンの栓を抜いてすぐり酒を飲む。落ち着き払って見せるが、酒でも入っている

のか、正気のかけこぼれた姿勢で蹲ってしまう。ノブは妊娠したのだろうか？

ヒゲは肢一本持って、骨の構造を見るために振り回していたが、焼肉のタレを振り撒きながら指揮棒のように振りはじめる。

克と広が一緒に灰と煙にまみれながら、火を護って屈み込み、雑木を櫓のように組み立てなおすと、雑木は生き返ったように炎を高々とあげる。

みんなは肩を寄せ合い火を囲んで無口になる。

原始の昔から、一続きの時間が休み無く刻みつづけ、炎の影でみんな個性を失い、似たようなものになる。

15　小さすぎる棺・アン

蒸し暑いほど焚き火をする暖炉があり、少女は半裸に近い上体を起こして、老婆たちにおそわりながら一日中縫い物をしたり、編物をしたり、産着をつくっている。ヒゲとニキビの二人はベッドを手

製にし、揺り籠まで手作りしている。室内を多少彼ら好みにごたごたさせた異様なすまいは、なにか幻影めいて、汚れて曇ったガラスを不器用に拭いた縞模様の透かしの向こうから、彼らが手を振ったりすると、総て出産待ちだといわんばかりのそわそわした様子が滑稽にもなる。それがまだ浅黒い涼しげな少女なのだから、男が二人いて、純潔が淫らな見世物じみてくる。

「まだまだずっと先のことを夢見ているんでしょう？　本当に温みのある子宮があって、なかに育っているものがあるのかしら？　あれで……」

ノブは言い、変に荘重な散歩をする。

「素手で生きると言ってたくせに、老人に負んぶに、抱っこで、家畜なみね！」

わたしも、それに歩調を合わせて、腕を浮遊する振り方でゆっくり歩く。

「だとすれば、わたしの方がずっと本物の妊婦という感じがするでしょう！　いい気で、夢見ているのかもしれないけど、信じさせてしまいましょうか！」

ノブは何時のまにか丸みを肉体に持ってきている。

このあたりは杉が多く、紅葉から敗走する心配もない。杉の葉が落ちて、その下は玉砂利、来たことがあって、来るのを避けている気がする。わたしは気がかりに足をとられ、リュウマチの老婆のように肢を引きずってしまう。

「アンの家の、わたしの家の焼け跡？」

さまざまな動物が冬ごもりをはじめている林の中で、老人たちが、さかんに揺れ動いて、墓堀をしている。
「人も冬ごもりだよ、土のなかにのう！」
そばで棺桶作りをしている老人もいて、克と広と、三人の女性が、文句をつけている。
「そんなに小さくては可哀想だよ」
「十万年は住む場所なんでしょう。蛙の冬ごもりとは違いますよ！　ここは、木の国なんでしょう！　木を倹約することないじゃないですか？」
わたしには、ここにいる人間達が異常な理解し難い生きものに見えてくる。
「この太り方、外から見て一本一本の骨の形が、はっきりしない人間なんてものは、暫く見たことがなかったぜ！　こいつら、食べ過ぎたに違いない。そのために死んだんだな？」
広が克に同意を求める。
「非難されても仕方ないな。人間の目に見えないけど、紛れもなく自分の一番大切な部分を、彼らは老人の食糧を奪って、肉をせり出して削り落としたことになるもの。そのいかがわしい肉の部分を切り落として、棺桶に詰めて葬ってあげろよ！」
――――そこの樹の下にアンがひとり、身体を揺すりながら、電気を帯びた髪を舞い上がらせてい

る。
「棺桶が小さすぎるんです」
アンが言う。
「棺？」
「そうよ。何時だって、棺桶の寸法が合ったためしがないのよ」
「どうしても、蓋がしまらん！」
「腕をへし折ったらどうかの？」
「首もへし折ったらどうかの？」
「首もへし折らなければ、入りはしませんわい」
「早く納棺してしまわにゃあ、硬直してしまうぞ！」
「腕も首もへし折るのが嫌なのかい、蓋がしまらなくともええじゃないか。これほど深く掘ってあるんじゃ、動物を心配することはない。腕を折るといったって、折った途端、蘇ったりしたら、どう言い訳をするかが問題じゃ」
悲痛な響きが、山に反響しつづけ、此処は山なのに、どぶん、ちょうど深い井戸の底に落ちたような音がする。
わたしは、アンに聞く、

「誰だったの？」
「殺されたのは、わたしの、大切なひとなの。わたしたちの、パパもママも殺されたのよ。サンも、覚えておくのね！」――――――――

いま、ここに、アンがいる筈もない。
「馬鹿な、もう言うな！　お誂えの棺桶などできん、棺桶などいらんわ。こうなっては生まれるものの方が先じゃ。何十年ぶりかで次々生まれる。この山国では子供は死に易いんじゃ、保育施設を作らねばならん」
「そういえば、町では、みんな棺桶にも入れられずに、処理されていたなあ。ひとりでに繭みたいにかたづいていたじゃないか。形式は守っているものに重要に見えるだけだ、面倒はいらないさ。土に帰るだけだもの。それより、おれたちは、この国に永住するための計画をたてて、動物を精肉にする屠殺場の設計をし、冷凍設備も欲しいなどと考えているんだよ」
広は女たちと頭を寄せあっている、女たちはすすり上げ苔色の髪を振る。
わたしは何体かの遺体に目を滑らせてしまう。死の町で屍体には慣れてしまっていた筈なのに、みたことで、慌てたわたしの身体はいましめを解かれて気体のように拡がってしまい、羽織っているマントを残して立ち上がる。

森を抜けようとすると、わたしの広がった分、森は縮まり、森の木々は互いに枝と枝をからませ、びゅんびゅん動いて枝を編む。幹で手を組んで、わたしを囲むようだ。

火事の実況画面を逆に回して、もとのさやに煙が収まるみたいに、拡がった気体の思いのわたしは、木々を避けて意気地なく縮んでしまう。

木の幹が曲がり、いぼいぼのついた小枝を横に張り出し、光の点線がとぐろを巻いてクモの巣をつくる。

その向こう、カチンと白い直方体が見えて、四角い箱が列になって行く。

「棺ですか？」

「保育箱には見えんかの？」

やや婆さんが数えている、

「保育箱なんて聞いたことないわね。木の国だから、育児用のベッドのつもりかしら？」

「誰がこんなに生むの？　アンの赤ちゃんのほかは老人だけだもの、怖い気がする……」

「これだけあれば充分じゃ」

わたしの履いているゴム靴は、わたしに大き過ぎ、ポンプのように空気を出し入れし、一足ごとに足の甲に吸い付いたり離れたりする。何時、この靴を履いたのだろう。アンの靴かもしれない。わたしはハダシになって森を駆け抜ける。木の葉も屋根も光を揺り返しては跳ぶ。

――――――静寂の中、調子をとって歩き出した、わたしの足音は全く響かない。わたしにおかまいなしに振動している柔らかい微粒子の流れがあって、それは藁屋根の下から、もうもうと、夜の空に向かって上がっている白い湯気、わたしは家に駆け込んでいく。

「しいっ！　静かにして下さらんか、いま、待望の赤ん坊の生まれるところじゃ。みんな、ここに集まって祝福しようと待っているところなんだ」

「何故、わたしには知らせてくれないの。わたしは、アンのたった一人の妹なのに？　何故わたしを一月も遠ざけていたの？」

出産の苦痛のためか、体中から搾り出す叫びを響かせるアン。老婆たちはその声に合わせて，背骨を引きつらせ指の先までわななかせる。

「待ったんだよ、とうとう、生まれるまで、もうすぐなんじゃ」

……アンのうめきで天井がひっかかれる。叫びに釣られた老婆たちが裂けるほど喉に力を入れる。わたしまで弓なりになり、怖さで泣きたいほどだ。

「かあっ！」

叫びが中途で途切れて、何の声も聞こえなくなる。

みんな呆然として、恐怖におびえた顔になり、引きつった両手で顔を押さえる。

「血が！　早く、わたしを火葬にして！　早く、ママの時と同じように、火葬にして！　わたしは、もう、死んでいるのだから……」
「アン！」
みんな自分の怯えた顔を優しく撫でて、溜息をつく。バケツでお湯が運ばれていたが、もうアンのうめきは聞こえてこない。一体どうしたのだろう？　わたしは我が家に飛び込もうとして老婆たちに押さえ込まれる。強靭な細い腕の鎖はわたしがどんなにもがいても微動だもしない。
「体力が尽きたんじゃろうか？　やっぱり、異常なんじゃよ、わしらの手には負えん。痛みで、気がふれたんじゃなかろうかの？」
老婆たちは言いながら、はっと、頭を上げ、すさまじい勢いで産室の方へ押し寄せていく。
やがて、次々に首を振り、その動作がわたしのところまでリレーされて来るが、意味が分からず、声を呑んでいる。まだそれの膨らみさえ気づかなかったのに……。わたしは居たたまれず外に跳び出している。わたしの影が、わたしが煙であるみたいに、黒々と泳いでいる、こんなことが……、振り返ると、我が家の屋根が、光と湯気をあげ、何倍にも膨れ上がり、薄紅色の入道雲になって立ちのぼる。雲の籠のなかのきらめき。
わたしは夢中になって家のなかの人たちを呼ぶ。
「ヤヤ婆さん！　ミミさまあ！　アンを、アンを助けて！」

上は燃えるが下は暗く、聞こえてくる音は、干からびたさらさらという音だけ。子猫のモモの泣く、か細い声。

人々のどよめきが数十倍になり、空気に厚い襞をつくる。

ヤヤ婆さんが産声をあげている白い布に包まれたものを抱えて踊り出てくる。後ろから、お湯をバケツに入れた老人とタライを持ったミミさまがつづき、みんな駆け出している。

高々と屋根が火を吹きだし、老人たちは駆けては振り返る。屋根は金色に輝き、藁の穂先を上向きに並べ、次にはそれを根こそぎにする勢いで左右になびかせ、屋根からすっぽり抜けた炎が空を突き、みじんに散って周囲にこぼれる。

わたしの足元に煮えた灰汁がきて、耳元で上っていく音、下がってくる音。その反響。

濃厚な煙に巻き込まれてしまう、焼けた空気から逃れ、生の空気を吸わなければ……。

幾つもの藁屋根が闇に映えている。

「どういうこと？　アンは何処？　みんな、アンをどうしたの？　みんな、気でも狂ったの？」

林のなかにも、さっきの干からびた薄笑いのような音があり、赤ん坊を追って老人たちが行き、わたしは木の根を蹴っている。

タライのなかで赤ん坊に産湯をつかわせているミミさまの不器用な手つき、タライの湯が滑らかな漣をたてて、赤ん坊の首まで打ち寄せている。

わたしは充血しきった肺や、目や、頭を少しずつ生き返らせ、海女の呼吸音そっくりの笛を長々と響かせる。
「熱い湯をさして、もっと、もっと」
老婆が代わる代わるタライに手を突っ込んで温度をはかっているが、タライから湯は溢れるばかりで、温度は上がらないらしく、寒さのなか、赤ん坊は曲がった背を見せて、ミミさまの手に巻きつき、押し殺されたように声をたてない。
「溺死させないでおくれよ！」
「大丈夫！　それより、風が来るから、みんな風上に並んで、風を防いでおくれ」
ざわざわとみんなが動く。
わたしは、ためらいつづけていて、またも、口ごもってしまう。
「アンはどうしたの？　アンをどうしたの？　みんなで……！　アンは何処にいるの？　何処にやったの？」
「あんたは変わりものだねえ、藁屋根は燃えやすいものなんだよ」
ヤヤ婆さんは、わたしの声が聞こえでもしたように、部落の方を指差して、首をすくめ、顔に皺の漣がくっきりとした波紋をみせる。
朝の光がきており、わたしは熱気みたいなもので身体をたたかれている。

「アンを家ごと焼いてしまったのね！　生きているのに、火葬にしてしまったのね！」
わたしは恐ろしさから、彼らを避け、腰を降ろしている倒木の端の方へ端の方へと移動し、そのために、木にかかる重みが不均衡になって、がたんと傾いてしまう。
赤ん坊は白い布に包まれて、ことさら赤黒くなった顔を、幾つかのコブの塊にして、髪が白い。壊れ物のように、老婆から老婆にわたり、胴上げでもされるように上げられ、下げられ，真綿を被せられ、毛布に巻かれて、長老のカントさんたちに囲まれる。
「息をしておるかえ？　」
「ほら、こんなに動いている！　こっそり、かすかに、息をするのがまだ、怖いんじゃ」
赤ん坊に手の届かないものも、手を宙に浮かせて夢中になっている。何故そんなに夢中になっているの？　そうまでして子孫を欲したのか？
「坊やの顔は誰に似てるかのう？　わしに似ておらんかの？　今のところじゃが……。そりゃ、後で父親を乗り換えるかどうかは、その時の容貌と、坊やの意志によってきまることになるだろうがの」
長老のカントさんが喜びで顔をくずしている。
「童子さまが帰って来られた！　ハッピーじゃの。もう心配はいらんわ」
「そうじゃ、そうじゃ、これで、この国も安泰じゃ。まだ、サンもおる、この国に滅亡はない！」
「バンザーイ、バンザーイ！　バンザーイ！」

何人かは古びた石綿の消防着をつけ、燃えカスのような手先で、木を伐りはじめる。
「早く保育箱を作らにゃならん、人間所詮、樹木に寄生して生きる動物、樹の根と葉で、天と地に連なっているんだよ！」
「わしらの童子さまを、抱かせてもらわねばならんの！　本ものの童子さまじゃ、サンにも抱かせてあげよう！　これからは、サンの時代じゃ！」
老人たちの目がわたしに絡みついて離れなかった――――――――

アンのいた証拠として、部落に子供が育っている……。わたしは走り抜けて崖の淵に立つ。喉が静かに鳴る。アンが言葉をさがしている。
深くて見えない谷底から、優雅な動物のように赤いガスが這い上がってくる。

16　誘拐籠

みんなが集まってみても、通じる言葉などある筈もない。わたしと、広とノブは栗拾いにでる。
膝まで埋まるほどの栗が、弾けて宝石のような栗色の光沢をみせる。
「考えられないことが、ここにあるなあ、こんなことが、現実だとは……」
広が栗をかごの中に満杯にして溜息をつく。
「昔の社会が現実にあるなら、これを送り出せば、一生くっていけるのになあ！」
「これは、彼等のもの、錯覚を起こすんじゃないよ」
ノブは厳しい。
「殆どは、自然に帰ってしまうのよ、鳥や、虫や、獣たちや、沢山の植物たちや、それに、微生物や細菌や、土を育てているんだわ。老人たちは決して、必要以上はとらない。共生社会なのね、その点だけは誇れるかしら……。それに、春が凄い！　幾つもの山が、それは、もう、黄色の栗の花で山盛りになるのよ。あの匂い！　まさに圧倒的な青春の臭気、ふらふら、くらくらしてしまうの。生物って凄いなあ、こうして、必死に繁殖しようとしているのかって、感動するのよ」
自分の立っている位置が気になり、わたしは妙な気分になる。栗は老人達と同じなんじゃ？
「そうかあ、オシベだろう、男は真剣だな！　その結実がこの栗なんだ？　すげーなあ。でも、惜しいことは惜しい！」
広が栗のいがを、スコップで飛ばしながら道をつくる。

「見て、見て！　見て！　栗の葉って、ほら、こんなに綺麗だったんだ。枯葉でも、まるで、ここの老人や老婆みたいなもんね」
　ノブが栗の葉を太陽にかざすと、栗の葉の虫食いの穴から陽光が差し込み、栗の葉が見る間に太陽に変身する。
「ノブも、そう思ってるの？　ここの人たち外人の血を引いているから、サンもだが、綺麗だよ。これって、言い伝えは真実だってことになるな！」
「さあ、先祖にそんな人がいたとは、聞いたけど、その血も、どんどん薄くなっている筈だから……。それに、広は、わたしのこと、美人でもなくスタイルもよくないって、確か、言ってたじゃん！」
「おいおい、変なことを根に持つなよ。克の出方を見ただけ、なんだからさ！」
「そうなんだあ、なんか意味深ね。それにしても、あの盃の大きいこと、みんな酒豪だらけよ、老婆も老人も。それで長生きしているんだね。一体何歳なのか？　見当もつかない？」
「酒が、また、また、うまい！　本当に酒呑国だなあ！　陽気な感じがいいじゃん。それに燻製もいいなあ、食ものが最も美味になるんだよ」
　広が目を細めて、わたしをみる。
　栗山から家まで、何度か往復する。栗山に向かう棚田には稲刈りのすんだ切り株を隠して、水が張り詰め、陽光が雲に反射して水面をとき色にきらめかせる。

十人ばかりの若者が広場に集まり、それを老人や、老婆が取り囲む。わたしたちは歩を止め、広場にいるものたちを見守っている。

広場には、もう、克がいて、A市から来た男女十人と、即興のダンス大会を開いている。例題はクモ、波、風、蝶だ。老人三人が、若者の命の破壊行為じみたダンスを、はらはらしながら見物していて、次第に陶酔してしまったのか、克たちに巻き込まれて動き、手なづけられて身体を回転させ、指をならし、たった三人の踊りで克たちを中央に追い詰めてしまい、へばった寝そべり踊りに押さえ込んでしまう。ヒップホップか、ストリートダンスとか、パントマイムの類だろうか？

遠巻きにしていた老人達がつぎつぎ加わって踊り始める。

それぞれの老人は、自分を軸にして回転していた、坂道に慣れた、山登りを厭わない強靭な体で。熱に浮かされ、バネで舞う命のダンスを、生涯現役の老人たちは、まさに地球の中心で踊っていた。

広場前の大きな家から見物していたヒゲとニキビが、しゃべりまくっている。

「……だから、言わんこっちゃない。おれたちには、まだ、体力が戻っていないんだよ。筋金入りの老人と、太刀打ちなど出来っこないさ。負けて、へばるのがおち！　おまえ等、屠殺場をつくる計画だってな？　笑わせんなよ、おまえ等の仲間が、へばって昨日、五人も死んだよ。今又、へばって死ぬさ、立てば分かる。一人二人は死んでいるよ！　へばれば山の木が、致命的な力を振るうものなんだ。山野を駆け回る彷徨を止めろ！　柵の位置をもっと内側に縮めてもらうんだ。おまえ等の領土は

一メートル四方、墓穴の広さだ。休息を探し求めてきて、やっと休息が可能になったというのに、そのことに気づかない、うかつな奴らだ！」
　その家の縁側に立っている彼等の中央に少女がいて、小さな襟のある手首のふっくらと、ふくらんだ服を着ているが、よく見ればウエストあたりが身体に合ってぴんと緊張している。
「あの人たち妊婦を抱えて身動きできなくなったもんだから、あんなことを言って、自分たちを慰めているんだわ。ああはなりたくないものね！」
　ノブの言葉に、広は一瞬わたしを見て、ほんのすこし目のあたりに皺を寄せるから、ノブはわたしに向き直って同意を求める。
「ねえ、どっちが父親なのかしら？」
　わたしは一寸当惑し、間をおき、
「もしかしたら……」
　ノブは軽蔑と羨望のまなざしで、三人を見る。
「でも、老人に手ごめにされるよりは、ましかもね。わたし、あの老人たちの粘つくような視線が気になるのよ。ことに、サンを見るときの異様さ！　克はわかっているのかしら？」
「わたし、北さんのこともあって、分かってきたの。老人たちは、カップルに手は出さない。彼等の欲しいのは、子供なんだもの。この国を支えてくれる子孫を何としても獲得したい、その為には何で

もやる、タブーはない！　それだけは、わかってるつもり……」
「そうなんだ、でも、何故、そんなところに、サンは帰りたがったのよ？」
ノブの声が大きくなり、広の手がノブの口をふさぎ、ゆっくりと頷いてみせる。
ダンスを止めた克たちは、なにやら頭を寄せ集めたと思うと、紙を半分に千切って、手のなかでカードを切るようにきって、次々集まってくる老人たちに、その半分を配り、克たちの持っている半分と、千切れたぎざぎざのぴったり合っている者同志が、孫と祖父母として契ることになる。互いに顔を見合わせて、ぞっとしているに違いないのに、克たちの素晴らしい辛抱強さのためか、老人たちの何十年来の夢であったからか？
抱き合って喜び合っている。
「なあ、みんな、表現しそこねて、手つかずの愛を、ここの老人たちにささげよう！　みんな死にましたから、おれたち以外の人間が恋しいんですよ」
何時もとは違う、人が人に持つのとも違う、弱い動物に対する理解と友情を、お互いに相手に対して持って、彼らは一体感が高まったのか、それぞれがペアになって、背負ったり肩を抱き合ったりして行ってしまう。
「とんだラブシーンね、半死半生の半ミイラには分相応な。老人はキス一つしないで生ませる力がありそうなのよ。老婆だって何なのか知れたもんじゃないんだわ」

ノブの唇がめくり上がる。
顎の張ったA市から来た女が、克と肩を組みながらいく。何を話しているのだろう？
「何故、克とあの女だけ、老人と組まないわけ？」
ノブがのろしをあげる。
「克をとりこにして如何しようとしているのかしら？　素性もしれないんだから」
「わたし、克を買いかぶっているわけではないのよ。でも、慌てることもないわ」
「何か、考えがあってのことさ、見物している方こそ、いらないおせっかいをしているんじゃないのか？　克は、老人と若者がどういう協同社会を築いていけるか、試行錯誤しているんだろう。行こうよ、サンは何故、興奮した顔をしているんだ？　克は北の事件の後で変わった。なんか芯棒が入ったって言う気がするな。多分サンが老人を怖がると思って、おれたちをはずしたんだろう！　または克自身、サンが老人に接するのが、嫌だったんじゃないかな？」
広こそ急に取って付けたような言い方をして、左右を眺め回している。
彼等の契った紙切れは放り出され、枯草の上を滑走しては、薄い紙の縁や角で立ち上がり、倒れずに回転し、走り出して、わたしの足元に向かって、助けを求めでもするように集まってくる。わたしの痩せてゆるゆるのジーパンが、いきなり膝と股でサポーターみたいに突っ張り、足を屈し手を広げて、それをかき集める。

それは紙幣で、何万も……わたしは欲張りの本性を現して押さえ込み、手掴みにして、コソ泥風に隠してみる。そうだ、もうこれでは何も買えなくなっているのだ。

町はやっぱり、舞い上がるクモ糸の上で、こんなものが一踊りしては飛んでいるのだ。

藪が動いて子猫のモモが唸っている。これは、リスになろうとしていた子猫じゃなかったか？　「お前、あいまいな生き物はよして、化けるなら猛獣におなり」

わたしは変貌する時間を子猫のモモと、ゆっくりと歩いていく。

何事が起こっているにしても、移動してしまえば口惜しさは浅くなり、みるみる薄れてしまう。

花の蕾を見つけて匂いを嗅げば、匂いとわたしの鬱積した気持ちを交換し、すっかり変身した気分になる。

「モモは何をぐずぐずしているの？　まだ毛並みが色づいてこないし、膨らんでもこない、モモは虎！わたしを餌食にするのよ、そーら、おあがり！」

か細い子猫は都会の街角に棄てられている紙くずのように、木の根元に蹲ってしまう。わたしもほぼ類似した姿勢で、ずっと遠くの騒音に耳を傾ける。

「モモにも聞こえているんだね」

子猫は艶のない逆毛を立てて、顔を細長い逆三角形にして怯える。

わたしのうずくまっている木の幹のなかから、騒音が発生するようだ。この下に町があるのかもし

れない、地下街の扉が開くまで、こうしていましょう。この化け物の木が、そのうち、わたしたちを生きたまま肥料にしてくれるなら、わたしたちは木に乗り移ってしまうことになる。

木になったら、突然、涙の味がするだろう。

黄色に色づいていた葉も褐色になって、梢が盛り上がり、一本で森をつくるほど大きな五百年は生きているという欅の大木をを見ている。１２３４５、わたしたちは五人、箱型の椅子に腰をおろして、じっと念じている。意志の力によって大木の生命力を奪いとること、生まれてからでは手遅れなのだ、生まれてから、子供の力を信じるよりも、いま自分の念力による胎教を信じて、空を見上げている。

生まれた後は自然にことが起こり、時が移ろうことになる。

口を半分あけて、ひとりが溜息をつくと、移ったようにみんなが溜息をつき、ときどき、ちらちら降る小判型の葉を頭や肩に止まらせる。わたしたちの想いによって、五百年樹の更に数百年生きるための餌食になりそうなのは、わたしたちの命。死んでさえ死を奪い取られてしまいそう。わたしが目配せすると、ノブも他の三人も、目で大木の腕に飛び込んでいく。無言であることや、身じろぎもしないことは、精神集中を示しているが、それによって、虚妄の悲劇を演じているなにか精神不在の催眠状態を招くことになる。

それがこなければ、嘔吐感がくる。わたしはもう大木を見るだけみてしまい、大木が幻影として見

えているなら、これ以上ここにいることもない。
「五百年も生きる子供を生産するんだって？　五百年なんて、死の地獄以上の地獄だということがわからないのか！」
「そんなことをいうのは、死の地獄に慣れているからなのよ」
「アンのことはいいさ。きみは、どうなんだ？　アンはサンなのか？　きみは、アンでいたいのか？　サンはアンなのか？　サンはサンなのか？　サンの子はムーンか？」
青空はそこにある。太陽も、きらめき、風はやさしい。
克の本心を見たあのときから、わたしは、完全に砦だった手の中から出ている。何故か、隠れる必要がなくなっていた。自分一人で身を護るのではない安堵感、そんなものかもしれない。
「アンの子はムーンか？　ムーンはサンの子でいたいのか？　サンは二人目の子を産むのか？　ムーンはアンか？　アンはアンでいたいのか？　サンの子はアンか？　アンは二人目の子を産むのか？　その子は五百年も生きておれを忘れるだろうか？　サンの子の親はおれか？　おれの子がムーンか？」
『サン、サンに手をだすな！』克の声が耳打ちする。それだけで満足だった。
『おれたちは結婚しているんだ、おふくろも立ち会った。サンに指一本触れさせないぞ！　おれの生きている限り、どんなことがあっても！』

あの日から克は変わったような気がする。わたしが変わったのかもしれない。老人も老婆も怖くはない。もう、手の砦のなかに閉じこもることもない。無意識に自己防衛を捨てている。

わたしが針を動かすと、中指のつけ根に近い手のひらの一点に針の頭がささり、つんと痛み、そこと電線で繋がれているように、上腹部の一点が、より敏感に強くちくりと痛む。手のひらの痛点と、そことの関わりに興味をもって、ちくちく縫ってみる、上腹部のその点から、痛みに溶解した内臓が溶けたバターのようにながれていき、もう鮮烈な痛みではなくなる。気がつくと針はぐにゃぐにゃに曲がり、そのため縫い目は曲がって、波形のうねりになる。

「火をくぐったことがあるみたいに紫色の針ね」

「アンの針を持ってきてあげたんだよ」

ミミさまが宝物でも数えるように、真新しい赤い針山に紫色の針を刺している。

「数えては使いましょうよ、使っては数えましょうよ針の数！　これはね、あんたのお祖母さんが当選した標語だよ。昔ね、針供養って日があっての。懐かしいなあ！」

ミミさまの瞼は重そうに水分を含んで透き透っている。蓋が上がり、青い目が現れる。

「ミミさま、あなたなら、知っているのね。あなたは何時もアンのそばについていたわ。わたしは、伯母さんのところで育てられて、ここにいたのは、伯母さんのお骨を持って帰ったあのときで二度目

だった。教えて下さい、アンは何故死ななければならなかったのか？　何故それを誰も引き止めなかったのか？　それを教えて下さい。わたしは誘拐されたとき、命がけで、老人たちに訴えたのに、何も答えは返ってこない」

「サンはそれを知るために、帰ってきたんだね」

「そうです。アンが毎日泣き続けているから、わたしは帰って来なければならなかったの……」

「そう、よく帰ってきてくれた。怖かっただろうに……」

ミミさまは、わたしの後ろから身を寄せると、そっと、髪を撫でた。かすかな揺らぎで、それとわかる。

「アンは老人に人気があったの、愛されていたんだよ。みんな恋人みたいにあの娘を愛した。だから一人でも先んじるものがいると、騒動がおこる。そこで長老のカントさんが考えて、順番制にしたんだ。孤島みたいな部落で、老人にも生きがいが必要だったんだよ、みんな肉親に捨てられていたのだから。愛情の対象として、アンの存在は大きかった。昼間は老婆が、夜は老人がアンの付き人になってね。始めはみんな喜々としていた、それぞれ楽しんでいたんだよ。わたしだって、綺麗な孫娘が出来て、アンに優しくしてもらって、それは、もう、ふわふわしていた。嬉しかった。アンも外見ではにこやかにして、出来るだけ、みんなに、平等に愛情を注いでいるようにみえた。酒呑国の直系としての自覚が、そうさせるのだとわたしたちは信じていたんだよ。しかし、本当は、アンはそれが我慢

できなかった、次々送り込まれる老婆に干渉されて自分を失う痛み。次々送り込まれる老人に愛される恐怖で、気がふれたのかもしれない。そんなとき、妊娠していることがわかったんだよ。親が誰かはわからなかった。誰も名乗り出なかったし、アンは沈黙を護っていた。そんな或る日、登山途中で迷いこんだ青年があって、アンはその男に夢中になった。老人たちは、妊娠させたことで、アンに負い目もあっての、青年を童子さまの位置につけた。ところが、青年はアンの妊娠を知ると、マスコミに売るといって脅迫するようになったんだよ。……青年が射殺体で発見されるのに、時間はかからなかった。それは、アンの初恋だった。その後は、あんたも知っているように、わたしと、ヤヤ婆さんがアンの世話係りになって、無事な出産のために心を砕いてきたつもりだった。火事は赤ちゃんが生まれ、臍帯が切断され、赤ちゃんにみんなの関心が移った、直後の空白、アンは狂ったように火をつけて回ったのよ。計画的な犯行だったから、可愛いそうだが、誰も助けなかった、いや、助けられなかった。アンが助かることを望んでいるようには、わたしたちにも、とても思えなかったからかね……」

ミミさまは話すと、長い長い溜息を吐き出した。一応、破綻はない、でも？

「でも、わたしは聞いたわ。わたしを火葬にして、ママのときと同じに火葬にして！　とアンが叫ぶのを……。アンは言った、わたしは死んでいるのだからって！」

「そう、聞いていたの……。アンの側から見れば、そういうことになるわね、恋人は殺され、老人の子供を生むのだから……。でも、こちら側から考えれば、アンを護ったつもりでいたのかも……」

「それは違います、アンを護ったのではないわ、この国をこの部落を護ったのでしょう！　老人たちは何としても、子孫が欲しい、欲しかった。その為には、なんでもする、なんでもした。国に部落ごと見捨てられた老人を縛る法律はない、すくなくとも、老人たちはそう思っているんでしょう。殺人も、暴行もやりたい放題だったのでは？　現在もまた……違いますか？」
「それは言いすぎだよ！　アンはサンなのかい？　サンはムーンをみて、何も感じないか？」
「何を感じるのを、あなた方は期待しているんです？」
「わたしだって、サンをみれば、可愛いと思う。愛しさが身内から溢れるように、込み上げてくる。だから、言い過ぎても、すぐに怒ったりはしない。それをサンは何だと思う？　血ですよ、同じ血が流れているからよ、だから許すことが出来るのよ。この国の富を、血縁のものたちに引き継がせたい、老人たちが、そう思ったからって、なにが悪いの？　捨て去った国や捨て去った者たちや、迫害した人たちに対する恨みがあるにしても……」、
「だからって、手段が悪辣すぎませんか？　誘拐、暴行、殺人までして……。それも、その、血の繋がっているという、身内まで……」
　ミミさまが急に陽気な笑い声をあげる。
「嫌だあ、サンだって知ってるじゃろが、わたし等の祖先は、酒呑童子だがな！」
「略奪、強盗、誘拐の達人だったとでも？　わたしは伯母から義賊だったと聞いてきたわ」

脈打っている、わたしの脳天に向かって急いで行く血の流れがあって、わたしの視界が赤一色になる。
「わたしらの祖先が、善人である筈なかろうがなあ、憲法だって放題憲法言うてのう、わたしらは自由なんじゃは、誰にも縛られん！」
「アンが針をつかってるところなど、見たこともなかったけど、何時かの火事でこうなったのかしら？」
わたしは落ち葉を焚いて、針を焼き、石畳の上で叩いて延ばし、水の中にじゅっといれる。
「固くなったわ、半返しに縫うのね」
憎しみそのものだと言うように、固くなった針が手のひらを刺し、またその点に重なる上腹部を縫う。わたしの体の任意の点と、ある点が、かかわりもなく遠いのに、二点が重なり合っているという、わたしの命の先めいた、この少し鈍いけれどもピカリとする針先が、なにかを縫いつけはじめる。
布と布を縫い合わせるのではなく、わたしの手を刺している針のメドの方から手に穴をあけ、対応する上腹部のそこに閉じつける。
わたしの錯覚ではなく、わたしの中で何かが起こって、胎児が本当に定着する。絶え間なく針が動いて糸をすいすい引いて縫い縮める。
「縫えているの？」

ノブがわたしの手もとをみる。わたしは、ためらいがちに手を上腹部にあてて、
「調子が悪いのよ」
「そんなポーズをすると、あなた、ちょっと子持ち女みたいに老けてきた感じがする」
「お互いさまね、いつか年齢と辻褄が合うことになるでしょう」

外は雪になって、みるみるつもり、地も木も山も膨張しつづける。克も広も外に飛び出して、わたしもノブも、わめき、雪に眼を開けたままで、口を大きく開けたり、閉じたりする。
空は目立って低くなり、自然が心安くなって、みんな、ありったけ愚かしげな顔をし、馬鹿な叫びをあげる。
見上げる空から、来る日も来る日も雪が降る。雪靴がジグザグ進み、雪に向き直っては戻る。雪以外の何にもぶつからない。
深い雪のなか、少女の要体が悪いと言って、ニキビがくる。
「心配なんだ、O型が一人もいないなんてことが、あるとおもうかい？　きみ、どうして不承不承というかたちで立っているの？」
わたしは筋肉反射でとびあがる。型ではない、克も違う。克は連日雪山を駆け巡って、風邪気味で、額を冷やしているが、鼻の上に湿布を落として、わたしに向かって嘴を曲げた鳥の顔をする。髪を全

部かきあげて顔がすっきりと広い。
「わたしたちは、これっぽっちも他人の血など欲しいなんて思ったことないのに、血を狙われている可愛そうで臆病な動物二匹ね。わたしは栗のイガで傷だらけになっても無事、そのあとの大変動もくぐり抜けた自信があるから、血の少しくらいなら何とかしてあげられるかもしれないけど、少女にしたところで、その身重の身体で世界のむごい事件の中心を平気な顔でくぐりぬけて来たんだから、身体に狂的な自信をもっているはずよ。彼らは素手の力で生きるといって、ひとの血などあてにしない筈だったでしょう？　だのにいま、老人たちの食糧を奪い、わたしや克の血の匂いまで嗅ぎ回っている！」
わたしとノブは好奇心に負けて老婆のマントを着て雪の外に出る。高いところから見ると彼等の家のなかは暗くてはっきりしないが、危険を感じさせる微妙な気配だけは見えている。
瀕死者のベッドに群がる嘆き婆の群れ？　近づいて眼がなれると黄灰色の高欄間、寺の本堂ほどの太い柱が見える。首を突き出して何かしているヒゲ。彼は医学の勉強をしていたと言っていたが……。喉を締め付け、ものを吸い込む声をあげると、わたしの口のなかに、わたしの顔がゆがんで抜け落ちていく。
雪の反射の具合か、そこにいる老人たちが眼窩を歯並でささえているように見える。毛、皮、肉、すっかり、あいまいなものが消し去られたうつろな骨の空間が、古代の賢人のように考え深いのだと

わかっている。わたしは町でそんな微笑でつかみ合いをしているのを見たことがある。それでなくてさえ、死でない誕生が珍しくて、手も足も炭化してしまいそうだというのに……。

光線の具合か老婆たちが横になり、薪のように積み重なって見える。

「O、O、O型が必要なんだ！」

招かれたように老婆が更に二三人なかに入っていく。

「死にそうだ！　死にそうだ！　死ぬ！」

「誰が？　血を採るんじゃ？　吸い取る？」

「吸い取られるものが、あの老婆たちにあるの？　歳よりは若いとは言っても？」

いくら絞り上げたって血が滲み出しそうもない老婆たち……。わたしの腕が大きな血袋であるかのように動く、ぶるぶるする。

「死んでいないよ……死なない……生きてる……生き返った！　老婆が死んだけど……もう一人死んだけど……」

声が聞こえて、わたしの身体全体が血液の入った大袋みたいに、どぶん、どぶんと波うち、その音が人を振り向かせそうだ。

人の死には慣れているけれど、殺すことには慣れていない。間接的ではあっても……。わたしのO型の血液が怒涛を打って、内部からわたしを告発するから、何食わぬ顔でそれをこらえるために、わ

たしは力を使い果たしてしまう。
ゆっくり、空中を舞っているのは名も知らない大きな鳥、林の精の棲家にも、大型の逆三角形に肩を怒らせ、辛抱強く何かを見守っている一羽がいる。
みんな冬ごもりした後なのに、死臭を嗅ぎつけて、町で死体を食べていた鳥が舞い戻ったのか、へいげいしている。黒い鳥が降るように舞い降りてくる。死んでも腐肉一つない老婆がなくなったのだと言うのに……。
「あちらの若者が錠を内からおろす前に、わしらが外から錠をかけて閉じ込めてしまうべきじゃった、どうなるか、分かりきっておるわ」
カントさんが当惑した表情から、強情な様子に変わる。
「若いということが、そもそも死刑囚なんじゃ。未執行の呑気な死刑囚になって、特赦を待つがよい！」
老人は唇の半分を歯で噛んで半分開けていう。
「内側から錠を下ろす方が呑気な死刑囚さ！」
家の中で広は、屋根裏で見つけた数十年前のカレンダーに大写しされている女優の道化じみた表情にウインクを送りながら、外の老人に応えている。
「顔が黒味がかるほど、混じりけのない眠りを眠るに限る、その間にわしは、独特のやり方で介抱するつもりじゃ」

「子孫が欲しいと言いながら、若い者は死に易いという信仰を持つのは、結局ここの老人たちは若いひとを呪い殺すのが趣味なんじゃないか？　やつらは少女が呪い殺されそうだと予知して、錠を中からかけたに違いないさ」

ノブは広の方に身体をしなわせ、その眼、唇、手に触れて、ピリリと子犬のような、甲高い声をあげる。

「行ってきます、邪魔の入らない今、そっと、食糧を運んでおくわ」

ノブもわたしを追ってくる、雪の細道を歩くと秘密の場所に伝わっていく足跡に見える。籠はスパイの偽装めいて、変に背中になじまずカタカタ背を打ち、落ち着かなくする。

ショールをかけた老婆たちが、泣く赤ん坊を抱いてくる。出来そこないの柄のない洋傘といった感じの帽子を被せ、一群になって興奮性の臭気を浮かべている。腕に抱かれた赤ん坊は数人の老婆の方向に顔を振り回されて、ブルルン、ルン、人間になるのかどうか思案中という表情をしている。ムーンはまだ歩き出さないのだろうか？　言葉は？

「育っているのね、甘やかされて、みんなに好かれて、大事にされすぎているのね、こんなに大勢に代わる代わる手を握られて、冷え切っているのね」

ノブ一人が陽気にムーンをあやしている。

「わたしはその手を握ってあげられない、わたしの手は、あの時の火事で、猛烈に意地悪くなってい

るんだから」
「サン、抱かせて頂きましょうよ、レッスンを受けておきましょうね」
ノブがムーンを抱き取る。老婆たちは大切なものを手渡した怯えで息を呑みながらも、抱きかたが可笑しいと嘲笑する。
「なれなれしいこと、何と安らぎのない目をして、今、眼をつまんであげるから、眠ってしまうのよ」
「今度は、サンあなたが抱く番よ！」
わたしはノブの動作を見ていて、自分の手を自分よりずっと後ろに組替え、漸く言葉を引っ張り出す。
「嫌！」
小さな声があがり、ムーンの安らぎのない目がつぶれながら、どさんとわたしの足許に落ちる。「ギャッ」という叫びが幾つとなく聞こえ、ボールを奪い合うラグビー選手みたいに、身体ごとわたしに叩きつける、老人の肩と頭と腕の数人分がもつれ合う。
「子供なんて五回や十回、地面や床に落っことされて、生きていくんじゃなかったかしら？」
ノブの言葉に老人たちは一斉に顔を見合わせ、泣きもせずにムーンは雪の上でポカンとしている。抱き上げ警戒心をあらわにし、老婆はうなじを伸ばし身体をくの字にして赤ん坊の顔を覗き込みながら移動していく、雪を踏んで沈みもしないで軽く。

「ムーンがさらわれた！」
やみくもに老婆たちが走っていく。
「鳥に？」
空に大きな翼をひろげる大鳥が、雲の上までおどろおどろしくしている。
「鳥じゃない、彼らだ！　攫っていって錠をおろしている」
「ムーンが殺される！」
老婆たちは彼らの家を取り囲み、わめき、次第に泣き声になり、次第にひっそりと沈む。小さな身体の老婆たちは首をメトロノームのように振り、胸の中心で拍子をとる。
白い屋根のその上、空に止められた標本の昆虫という形で引っかかっている鳥が高くあって、空の下で屋根が少しずつ沈んで、白昼夢に似た哀しみがくる。
家のなかから、ぼそぼそとしたはかない感じの赤ん坊の産声のようなものが聞こえてきて、それに引きずられて、みんなは動こうともしない。
みんなは彼らを呼ぶ。
「おまえ等、おーい、おーい、おーい。　大丈夫か？」
呼び声が肺の延長であるかのように膨れていって、樹の梢に串刺しになる。

家の中の産声は次第に衰え、
「ウェ、ウェェ、ウェーン、ウォォ、ウォーン、チュ、チェ、チチ、オオーン……」
わたしの頭の後ろから、大きな赤ん坊の声。気づくと何時のまにか、わたしの籠のなかに、ムーンが入れられていて、水色のあの目を8の字に絞って、大量の涙を降り飛ばしている。
わたしは全く心当たりがないのに、攫ってしまっている。
誰のいたずらか、わたしは慌て、不器用なこわばった動作で籠を降ろそうとするが、短いマントが引っかかり、ムーンの重さで肩に食い込む背負い紐がはずせない。
みんな放心し口を開けて、わたしを見ている。わたしの舌が結び目になって喉の奥に押し込まれる。自分の背負っている籠から、わたしは逃げるが、籠が背をばたばた叩き、泣く子が弓なりになってしまう。
いまにきっと真相がわかる。まさか、これをしでかしたのは克ではないだろう……。老婆たちの追ってくる足音が、わたしの脳と頭蓋を打ち、搗き固める音になる。克が間歇的な人格の分裂に侵されているとしたら……そんな気もする……その証拠に、ムーンにこだわっていた。
心臓が切れ切れに鳴る。何でもないのだ、これは偶然に起こったことなのだから、
「わたしを捕らえようとしているのなら、聞いて下さい。犯人がたまたま、わたしの籠に放り込んだのよ！」

籠の重みがさらに深いところに、わたしを引きずっていく。
「こっちに来るぞ！」
わたしの先回りをして立つ老人がいて、囁き合い、やや婆さんが進み出て、ムーンに微笑みかける。
後ろからも追いついている老婆がいて、
「靴下がとれて、足が籠からはみ出しているぞ！」
「下唇をそんなに裏返して泣き喚くと、顔が裏返しになってしまうぞ！　さあ、泣き止んで、そら、アンの長い髪を、その小さな手で握ってご覧！」
「早く籠ごと引き取ってください！」
わたしは怒鳴る、わたしは疲れている。
「そう、そう、そういうことになる、この方にすれば、あんたは生まれてこない方がよかったんじゃと……」
ムーンの重量で、わたしの肩が籠とスパークしているのに、何時ものすばやさを忘れて、なんとも、のろのろしている。
ついに、力尽きて座り込んでしまう。わたしの籠からムーンを抱き上げた途端、老婆たちは叫びをあげる。
「おお、新しい傷ができておる！」

「古いのも悪くなっているわ、るわ、るわ、るわ、る、る、る、るるるる」
老婆たちはムーンを囲んで一団になって走っていく、一直線に。
わたしに怒りの衰えた一つの均衡がきて、木の下、まだらな足跡の散る雪の上に腰を降ろし足を投げ出したまま、音を、言葉を紡ぎはじめる。
ムーン語は何語、ウェェ、オオーン、ウェェオオーン、チュ、チェ、チ、オオーン……。

17　克の出発

深々と雪に埋もれて、夜を潜り抜ける退屈がきている。来る日も、来る日も吹雪がつづく。雪に埋もれ、人間は家ごと山に抱き取られる。木の実がコチコチとぶつかり合う音の間に、遠いどよめき。これは聞きなれた音で、耳栓が、ふっと、とれたというような。ごく普通の日常の音が帰って来ている。木の実の入った箱の中を両手で掻き回し、音を掻き立て、もっとずっと近くで聞こえることを願

ってみる。昔の活気をこの木の実がもっているでしょう、まだあそこに本当の戦争があって、ここにだけ及んでいないのだろうか。
わたしは未だ様々なくさりで、がんじがらめになって、解放されてはいない。わたしは一人であっても、恐ろしいほどの数の人々を内にもっていて、そのために体も重く、目的も方向も定まらなかった。
「何処を見ているの？　わたしの手首のキズ？　何度も傷つけたから、見苦しいでしょう」
わたしは、慌てて引っ込める。
わたしの隠そうとする手は、まだ克に握られていて、そこが繋ぎ目であるかのように上下に動き回る。
「寒いから飲もうよ、米酒、ブドウ酒、麦酒、スグリ酒、梅酒ここには何でもある。密造酒だろうが……」
「克は、密造酒が気になるの？　ここは、行政外の独立国よ！　そうさせたのは、この国なの！」
わたしは驚く。ここから外に持ち出さなければ、そんなこと気になる方が、おかしい。
「おれたちの、小鳥ちゃんに乾杯！」
克はわたしの腹部に耳を押しあて、目を閉じ、胎内の心音に耳をすませていたが、頬を寄せたまま眠ってしまう。小鳥ちゃんは、克の快い眠りの下で、安らいでいる。

わたしを老人から、体を張って取り返してから、克は心が大きくなったような気がする。清濁あわせのむように、わたしがアンであってもサンであっても、構わないらしい。そんな気がする。わたしの内なるアンが、サンになりたいといい、わたしのサンは、かくれんぼがしたい、そんな循環で克はアンを愛しているのだ？

わたしは、ミミさまの話ですべてを納得しているわけではない。いずれカントさんと決着をつけなければならないと分かっている。そのとき、克や広やノブは立ち会ってくれるだろうか？

克が急に起き上がる。たった今まで幸福そうな寝息を立てていたのに……。

「お、おれの、おふくろは、おふくろは、年老いてしぼんでいき、やがて、ここにいる老婆たちほどに小さくなるよ。今、地下室に、こもって生き延びているだろうけど、あそこは木の根さえ枯れるところだ、いずれ救いに行く者がなければ死んでしまうさ！」

克は唐突に、話し出す、どもっているのは、何度も何度も、切り出しそびれた結果だと分かっている。

「遅すぎるわ、お母様を、救いにいく道があるとでもいうの？」

わたしは鏡の向こうを覗こうとする。雪の中でも風力発電で白色灯が明るい。

「崖のワイヤーは老人の手で切り落とされたし、おれたちの歩いてきた道もはじめから、なかったみたいに崩れている。おれは身体のなかから、おれの道を手繰りだしながら行くことにするよ、冬なら、

出来る。スキーがあるんだ！」
「あなたはここを見捨ててしまったの？　わたしを？　この子を？　見捨てるというの？　それも、お母様のために！」
「……」
「わたしはまだ、ここを見捨ててはいないのに。そんな、クモの糸みたいに自分から手繰りだす道など、すぐに切れて飛ばされてしまう！　手繰りだし終わったとしても、あそこでは、海面が上昇し、陸地の大部分は水没し、溢れたゴミが悪臭をはなって死者を追い駆けているのよ。生きている人はみんな、地下にもぐったって聞いたわ」
「馬鹿だなあ、おれが、サンや、子供を忘れるはずはないだろう！　子供の生まれる前には帰ってくるよ。おふくろを連れて。すべては春から始まるんだ。おれはカントさんと話した。そして、老人達から、ここを引き継ぐことにしたよ。決心したんだ……」
「そんな！　勝手な……」
　わたしは絶句する。
「出すぎたかもしれない。でもな、カントさんに聞いてわかったんだ。サンはこの国の直系の後継者だよ、そこで、おれは決心した。老人達の夢をかなえてやろうと思うんだ。ここに、夢の国をつくるんだよ。そのためには、母さんを連れて来なければならない。母さんはおれの良心だからね！」

彼の母はわれを忘れて克を妊もったことで、克の心の問題で悩んでいた。克はそんな母親を愛し、自分の良心だといいきる。
「みんなに、広やノブに、だまっていくの？　わたしがカントさんと決着をつけなければならないことを承知の上で、どうして、先手を打つのよ。そのときは立ち会ってくれると約束してくれていたのに……」
「カントさんには、きみのいないところで、真実を聞きただしたかったんだよ。だから、母を捜しに行く前に、話を聞くことにした。おれとしても、放っておくわけにはいかなかったからね。
でも、すぐ、戻ってくる。夢の国の建設のために、機械が手に入るかもしれない。ヘリでもつかったら、相当なものが持ち込めるんだ。最小限の文化を……」
「そんなことは止めて！　冗談でしょう！　ここを毒さないで！」
ふたりは何万年か前に人間が棄てた存在様式をおさらいし直していると言うように、囲炉裏の焚き火を囲んで、深刻で重大なことを瞑想して見つめ合っている。
「カントさんは、きみに話すと言っていたよ。怖がらなくていいんだ、みんなきみに期待しているんだからさ、少なくとも、敵じゃないよ！　それが分かったから、僕は決心できたんだ、行くとしたら、今しかないと！」
わたしは身重を忘れて、木の実をざあざあこぼし、掻き回し、音をかきたてる。音が遠くから一直

線にくるのがわかる。一歩ずつの歩幅のわかるギシギシという足音の重なりになって……。わたしは、眉に下がっている髪の二三本を、束ねたり散らしたりする。
吹雪の音、駆け込む足音。わたしは腹部を背に押し込んで、木の実を部屋の隅々まで散らしてしまう。
「ここに入って来ては駄目です。木の実の四散している範囲がわが領土。わたしは落ち着きなく首を左右にぴくぴく動かし、籠の中の餌をついばむ鳥のように、木の実を一粒一粒つついている。
広が顔を出し、
「克、なにかあったら、教えてくれよ。親友だろう！　おれ抜きに人生を考えるな。いいか！」
なにを感じ取っているのか、克に向かって親指をたてると、部屋に戻っていく。何のことだろうか、彼らには男だけのなにかがあるのか？　広まで行ってしまったら、どうなる？
「なんのこと？　お酒を飲む約束？　それとも？」
ノブが絡んでくる。
酒を飲むと、なにか前代未聞の荒れ狂う火事の中にいるように、天井や壁を通して、いたるところに靄が見える。総てを貫いているメスの先が、わたしの腹部に向かって突き刺さる。不快な予感ばかり、これが人類の生き残る術だというの？　引き裂かれる動物の原始的恐怖を知ることが……。克はわたしの手首を握っている、いま、克に肩を抱かれているが、つぎには叩かれ、引き落とされそうな

ショックを予感している。
自分であること、自分だけが自分でないこと、二つの孤独が、一つにまとめられ、つぎつぎくる出来事に対応して変化するばかりだ。
雪靴に足がかりがなく、夜の外に駆け出し、雪の中でわたしの左半身をふりかえる。振り返られるわたしの半身は真っ暗なのに、銀色の胎児を飾り、克の影と並んで歩くから、振り返った右半身は、さりげない風を装って雪を着て静まり、右足の下の大きく窪んだ足跡に合体し、左半身まで、次の一歩で、大きな深い左足あとに、滲みこんでしまい、わたしのあとに残っているのは銀色の胎児一つだ。
克はそれを雪玉でも握るように握って、屋根に向かって投げ上げてしまう、もう落ちてはこない。雪の中、わたしの大きな足跡二つを見つけて、老人たちは立ち尽くし、唇を吸い込み、蛇のぬけがらのような、干からびた手をもみながら、心行くまで見る形で見つめている。
時間が急速にすぎる、もしかしたら、一年も，二年も？
克がぱっと顔を突き出し、わたしと目を合わせるが、すぐに無関心に憮然として引っ込んでしまう。頭蓋骨だったような、唇がはためいていたような、からっぽの服の下から身体が蒸発していて、パイプと見えたのものも、尺骨であったような、さまざまな奇妙な印象だけが残留する。「行かないで、ここにいて欲しい！」
と、わたしが叫び、克を押さえ込んでも、空をつかむ眩惑。投槍の雨を降らす野蛮ないちずさで攻

撃してみても、克の傷口は星型に収縮し、反対にわたしが吸い取られていく。きらめく熱い想いなど、どこからもにじみ出ない窒息。

「何が気に入って、夢の国をつくる気になったの？　酒呑童子の埋蔵金を信じてでもいるの？」

何年も何年もまえから歌いつづけているような、ごく自然な唄声が聞こえてくる。女の声の繊細な旋律が歯のあいだから滲みでてさざめくのだ。急に楽器もかき鳴らされている。テンポが早くなる、ロックか、ジャズのようなものだ。

シューと湯が沸き、薬缶が動き回る。紅茶を飲むと体の芯まで暖かさが染みてきて、部屋一杯にわたしの顔が広がり、クリーム色の雲になって厚みを増す。ふっと通じてくる言葉があり、か細く話しているのはノブの声だ。

「広はずっとここにいて、ボスになる気持ちなどなくて、繁殖コロニーの種馬の役目を一手に引き受けようと、意気込むばかりなのよ」

「まさか？」

わたしはそっぽを向いて、今のままのわたしと、老人のいなくなった子供だけの奇妙な小国における未来のわたしと、二つのわたしを想い絶望感に陥ってしまう。

「どうした、アンの仏頂面！」やや婆さんが呆けたのか、わたしの名を呼び間違えている。

「その若者は、裸で憤然としているが、アンを見捨てて殺されたりはしない。母親が大好きだという

のは、アンもその子も大好きだということじゃ。わたしらを、忘れたりはせんわ。アン、心配はいらんぞ！」

明るい陽ざしの朝、誰も現れないうちに、克は切れていた靴紐を繋ぎ直し、締め直して身支度を終える。

「ひとりが身軽だから、気づかれないうちに行くよ」

「町には、なにが出来ているの？　なにが支配しているのよ？　壊されながらもビクともしそうにない機械が動き回って、もう、人の住むところじゃなく、なにかもっと違う計算高い社会が、地下に作られているに違いないわ。この戦争にも、戦勝者がいるのよ。捕まえられたり、殺されたりしない前に、お母さまの消息が分かったら、引き返してくるのよ。わたしのことを第一に考えていると言って！」

あばれる不安感にひきずり回されてしまう。ことの起こりなど何んだったかに関わりなく、運命が急激に変わってしまうことがある。克に背を向けてこうして立ち、もう、部屋から出て玄関に降り立っている克の、いなくなったうそ寒い空間をみてとって、大げさで哀しい孤独とひととき戦う。顔にかかる、ほつれ毛を結びなおす、本当は、この世にわたしたちのほかに、誰一人も必要ないのではないか？

「不恰好にもならずにアンは子供を生んだのよ」

「二人目を？」
「あなたの返事はとんちんかん、いつも間違って見せて、わたしの問いと交叉する答えをしてくれない。何も言わないの？　何か言って？　こう、ぐさりと胸に来る言葉を！　その一言があれば一生、生きていけるような……」
「とにかく行ってくるよ、出発の時は心がせくからね、もどってから話す。もうこんな時間だ、それじゃあ！」
「まるで通勤に遅れでもするようね、スキーで本当に行けるの？」
　克もわたしも首筋の長い優雅な影を雪面に落としていく、わたしはピラミッドの群れを見下ろしているが、足はもう指先を丸めて、凍傷になり、地上を捕らえる術を忘れている。
「こんな風に原始の女は身重で何時だって不幸だったのね」
　克がなにか言うのを待って、わたしの全身が紫色になるほどの時間、息を止めて、口に一杯吐息を詰め込んだままでいる。
　妹を可愛がりながら、まるで関心のない返事しかしない兄のような様子で、克は三階で見つけた古い地図を覗き込んで歩いていく。全くこれからの孤独や危険を悩むふうもない。
「いまは、なごんでいるけれど、山の向こう側は、まだ雪が爆発し雪崩れているのよ」
「な！」

彼は際限もなく速くストックを回していく。わたしは、ほんのちょっと気を失って水平感覚を欠き、もう言葉では何も望まず。見えている限り彼を見る。

克はここの地形を分かりすぎるほど分かっているらしい。わたしは両腕を宙に上げようとする、振ろうとする。

「な！」

克は振り向いたのかもしれない。な！　一音残して……。わたしは何故ここに、ひとりでいるのか？説明が面倒になってくる。緊張のあとで緩みきっている頭は、早々に眠らせてしまうに限るが、寒いから理性を失わないように、穴を穿たなければ凍死する。

二時間後、広がいて、一度被った帽子をかなぐり捨て、もう一度拾い上げて雪をはらい、おもむろに被り直すと、克の後を滑っていく。わたしなど見えないというように。「何故！」

わたしは雪の傾斜を歩いて、つづく白い藁屋根を踏みしめ、空に向かって大の字に寝る。

陽がさして、屋根の上のわたしが口を開けると、雪の縁の藁がきらきらしてサファイア色に黒い筋が通り、その回りは褐色の斑紋をつけたレモン色に見える。唾液の波、百ものピンクの喉ピコの跳躍。冬空は漣を起こしながら胡粉のような雪を生んでいく。

粉雪の一粒ずつを見つめる。小さな眩暈の渦、二つ、三つ、父の膝でパイプの煙の輪を待っていた昔のように、無力の記号、眩暈の輪を、幼い甘えで数えている。

眩暈の渦は親鳥の羽根の下に入るヒナのように戻ってくるから、わたしは両手を広げて、藁の上に押さえ込む。克のいなくなった空虚をすっかり満たしている大きな眩暈。独りぼっちだというのに、こんな眩暈でわたしは満ちている。「な！」

雪の背からぬくもりがきて、身体のなかに芽生えている澄んだ青い眩暈もある。いま、克が寒波に襲われて凍って粉末に成り果てるにしても、わたしは克の魂の隠れた場所を見つけたように目を見開いて、わたしの中の澄んだ青い眩暈を捉えれば、それでことがすむような、ゆったりとした大きな揺らぎに、登りも降りもせずに上を見上げている。

18　対決

「わたしたち、こんなに静かにしていても動物だなんて、不思議ね」

わたしが手を延べると、ノブはゆっくりとベッドの上で起き上がる。あれから何日たったのだろう、揃って外に出る。

白い日がくの字に体を伸ばし、雪の上に死体になって転がっている。空気が希薄になり呼吸できない。自然まで敵意にみちて、二人の歩みを遅らせる。わたしたちの前を数人の老人たちが歩いていくのが見える。背の高いのはカントさんだ。彼は常に三四人の老人を従えている。戦慄が走る、ノブが振り返った。それが合図のようにわたしはやみくもに行動へと急き立てられる。わたしとノブは逡巡し、かすかに揺れている。

「カントさんは、古ぼけた形式のお化けに支配されて、中身のことなど何時だって忘れていたのよ。ぶつかってみるわ！」

「ＯＫよ」

ノブは顔しかない花のように、陽気に顔を振り回している。

老人たちは広場の前で振り返った。わたしが歩を止めると、彼等は一歩前にでた。

「この国の住民には、真の自由が保障されているんだ、それは知っているな！　何でも言いたいことがあったら、言ってみなさい！」

カントさんの声が響く。わたしの鼓動がめくらめっぽうに、叩きまくる。ノブがわたしを抱きすくめる。

「大丈夫よ」

「そんな、綺麗ごとを言って。この国の住民には、魂の自由が保障されているなんて、そんなこと信

じられない。何処に本当の自由があるのよ！　この国には人を殺す自由も認められているんですか？　答えて下さい！」

わたしは激情にかられて叫ぶ。喉がひっくり返って血が流れ出し、口の中が生臭くなった。

湧き上がるような足音はこの部落の住民の足の数を遥かに越えているように思える。わたしたちが前に出ると、老人たちは後退する。

「この人たち、怯えているわ」

ノブが耳元で囁く。

「わたしの、父や母を殺したのは誰です？　アンまで焼死させたのは誰です？　アンは誰を愛していたのよ？　アンは誰に愛されていたの？　アンは、あなたたちに手篭めにされ、老人の子供を生んだの？　その証拠にアンの子供は白髪じゃないの？　アンは老人を生んだの？　アンは恥じていたの？　血縁の老人を愛したことを？　老人たちに愛されたことを？　でなくて、何故、アンは死んだの？　何故誰もアンを救わなかったの？　誰があの家に火をつけた？　人殺し、わたしのパパとママも、あなたたちに殺されたのね？　アンがそういっていたもの、あなたたちは一体何をしているのよ？　血縁の子供として、わたしは、それが知りたい！！」

老人たちが囁いている。

「アン！」「アン！」「アンだ！」「アン！」「アン！」「アンが帰ってきた！」「アンだ！」「アンが戻

ったんだ！」「アン！」「アンだよ！」
囁きが増幅し、震えながら拡がっていく。
「万歳！　アンだよ、アンが帰ってきた！」
わたしは縮みあがる。またもこれだ、わたしをアンと誤認しようとするたくらみを、見過せない。
カントさんが前にでる。右手をあげ、みんなをなだめるようにゆっくりと降ろす。
「彼は、克は行ってしまったか？　そうか、行ったのか！」
暫く、考えるように足許の雪を踏みしめてから、顔をあげる。
「わしは、克と約束をした。サンに説明することを！　どこから、話したらいいのかのう？　おまえの父親の話からはじめよう。　考えてみろ！　この国の住民にはいかなる自由もある。おまえの言う殺人の自由も、自殺の自由も、強盗の自由も、逃亡の自由もだ。それがわれわれの先人の理想だったからだよ。だからといって、それを、すすめたわけではないんだ、それは、魂の自由が保障されているということなんだよ。わかるか？」
「そんな馬鹿な！」
「そうかもしれない、しかし、わしらにとっては夢だったのだ。ここで、おまえの父親の話に移ろう。おまえの父親はみんなに愛されていた。彼と共に生活することがどんなに、われわれにとって、楽しく、輝かしいものだったか。おまえたちに分かる筈がない。みんなもまだ若かった、そんな、幸福な

日がずーと続くものだと思っていたんだ。ところが、或る日、彼はみんなを集めて、ここから、出て行くと言った。妻と二人の子供を連れてだ。一人はアン、一人はサンだった。彼は黙って出ていけばいいものを、みんなに了解をもとめたんだ。サンも知っていると思うが、彼はこの国の直系の後継者だった。酒呑童子伝説にちなんで、童子さまと呼ばれていた。彼としては責任あるものとして、みんなの了解を得たかったらしい。みんなは必死で引止めようとした。老人や、老婆や、仲間や、子供までが、童子さまに訴えようと、泣きながら、口々に叫びながら、むらがるように押し寄せていった。もみくちゃになって、わしが引き止めようにももう、引きとめようがなかった。わしの視界の中で、童子さまが見え隠れしていた。みんな泣いていた、童子さまも泣いていた。子供のために、アンやサンの将来のために、出て行くのだと彼が叫ぶのが聞こえていた。行かないで！　止めて！　頼むからここにいて下さい！と皆が泣きながらすがり付いていくのが見てとれた。誰かがつまずいたのかもしれない。彼がそれを助けようとして、かがんだような気がする。次の瞬間みんな将棋倒しになって、彼の上に音をたてて倒れこんだ。それが彼との最期になるなんて、誰も考えてもみなかったんだ。まして……」

そこで、カントさんは息をついだ。冷気がわたしを持ち上げる。

「童子さまは死んだ！　押し寄せたみんなの下敷きになって、圧死だった」

「そんな！」

血液が下半身に音をたてて下降していき、わたしの口が言葉を探して泳ぎ回る。
彼の言葉のあとには、嗚咽が必要だとばかりに、老人の間から嗚咽が洩れ出ている。殺人の後でなぜ泣く。嗚咽が波になって、高く低く上下し、わたしの増大しようとする両手がノブの体で必死に押さえ込まれていた。
雪が降ってくる。カントさんが空を仰いだ。
「サンの母親は恐怖と、哀しみから。町に逃げようとし、サンをまず、伯母のところに送り込み、翌日、アンと脱出しようとし、その夜、火事で焼死した。アンは住民によって何とか助けられた。夫を追って自殺したのか、失火だったのか、放火だったのか、分かっていない。どのようにとるのも自由だ、わしらはそれに反論はしない。個人的には可哀想なことをしたと、何とか相談にのってやるべきだったと悔いている」
雪が降り積もる。広場のまえの家から、ヒゲと、二キビが、玄関を開け、老人たちを招き入れていた。少しずつでいい、血液をとらせて下さい、ニキビの声が聞こえる。ヒゲが怒鳴る。
「そんなところに、立っていたら、死んでしまうぞ！　こんなところでする話じゃあるまいが！」
広場には、カントさんと、わたしと、ノブだけになった。
「アンはわしらの娘だった。みんな、アンを愛していたんだ。アンはお産のときの出血多量で死んだ。

異常だったのだが、医師を呼ぶことは出来なかった。またも、わしらは手助けすることができなかった。アンはわしらの子供を産んだ。みんなの子供だと思っている。ムーンはアンの子供だ。アンは戻ってきた、アンはサンとして戻ってきたのだ。恨みをはらしてもらいたくて、アンがサンを導いたのではない。ムーンをサンの手に拓したかったに違いない。克はそれを理解したよ。だから、彼は必ず戻ってくる。この国の富は手つかずのままだ。それはいつか、力になるだろう。よき友にも恵まれているようじゃ。わしらは克の戻るまで、サンを助けていくことにした。これで全部じゃ！」

静寂がこの山国を支配していた。みんなが、老人達もヒゲの家から聞き耳をたてて、わたしの言葉を待っているのだ。

「先祖の開いた、この理想的な自由の国で、わたしに、わかったのは、直系の子孫にだけはない、自由を求めて、パパもママも、アンも、生涯をこの山国で終えたのだという事実……。父も母も、アンも、住民によって殺されたのよ。しかも、そのとんでもない理由は、みんなに、愛されていたから！わたしは、それを、決して許さない！　決して忘れない！」

19　相似形

夜中、わたしを見つめるヤヤ婆さんに、眠っている静かな印象を与えようとつとめ、やっと、昼の輝く光が細く戸の隙間から射し込むと、改めて夜と違う夢番のいない昼の眠りに入る。目を開けていても眠っていられるような、独りの昼がきて、無意識の真っ只中にいると言うのに……。またも、

「嘆いても始まらぬことじゃ……」

わたしは無理に引っ張り起こされる。手に全体重をつるし、胸から頭を後ろにのけぞらせ、首にコキンと衝撃を覚える。

「もう、アンも二人目の子供、前ほどの心配はないよ！」

老婆にありがちな、しつっこい思い違い。わたしはそれを軽くいなし、二三秒眠りを加え、わたしにもう一つの生存を呼び寄せる陰謀の手助けをしようとするのに、またもヤヤ婆さんの声が散歩にせき立てる。

わたしは久しぶりに、家の中を廊下から部屋へ、部屋から部屋へ歩き回り、ノブを呼んでみる。

「この間は有難う、疲れて寝ているのね？　ああ、わかった、あなたも赤ちゃんが……」

返事はない。何処に行ってしまったのだろう。

木々の枝先が、まだ芽吹かないのに煙っている、誰もいない。風も吹かない。ただ遠い不確かな地

底から、谷川の流れの音が時間の刻みのように聞こえてくる。人声が欲しくなる。
「あの欅の大木は誰かの私有なのかしら？」
「あんたの木じゃ」
「つまり誰のものでもないと言うことね、考えて見ると不思議なんだけど、あんなに大きな木が以前からあそこにあったかしら？」
「昔からあったよ？　あんたは若かったから、気がつかなかったんだろう。もう、あんたも二人目のお産、そろそろ、生も凝縮して密度の濃いものになるの。木を見るのに力がこもり、これからは、どの木も大木に見えてくるばかりじゃ」
「二人目ではないと言っているのに、わたしをアンだと思いたがるそんな気持を、ときには優しく受け入れてあげても構わないけど、わたしはわたし以外の誰にも、わたしを引渡しはしないわ。死者であるはずのあなたのアンを、わたしの同情によってこの世に救いだそうだなんて！　もっともっと木に近づいて、ぼんやり見えている梢の先まではっきりと見て、そんな幻影を追い払ってください！」
「アン、夫に逃げられたからと言って、悲観することはない。二人目を生めばもう、若者と違い、健康になって、この山でわたしらと同じ長い人生が待っておるのじゃ！」
　これはアンへの賛歌か？
「わたしと関係のない、あなたたちの世界のことだわ」

わたしは懸命になって、アンへの言葉を押し返すが、老婆の言葉は、わたしに、もう一つの生存を呼び寄せる穏やかな節回しになってつづく。
「一人目の子供を嫌うのは、二人目の子供に対しても慎みのないことじゃ」
「わたしはわたしの残りの半生をなおざりにして、他人に成り代わりたい気持ちもあるの、後生大事に自分に閉じこもることもなさそうに思えてもくるもの。アンを迎え入れて、子供を産むべき身体をアンに譲り渡し、わたしは体温のない冷ややかな幸福へ軽々と誕生する。そうさせていただけるならば……」

つるでゆるゆる締まらないやりかたで、ムーンを木に括りつける。背負い紐で母に括りつけられているように木にぴったりくっついて、ムーンは動かない。わたしは暫くじっと見つめ、深い気絶があった後のように自分から自分が根こそぎにされている心細さでうろたえている。どの木にも、この山国に生を受けた誰かが、ひそんでいて、今にもわっと、飛び出しそうな気配がある。
それも消えると山奥らしい静寂がきて、どの木も勢いよく伸び、上の幹と下の根で、天と地に連なって交じり合う。
わたしの目の前、大木の太い幹から静脈が透けて見える、妊婦のものらしい腕が突き出し、その開かれた手には、何一つ握られていない。アンの子供のムーンが小さい手を伸ばしてそれに繋がろうと

し、その木の似姿になって、くくられたまま、あの木にいる。

わたしは目も口も全開にして、いま静かに山を這い登り、木々を包んでいく霧を呑む。

つづく